仙台市文化財調査報告書第252集

大野田遺跡

第2次発掘調査報告書

2001年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第252集

大野田遺跡

第2次発掘調査報告書

２００１年３月

仙台市教育委員会

序　　文

大野田遺跡は、仙台市南東部の太白区大野田に広がる面積約1万6,000平方メートルの遺跡です。古くから縄文時代の土器や石器が発見される遺跡として知られていましたが、平成5年から6年にかけて実施された都市計画道路「川内・柳生線」の建設に伴う発掘調査によって、縄文時代から古墳時代、古代にかけての遺跡であることが明らかになりました。なかでも縄文時代後期前半の貴重な資料が多数発見されています。川原石を並べた組石状の配石や、墓と考えられる配石遺構等とともに、日常使われた土器や石器のほか、土偶、異形土器、石刀、翡翠で作られた垂飾品などの祭祀に関連する遺物も多く見つかり、墓域と祭祀の場が一体となった場所であったと考えられます。

このたびの発掘調査は太白消防署の出張所建設に伴うもので、「川内・柳生線」の西に隣接した場所にあたります。調査の結果、「川内・柳生線」の調査で確認されていた河川跡の延長部分にほぼ相当することが分り、縄文時代の遺構や遺物包含層は見つかりませんでしたが、古代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡などの遺構が確認されています。

現在、仙台市内には700箇所を超える遺跡が知られています。このような先人の遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは私たちの責務です。今回の開発によって遺跡の一部が失われるのは誠に残念なことでありますが、調査の成果を普及活動の資料として生かしていくことも遺跡の保存活用のひとつと考えられます。今回の調査成果が国民共有の財産として広く活用され、文化財に対するご理解の一助となれば幸いです。

発掘調査および調査報告書の刊行にあたり、多大のご協力とご理解を賜りました多くの方々に心から感謝申し上げ、刊行の序とします。

平成13年３月

仙台市教育委員会

教育長　小　松　弥　生

例　　言

1．本報告書は、仙台市教育委員会が実施した、太白消防署長町出張所建設に伴う大野田遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。調査成果の一部については、すでに文化財年報、文化財展などで公表しているが、本書の記載内容がそれらに優先する。

2．報告書刊行のための整理作業は、佐藤淳・高橋綾子の補佐を得て、荒井格・赤澤靖章が担当した。

3．本書の編集・執筆は荒井格が行った。土器については赤澤靖章の観察結果をもとに執筆した。

4．陶器・磁器は、佐藤洋氏（仙台市博物館）に鑑定して頂いた。

5．石器・石製品の石材については、石川賢一氏（東北大学）に鑑定して頂いた。

6．発掘調査および整理作業、報告書作成に際し、次の方々、機関より多くの指導・助言を賜わった。記して感謝の意を表する。

吾妻俊典（宮城県多賀城跡調査研究所）佐藤洋（仙台市博物館）　石川賢一（東北大学）　仙台市博物館

7．調査・整理に関する諸記録、実測図面、写真（モノクロ・カラーリバーサル・ネガカラー）および出土遺物などの一切の資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．本書で使用した国土地理院発行の地形図には、図名、縮尺を明記した。

2．図中および本文記載の北は、すべて真北である。

3．本書中の土色の記述には『新版　標準土色帖　15版（1995年版）』（小山正忠・竹原秀雄　1995）を使用した。

4．調査によって検出された遺構については以下の遺構略号を使用し、各遺構ごとに番号を付与した。

SB　掘立柱建物跡　　SD　溝跡　　SI　竪穴住居跡　　SK　土坑

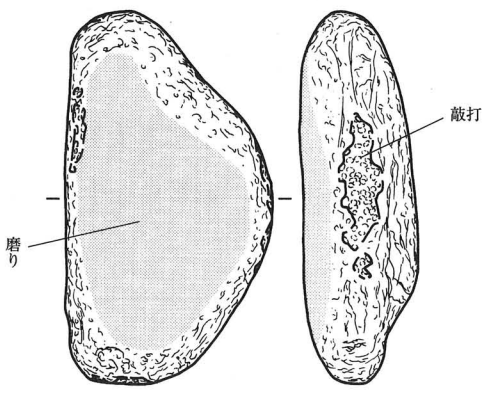
SX　性格不明遺構　　P　ピット

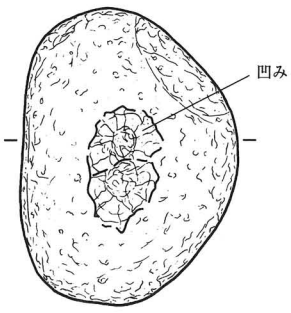
5．出土遺物の登録には以下の遺物記号を使用し、各遺物ごとに番号を付与した。

A	縄文土器	C	土師器（非ロクロ）	D	土師器（ロクロ）	E	須恵器
I	陶器	J	磁器	Ka	打製石器	Kc	礫石器
Kd	石製品	P	土製品				

6．土師器のスクリーン・トーン貼り込みは黒色処理を示している。

7．礫石器は使用による痕跡が残された自然礫である。使用の痕跡については以下のように表現した。





目　　次

序　文
例　言
凡　例

第1章　調査に至る経緯 …… 1
　第1節　調査原因 …… 1
　第2節　調査要項 …… 1

第2章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第1節　遺跡の位置と地理的環境 …… 2
　第2節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 2

第3章　調査の方法と概要 …… 5
　第1節　調査区の設定 …… 5
　第2節　調査方法 …… 6
　第3節　調査経過 …… 6

第4章　基本層序 …… 8

第5章　検出遺構と出土遺物 …… 10
　第1節　掘立柱建物跡 …… 11
　第2節　竪穴住居跡・竪穴遺構 …… 18
　第3節　土坑 …… 32
　第4節　溝跡 …… 37
　第5節　性格不明遺構 …… 39
　第6節　小溝状遺構群 …… 42
　第7節　基本層出土遺物 …… 46

第6章　まとめ …… 50

参考・引用文献

挿　図　目　次

第１図　大野田遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 … 3
第２図　調査区位置図 …… 5
第３図　グリッド設定図 …… 7
第４図　調査区南壁断面図 …… 9
第５図　遺構配置図 …… 10
第６図　ＳＢ１掘立柱建物跡平面図・断面図 …… 12
第７図　ＳＢ１掘立柱建物跡出土遺物 …… 13
第８図　ＳＢ２・３掘立柱建物跡
　　平面図・断面図 …… 15
第９図　ＳＢ４～６掘立柱建物跡
　　平面図・断面図 …… 17
第10図　ＳＩ１竪穴住居跡・ＳＩ４竪穴遺構
　　平面図 …… 19
第11図　ＳＩ１竪穴住居跡断面図 …… 20
第12図　ＳＩ１竪穴住居跡出土遺物（１） …… 25
第13図　ＳＩ１竪穴住居跡出土遺物（２） …… 26
第14図　ＳＩ１竪穴住居跡出土遺物（３） …… 27
第15図　ＳＩ２竪穴住居跡平面図・断面図 …… 28
第16図　ＳＩ２竪穴住居跡出土遺物 …… 29
第17図　ＳＩ３竪穴住居跡平面図・断面図 …… 31
第18図　ＳＫ１～10土坑平面図 …… 33
第19図　ＳＫ１～10土坑断面図 …… 35
第20図　土坑出土遺物 …… 36
第21図　ＳＤ２・３、ＳＸ１～３平面図
　・ＳＤ１～３、ＳＸ１～３断面図 …… 38
第22図　ＳＤ１・２溝跡出土遺物 …… 39
第23図　小溝状遺構群（北半部）平面図 …… 40
第24図　ＳＤ１溝跡・小溝状遺構群
　　平面図（南半部） …… 41
第25図　ＳＤ１溝跡・小溝状遺構群断面図 …… 43
第26図　小溝状遺構群出土遺物 …… 44
第27図　基本層出土遺物（１） …… 47
第28図　基本層出土遺物（２） …… 49

挿　表　目　次

第１表　調査区南壁土層注記表 …… 8
第２表　ＳＢ１掘立柱建物跡土層注記表 …… 13
第３表　ＳＢ３掘立柱建物跡土層注記表 …… 14
第４表　ＳＢ５・６掘立柱建物跡注記表 …… 16
第５表　ＳＩ１竪穴住居跡土層注記表 …… 21
第６表　ＳＤ１溝跡、小溝状遺構群土層注記表 … 44
第７表　東西方向の小溝状遺構群計測表 …… 45
第８表　南北方向の小溝状遺構群計測表 …… 45

写　真　目　次

写真１　遺跡周辺の航空写真 …… 55
写真２　全景 …… 56
写真３　調査区南辺トレンチ …… 57
写真４　ＳＢ１掘立柱建物跡（１） …… 58
写真５　ＳＢ１掘立柱建物跡（２） …… 59
写真６　ＳＢ１掘立柱建物跡（３）、ＳＩ１竪穴
　　住居跡（１）・ＳＩ４竪穴遺構 …… 60
写真７　ＳＩ１竪穴住居跡（２） …… 61
写真８　ＳＩ１竪穴住居跡（３） …… 62
写真９　ＳＩ１竪穴住居跡（４） …… 63
写真10　ＳＩ１竪穴住居跡（５） …… 64
写真11　ＳＩ１竪穴住居跡（６） …… 65
写真12　ＳＩ２・ＳＩ３竪穴住居跡 …… 66
写真13　ＳＫ１・２・３・４土坑 …… 67
写真14　ＳＫ５・６・７・８土坑 …… 68
写真15　ＳＫ９・10土坑、ＳＤ１・２溝跡 …… 69
写真16　ＳＤ３溝跡、ＳＸ１・２・３
　　性格不明遺構 …… 70

写真17　非ロクロ土師器・ロクロ土師器－坏－ … 71
写真18　須恵器－坏－・非ロクロ土師器－甕－ … 72
写真19　非ロクロ土師器－甕－ …… 73
写真20　縄文土器・土製品 …… 74
写真21　石器・石製品 …… 75
写真22　石器・陶器・磁器 …… 76

第1章　調査に至る経緯

第1節　調査原因

大野田遺跡は、古くから縄文時代後期の遺物が発見されることの知られていた遺跡であり、1993年から94年にかけて実施された都市計画道路「川内・柳生線」建設に伴う発掘調査では、縄文時代後期前半の包含層と2時期の遺構群が確認され、古墳時代および古代の遺構も検出されている。

今回の調査は太白消防署の長町出張所建設に伴う事前調査であり、調査対象面積1,500㎡のうち建物範囲の620㎡について発掘調査を実施したものである。長町出張所建設用地は都市計画道路「川内・柳生線」に隣接していることから、「川内・柳生線」建設に伴う発掘調査の結果とほぼ同様の時期および遺構の存在が想定された。

調査は事務所の設置が完了した平成12年6月1日に着手した。

なお、この地域周辺では今後も開発に伴う発掘調査が予想されることから、調査成果や地点等の混乱を防ぐため、「川内・柳生線」建設に伴う発掘調査を第1次調査とし、今回の調査を第2次調査と呼称することとした。

第2節　調査要項

遺 跡 名：大野田遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－112、宮城県遺跡地名表登録番号01094）

所 在 地：仙台市太白区大野田字袋前14－3の一部ほか

調査期間：2000年（平成12年）6月1日～9月22日

調査主体：仙台市教育委員会

教育長　小松　弥生

調査担当：仙台市教育委員会文化財課

課長　大越　裕光

主幹兼調査第一係長　田中　則和

調査担当　荒井　格　佐藤　淳

調査面積：620㎡（調査対象面積　1,500㎡）

発掘調査参加者

相原　実　青山　諒子　阿部すえ子　阿部美枝子　阿部　洋子　井筒　孝子
伊藤　幸子　植野美登子　大場　悌子　小田嶋祥子　菊地あき子　佐藤とき子
佐野　靖男　清水　直子　菅井ぎみ子　関谷　栄子　玉上なみ子　富田　是
東海林かづ子　橋本　房子　日野きみ子　福山　幸子　茂垣　艶子　吉崎美香子
渡部　麗子

整理作業参加者

砂金よしえ　臼井美津子　金澤　君代　菊地あき子　今野　順子　清水　直子
関内　久子　玉上なみ子　東海林かづ子　橋本　房子　湊　久美子　茂垣　艶子
山田　哲子　吉崎美香子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

大野田遺跡は太白区大野田字袋前、袋東に所在し、仙台市南東部のJR長町駅から南南西へ約1250m、太白区役所の南約750mに位置する。遺跡の南約１kmには名取川が東流しており、東南東方向約2.7kmで広瀬川と合流して太平洋へ注いでいる。遺跡から現在の海岸線までの直線距離は約９kmである。遺跡の範囲は東西約100m、南北約260mの、南北に長い約２万6,000㎡の広がりをもっている。

遺跡は、広瀬川と名取川に挟まれ、西を丘陵・段丘地域によって画されたほぼ三角形を呈する、郡山低地と呼ばれる低地内の中央部南側の名取川寄りにある。西側を区切る丘陵・台地部は、地質構造線に沿う撓曲運動の結果、その北西側に形成された幅１km弱の隆起帯であり、沈降地帯となった構造線の南東側には海岸平野が広がっている。この仙台平野北部地域を特徴づける地質構造線は長町－利府線と呼ばれており、南西から北東方向へ約10kmの長さで延びている。遺跡は長町－利府線より約1.5km離れており、郡山低地南部の主に名取川と旧笊川からの氾濫堆積物によって形成された自然堤防上に立地する。標高は９～10mであり、現在の地表面は北西から南東方向へ緩やかに傾斜している。

本遺跡に氾濫堆積物を供給した旧笊川は、大野田地区の西側で一旦、北東方向へ流れを変えた後に東流し、さらに南へ大きく曲流して大野田地区の西、北、東の３方向を取り囲むように蛇行して流れている。その結果、大野田地区は微地形的には南へ大きく開いた袋のような状態になっており、地区の北部に残る「袋」の地名もこの地形に由来するものといわれている。遺跡の所在する地域の字名である「袋前」・「袋東」もこの地形的環境に関連するものと考えられる。

遺跡は、現在では都市計画道路と宅地もしくは更地となっているが、かつては今回の調査地点を含め、おもに水田や畑として利用されていた。

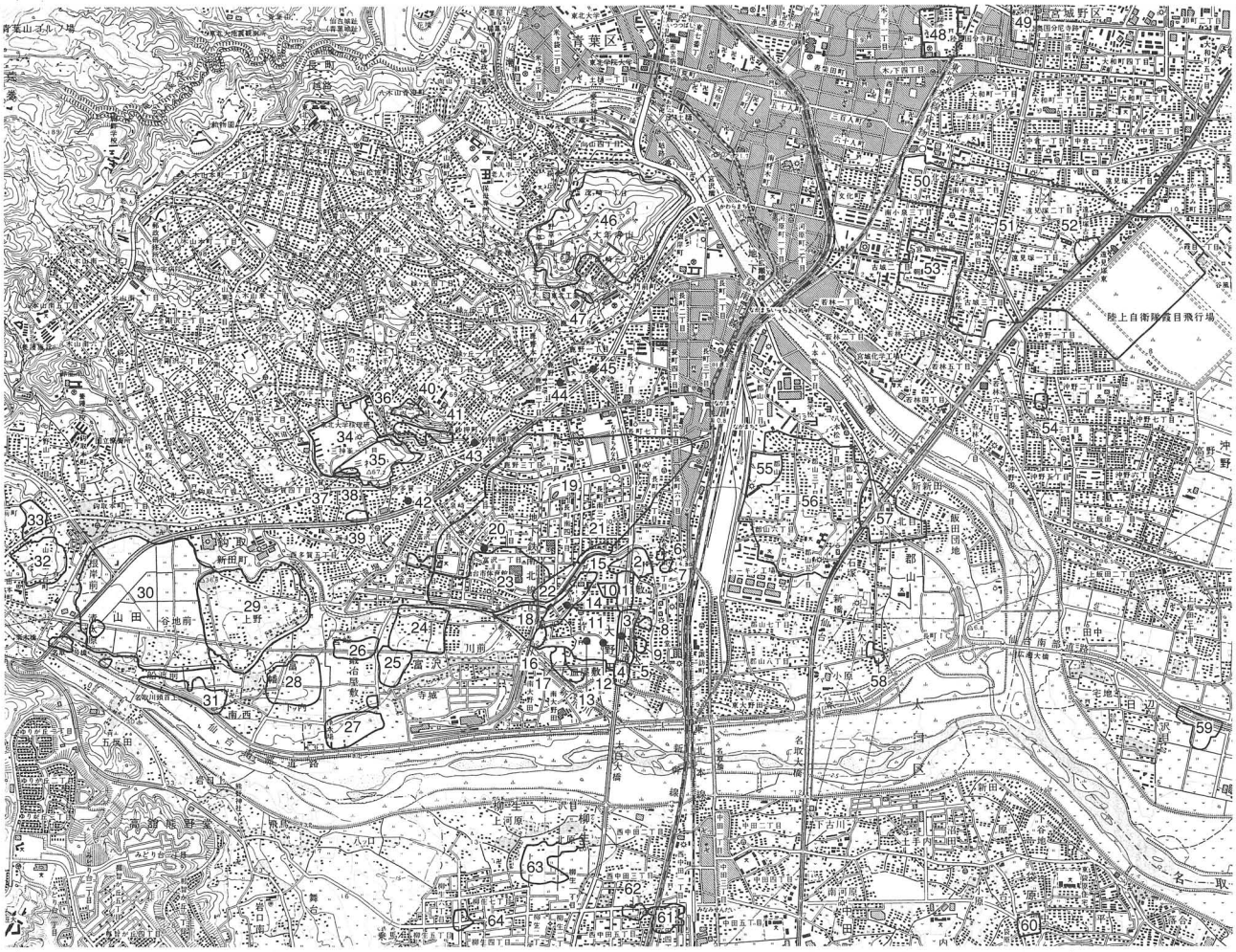
第２節　遺跡周辺の歴史的環境

大野田遺跡の周辺には後期旧石器時代から近世にかけての多くの遺跡が分布している。旧笊川の北側には後期旧石器時代の焚き火跡と森林跡が発見され、弥生時代以降の10数時期におよぶ水田跡の検出とともに全国的に注目されている富沢遺跡がある。また、本遺跡の西方には下ノ内、下ノ内浦、山口、伊古田、六反田遺跡などの縄文時代から近世にかけての遺跡が密集している。さらに、南側には中世の武士の屋敷跡や信仰関係の遺構・遺物が確認された王ノ壇遺跡があり、北には古代から中世の集落跡である元袋遺跡が隣接している。

今回の調査では古代の遺構が検出され、縄文時代の遺物も若干出土したことから、おもに縄文時代と古代における大野田地区周辺の歴史的環境について概観する。

縄文時代

大野田地区周辺地域で縄文時代の最も古い生活痕跡が確認されるのは、旧笊川北岸の自然堤防上に立地する下ノ内浦遺跡においてである。下ノ内浦遺跡では地表下約４mから早期前半の日計式期の竪穴住居跡と落し穴が発見され、押型文土器と尖頭器・石鏃・掻器などの石器が出土している。また、本遺跡の北方、旧笊川北側の後背湿地に広がる富沢遺跡の第28次調査では、地表下約４mより早期後半の槻木Ⅰ式期の土器・石器などの遺物集中部が４箇所検出され、さらに下ノ内浦遺跡の西に隣接する山口遺跡では地表下約３mから早期末の上川名Ⅰ式、梨木畑式期の遺物包含層が確認されている。このように大野田地区周辺は、縄文時代の比較的早い段階から居住を含む生活活



番号	遺跡名	種別	立地	時代時期	番号	遺跡名	種別	立地	時代時期
1	大野田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文後, 弥生中, 古墳 ,奈良 ,平安	33	北前遺跡	包含地, 集落跡	段丘	後期旧石器, 縄文早～中, 平安, 近世
2	元袋遺跡	集落跡, 水田跡	自然堤防	弥生, 奈良, 平安, 中世 ,近世	34	芦ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文早, 弥生, 平安
3	王ノ壇遺跡	集落跡, 屋敷跡	自然堤防	縄文後, 弥生 ,古墳 ,奈良 ,平安, 近世	35	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文前・中, 平安
4	皿屋敷遺跡	集落跡, 屋敷跡	自然堤防	奈良 ,平安 ,中世	36	土手内横穴墓群A	横穴墓	丘陵斜面	古墳末
5	王ノ壇古墳	円墳	自然堤防	古墳	37	三神峯古墳群	古墳	丘陵	古墳後
6	長町南遺跡	散布地	自然堤防	奈良 ,平安	38	富沢窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳, 奈良, 平安
7	新田遺跡	散布地	自然堤防	奈良 ,平安	39	原遺跡	散布地	丘陵麓	弥生, 古墳, 平安
8	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	奈良 ,平安	40	土手内遺跡	集落跡	丘陵	縄文, 弥生, 古墳, 奈良, 平安
9	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳	41	土手内窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳後, 奈良
10	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文, 奈良, 平安	42	裏町古墳	古墳	丘陵麓	古墳
11	大野田古墳群	古墳	自然堤防	古墳	43	砂押古墳	古墳	丘陵麓	古墳
12	春日社古墳	古墳	自然堤防	古墳中	44	二塚古墳	古墳	丘陵麓	古墳
13	鳥居塚古墳	古墳	自然堤防	古墳中	45	一塚古墳	古墳	丘陵麓	古墳中
14	五反田古墳	古墳	自然堤防	古墳	46	茂ヶ崎城跡	城館跡	丘陵	中世
15	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文中～晩, 弥生, 古墳, 奈良, 平安, 近世	47	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳末, 奈良
16	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文後, 古墳, 奈良, 平安	48	陸奥国分寺跡	寺院跡	段丘	奈良, 平安
17	伊古田B遺跡	集落跡	自然堤防	古墳, 古代	49	陸奥国分尼寺跡	寺院跡	段丘	奈良, 平安
18	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文中～晩, 弥生, 古墳, 奈良, 平安, 中世	50	養種園遺跡	集落跡,屋敷跡,包含地	自然堤防	縄文, 古墳, 平安, 中世, 近世
19	富沢遺跡	包含地, 水田跡	後背湿地	後期旧石器, 縄文, 弥生, 古墳, 奈良, 平安, 中世, 近世	51	南小泉遺跡	集落跡,屋敷跡	自然堤防	弥生, 古墳, 奈良, 平安, 中世, 近世
20	教塚古墳	古墳	自然堤防	古墳後	52	遠見塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
21	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳, 平安	53	若林城跡	古墳,集落跡,城館跡	自然堤防	古墳, 平安, 中世, 近世
22	下ノ内浦遺跡	集落跡, 水田跡	自然堤防	縄文早・前・後, 弥生, 古墳, 奈良, 平安, 中世	54	神柵遺跡	官衙跡,包含地	自然堤防	奈良, 平安
23	山口遺跡	集落跡, 水田跡	自然堤防, 後背湿地	縄文早・中～晩, 弥生中, 古墳, 奈良, 平安, 中世	55	西台畑遺跡	包含地, 土器棺墓, 集落跡	自然堤防	縄文, 弥生中, 古墳
24	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世	56	郡山遺跡	官衙跡,寺院跡,包含地	自然堤防	縄文後・晩, 弥生中, 古墳(末期), 奈良(初期)
25	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	古代	57	北目城跡	城館跡,集落跡,水田跡	自然堤防	縄文後, 弥生, 古墳, 奈良, 平安, 中世, 近世
26	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文, 奈良, 平安	58	欠ノ上Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳, 奈良, 平安
27	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	奈良, 平安	59	高田B遺跡	集落跡, 畑跡, 水田跡, 河川跡	自然堤防, 後背湿地	縄文, 弥生, 古墳, 平安, 中世, 近世
28	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生, 平安	60	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳, 奈良, 平安
29	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文中, 奈良, 平安	61	安久東遺跡	集落跡,方形周溝墓	自然堤防	弥生, 古墳, 奈良, 平安, 中世, 近世
30	山田条里遺跡	散布地, 水田跡, 屋敷跡	段丘, 自然堤防	縄文, 奈良, 平安, 近世	62	安久遺跡	集落跡	自然堤防	縄文晩, 弥生, 奈良, 平安, 中世
31	船渡前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文, 弥生, 奈良, 平安	63	柳生台畑遺跡	散布地	自然堤防	古墳, 奈良, 平安
32	山田上ノ台遺跡	包含地, 集落跡	段丘	後期旧石器, 縄文早・前～後, 平安, 近世	64	松木遺跡	集落跡	自然堤防	平安, 中世, 近世

第１図　大野田遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（50,000分の１）

動の場であったことが知られる。

前期になると、富沢遺跡と山口遺跡でわずかに遺物が出土しているものの、大野田地区周辺においては明瞭な生活痕跡は確認されていない。しかし、本遺跡から北西へ約２㎞離れた丘陵上に立地する三神峯遺跡では、前期前半の大木１式～２ｂ式期の竪穴住居跡と土器埋設遺構、遺物包含層などが発見され、当時の集落跡であったことが明らかになっている。

中期の遺構は、山口遺跡と、旧笊川南岸の自然堤防上の六反田遺跡、それに隣接する下ノ内遺跡で確認されている。山口遺跡からは中期末葉の埋設土器が発見され、六反田遺跡では地表下約２ｍから中期中葉の大木８ｂ式期の竪穴住居跡、中期末葉の大木10式期の竪穴住居跡・埋設土器などが検出されている。また、下ノ内遺跡の地表下約２ｍからも中期末葉の竪穴住居跡が発見され、さらに中期末葉から後期初頭の炉跡・土坑・埋設土器も確認されている。

後期になると本遺跡をはじめ、周辺の各遺跡で多くの生活活動痕跡が確認されるようになる。六反田遺跡では後期初頭の住居跡・土坑・埋設土器・柱穴列・配石遺構などの数々の遺構と、後期初頭を主体とする遺物包含層が発見されている。山口遺跡からは後期前葉の南境式期の土坑が検出され、後期前葉を主体とする中期中葉から後期中葉の遺物包含層も確認されている。また下ノ内浦遺跡では同時期の墓域が発見されている。本遺跡の西南西に位置し、下ノ内遺跡と六反田遺跡に隣接する伊古田遺跡からは後期中葉の宝ヶ峯式期の遺物包含層が確認され、仙台市の有形文化財に指定された、全身の形状のわかる土偶が４点出土している。その中の最も大きな土偶は全長41.4㎝ときわめて大型であり、国内でも最大級の土偶のひとつに数えられている。本遺跡の南に隣接する王ノ壇遺跡では後期中葉宝ヶ峯式期および後期後葉の金剛寺式期の遺物包含層、竪穴遺構、配石遺構、土坑、埋設土器が発見されている。本遺跡では、都市計画道路建設に先立って行われた第１次調査によって、後期前半の遺物包含層と２時期の遺構群が良好に検出されており、墓域と祭祀の場が一体となった場所であったと考えられている。

晩期では山口遺跡で河川跡が確認され、富沢遺跡から晩期の土器が出土しているものの、大野田地区周辺での活動痕跡は希薄である。

以上のように大野田地区周辺地域における縄文時代の活動痕跡は、早期前半という古い段階から確認でき、特に中期中葉から後期中葉にかけて集落が安定して連続的に営まれ、古くから生活活動の場として利用されてきたことが明らかになっている。

古代

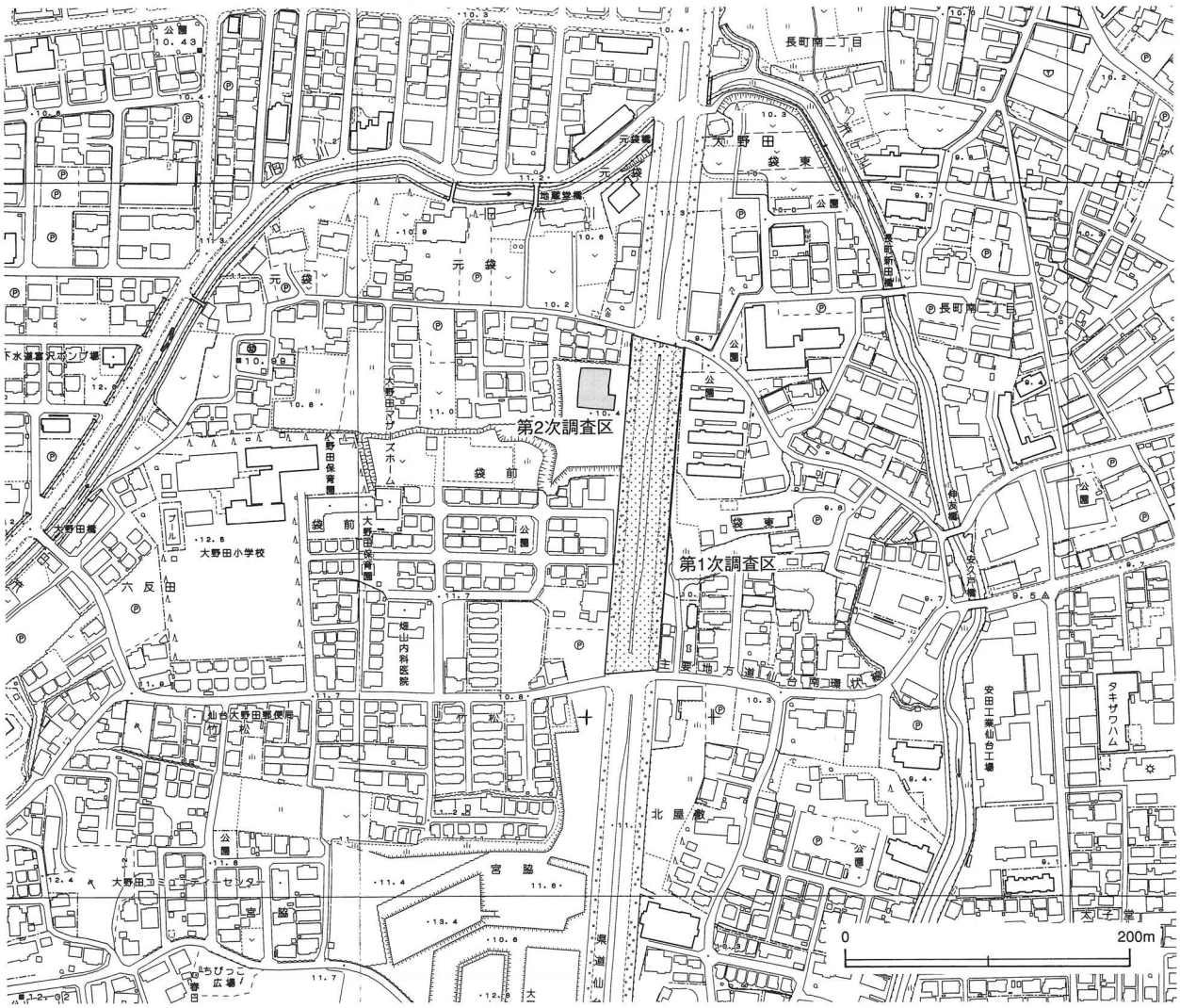
仙台平野における古代の遺跡は、古墳時代と較べ、平野部、丘陵部のほぼ全面に分布が拡大し、遺跡数も増大している。大野田地区周辺地域でも、笊川周辺の自然堤防上に立地する伊古田、下ノ内、六反田、山口、下ノ内浦、元袋、王ノ壇遺跡などで奈良時代から平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多数確認されており、集落が営まれていたことが明らかになっている。検出された竪穴住居跡には、奈良時代に北壁中央付近に造られていたカマドが、平安時代になると東壁中央付近に設置される傾向がみられる。また、竪穴住居跡の方向も真北を基準とするものが多く認められることから、住居１軒のみならず、集落全体の企画性の存在が想定される。集落が自然堤防上で営まれる一方で、畑の耕作にかかわる痕跡と考えられている小溝状遺構群は大野田地区のほぼ全域に広がっており、特に大野田古墳群の分布域で集中して検出されている。古墳群分布域の小溝状遺構群は古墳の墳丘部分では確認されないことから、墳丘部は古代においても残存していたものと考えられる。また、山口遺跡北側の後背湿地部および富沢遺跡からは水田跡が検出されている。

以上のこれまでの周辺地域の調査成果から、古代の大野田地区周辺では、笊川沿いの自然堤防上に集落が営まれ、墳丘部が残存する大野田古墳群の古墳の周囲には畑が広がり、北側の広大な後背湿地部では水田稲作が行われていたという景観を粗描することができる。

第３章　調査の方法と概要

第１節　調査区の設定

調査対象域は太白消防署長町出張所建設予定地の面積約1,500㎡である。調査の実施にあたり、対象域内で建物建設によって遺跡の破壊が予想される範囲に調査区を設定した（第２図）。そのため調査区の平面形は南北に長い長方形を基本としながら、東辺の南端から３分の１ほどに南北長約10.5m、東西幅約５mの張り出し部を持つ形状となっている。調査面積は約620㎡である。都市計画道路「川内・柳生線」建設に伴う調査の結果により、今回の調査区内での基本層序に大きな変化は予想されなかったことから、層位観察用のベルトを設けず調査を行うこととした。調査区の設定は６月２日（金）に行った。



第２図　調査区位置図（5,000分の１）

第２節　調査方法

調査にあたっては、調査対象域の全域が厚さ約１ｍの盛り土によって覆われていたことから、安全面を考慮して盛り土と、盛り土以前の旧表土（水田耕作土）に勾配を設けて掘削することとした。上端で調査面積よりも一回り広い掘削範囲を設定した後、重機を使用して盛り土と旧表土の除去を行った。旧表土下面以下については、人力によって遺構の検出および掘り込み作業を行った。

遺構の測量は「平面直角座標系第Ｘ系」を基準として実施し、基準杭の設定は業者へ委託した。調査区外の北西に位置するＸ＝－198.130㎞、Ｙ＝＋4.150㎞の地点に測量原点（Ｅ０Ｓ０）を設定し、東および南方向へ進むにしたがって数値が増加するようにし、それぞれの基準杭をＥ○Ｓ○と表示した（第３図）。調査現地での遺構実測平面図、断面図および調査区壁面断面図は20分の１の縮尺で作製し、遺物出土状況図の一部については10分の１で作製した。

写真撮影は35㎜カメラ２台を使用し、カラーリバーサル、モノクロフィルムで撮影したほか、ネガカラーの使い捨てカメラによって調査状況の撮影記録を行った。

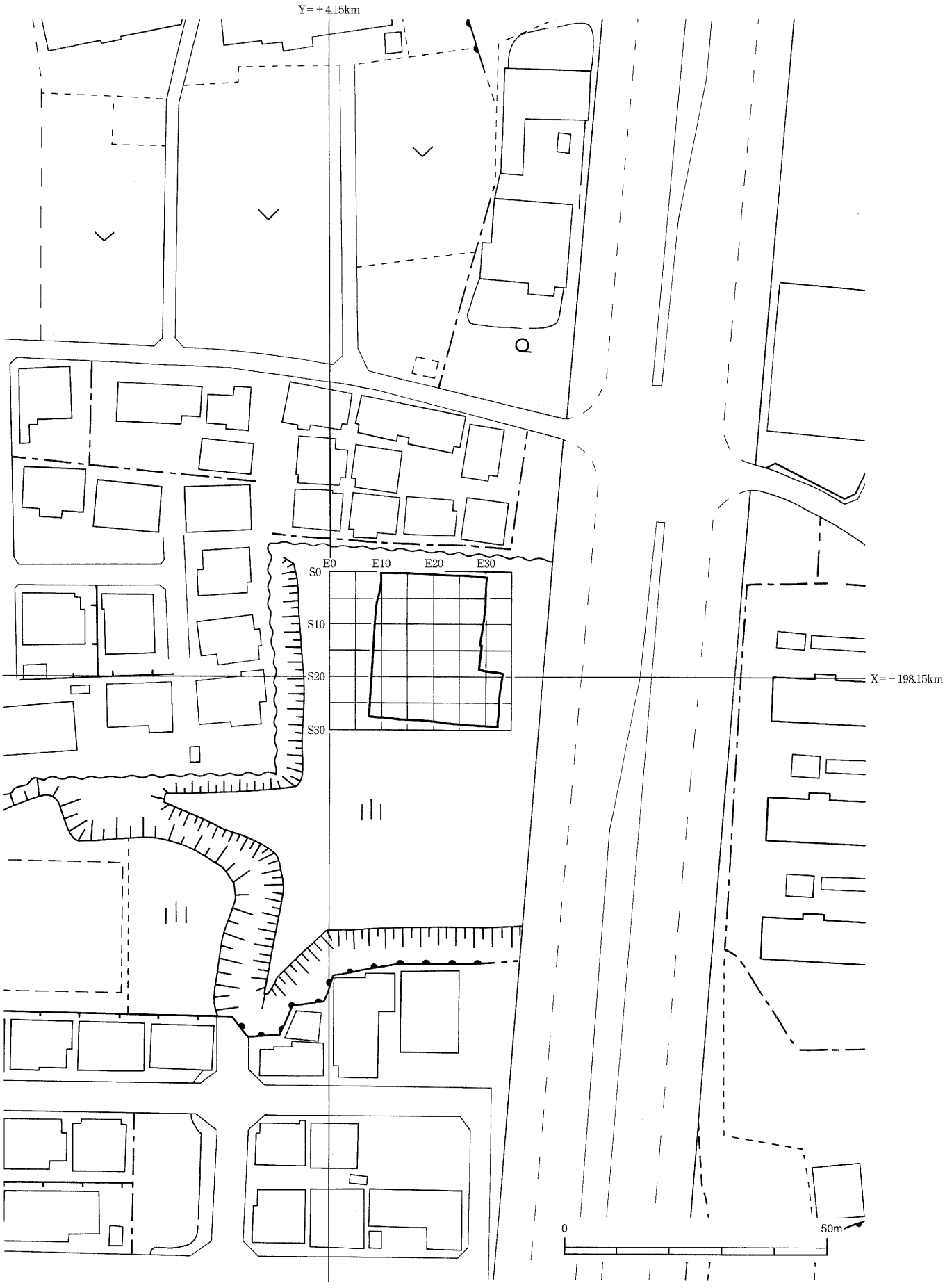
第３節　調査経過

５月31日（水）に調査事務所設置が完了した。翌日の平成12年６月１日に調査関係器材を搬入し、２日に掘削範囲の設定を行った。翌週の５日（月）から敷地周囲へのネットフェンス設置と併行して、重機を使用して盛り土と旧表土の除去を開始した。重機による掘削土はすべて場外に搬出し、人力掘削による排土置場を敷地内に確保した。重機による作業期間中は天気に恵まれず、雨天のため断続的な作業となり、盛り土と旧表土の除去が終了したのは６月16日（金）である。

６月19日（月）に測量基準杭を10m間隔で設定し、併せて人力による盛り土、旧表土の細部の除去と遺構検出作業を開始した。６月26日（月）と27日に基本層位の第Ⅱａ層上面で検出された遺構の検出状況全景の写真撮影を行い、27日から遺構の掘り込み作業を開始した。随時、各遺構の平面図、断面図の作製、写真撮影を行いながら調査を進め、８月下旬には掘り込み作業がほぼ終了したことから、８月24日（木）に完掘全景の写真撮影を行った。その後、竪穴住居跡の掘り方等の追加調査を行い、９月７日（木）には第Ⅱａ層上面検出遺構に関わる作業をすべて終了した。

第Ⅱａ層上面で検出された遺構の完掘全景を写真撮影した後、下層での遺構の有無を確認するため調査区南壁際と西壁際に幅１ｍのトレンチを設定した。確認トレンチ内の掘り下げは８月28日（月）より開始し、９月上旬までは追加調査と併行しながら行った。今回の調査区に隣接する第１次調査Ⅱ区では東西方向に延びる、規模の大きな河川跡が確認されていたことから、今回の調査区全体が河川跡内に位置している可能性が考えられた。トレンチ内の確認調査の結果、縄文時代の遺物がわずかに出土するものの、面をなした出土状況ではなく、層の堆積状況の観察からも河川跡堆積物と判断された。この結果から第Ⅱａ層より下層については、第１次調査と同様に確認トレンチのみの調査にとどめることとした。

９月18日（月）に調査記録関係の最終的な作業と調査区からの撤収を終え、調査を完了した。事務所からの撤収が終了したのは９月22日（金）である。



第３図　グリッド設定図（1,000分の１）

第４章　基本層序

今回の調査によって確認された基本的な層位は、盛土以前の水田耕作土である第Ⅰ層から河川跡に関わる堆積物の基底と考えられる礫層の第Ⅶ層までの大別７層、細別10層である（第４図）。以下、各層の概要を記述する。

盛土　３種類の盛土がなされており、盛土１は現在の整地のための山砂である。盛土２は本遺跡の第１次調査の際の排土であり、盛土３は第１次調査時に排土置場とする以前に設置されていた調査事務所のための整地によるものである。

第Ⅰ層　盛土以前の水田耕作土である。E15ライン付近で第Ⅰ層に伴う畦畔が確認され、その畦畔を境として、西側が高く東側の低い水田区画であったことが確認される。

第Ⅱａ層　にぶい黄褐色（10YR５／３）シルト質粘土層。全体的にマンガン斑が認められ、特に層上部への集積が著しい。本層上面が今回の調査における遺構検出面である。

第Ⅱｂ層　にぶい黄褐色（10YR４／３）シルト質粘土層。第Ⅱａ層に類似するが、砂をわずかに含む褐色（10YR４／６）のシルト質粘土が粒状にみられることで区別される。

第Ⅲ層　灰黄褐色（10YR４／２）シルト質粘土層。

第Ⅳ層　にぶい黄褐色（10YR４／３）シルト質粘土層。上部から下部へ次第に明度が低下して暗色になり、徐々に礫を含むようになる。縄文時代後期前葉南境式期の遺物をわずかに出土するものの面を形成する状況ではなく、本層が河川跡堆積物であることから流れ込みと考えられる。

第Ⅴａ層　黒褐色（10YR３／２）シルト質粘土層。調査区の南壁際に設定した土層観察用のトレンチでは、東から西へ徐々に砂礫を多く含むようになり、西端ではほとんど砂礫層となる。

第Ⅴｂ層　灰黄褐色（10YR４／２）砂礫層。粗砂をマトリックスとし、礫の直径は５㎝前後以内である。

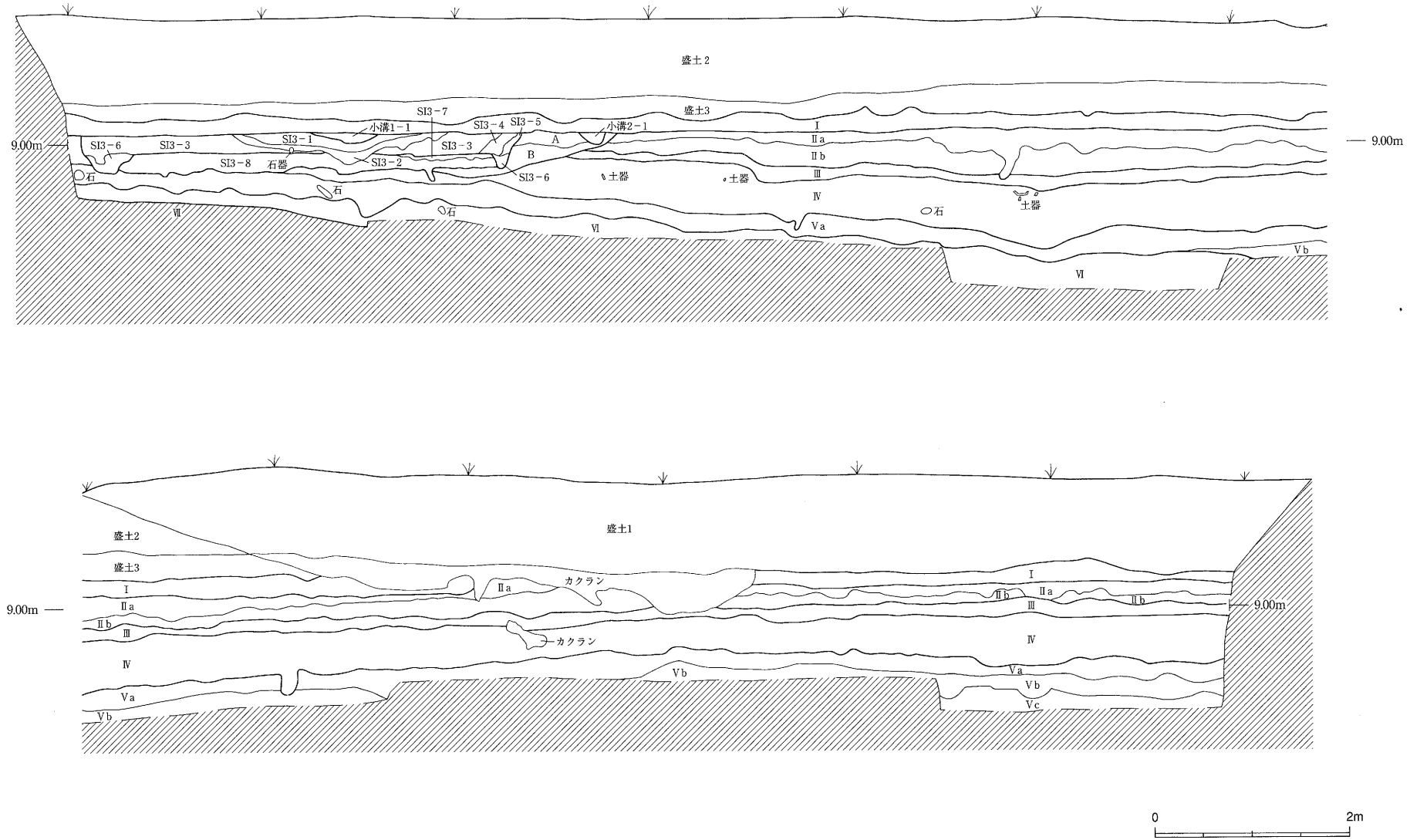
第Ⅴｃ層　にぶい黄褐色（10YR４／３）砂層。礫をほとんど含まない粗砂の層である。

第Ⅵ層　灰黄褐色（10YR４／２）砂質シルト層。粘土をわずかに含んでおり、ごく稀に直径１～５㎝の礫が認められる。

第Ⅶ層　礫層。直径１～10㎝の礫によって構成される層であり、礫には、しばしば10㎝を超えるものも認められる。河川跡堆積物の基底と考えられる。

第１表　調査区南壁土層注記表

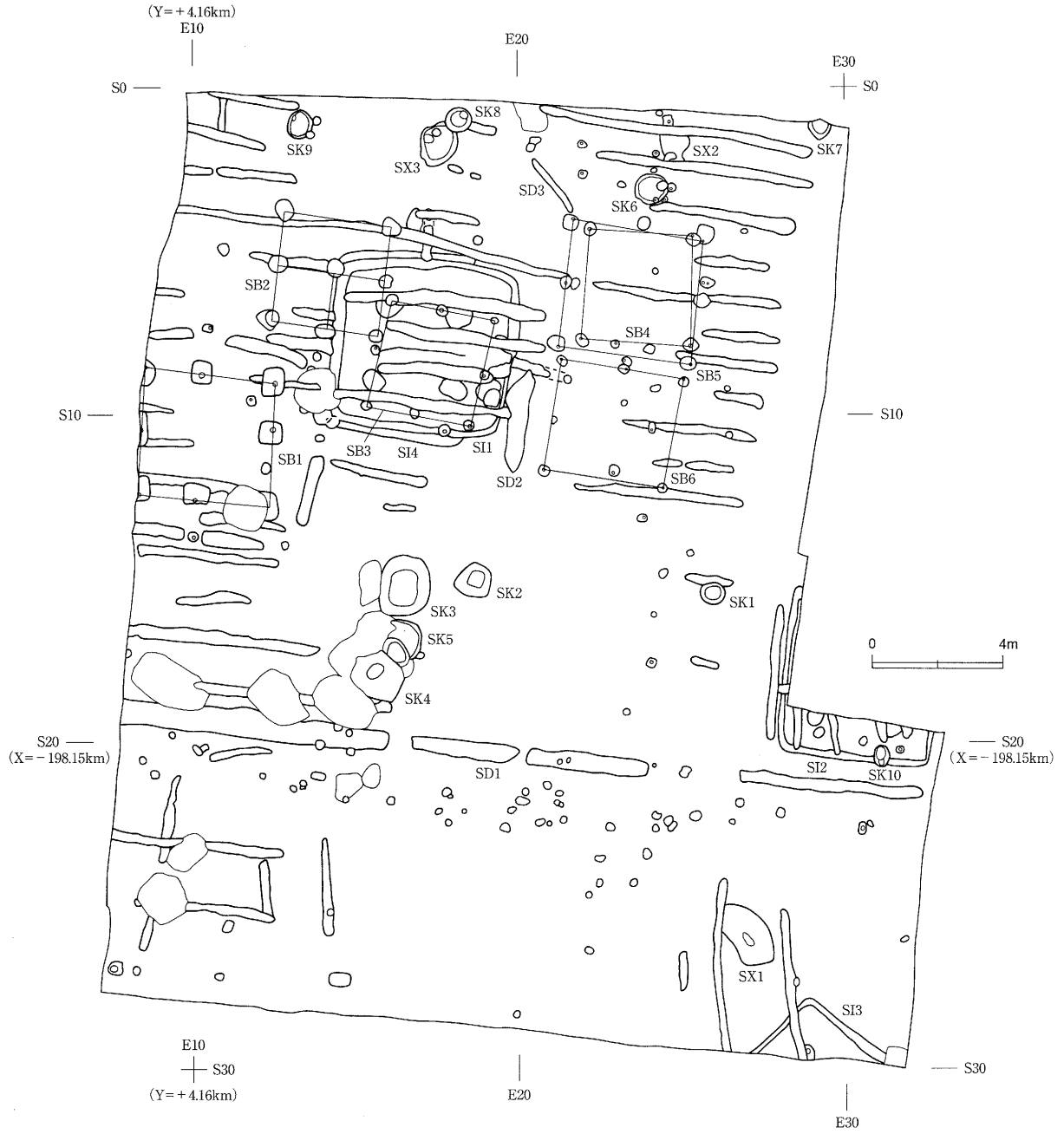
遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
基本層位	Ⅰ			旧水田耕作土．水田上面はE15ライン付近の畦を境に東側が低い．
	Ⅱａ	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガン斑を全体的に含み，特に上面に多く集積する．10YR5/2灰黄褐色の粘性の強い部分がある．
	Ⅱｂ	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR4/6褐色の砂質がかったシルト質粘土を粒状に全体的に含む．
	Ⅲ	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	
	Ⅳ	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	層下部で色調が暗くなり礫を含む．縄文時代後期の遺物を含む．
	Ⅴａ	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	南壁際土層観察用トレンチでは東半はシルト質粘土であるが，西半は砂礫を多く含み西端で砂礫層になる．
	Ⅴｂ	10YR4/2 灰黄褐色	砂礫層	礫径は5cm前後以内．砂は粗砂．
	Ⅴｃ	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂　層	礫をほとんど含まない．砂は粗砂．
	Ⅵ	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	わずかに粘土を含み，稀に直径1～5cm程度の礫を含む．
	Ⅶ		礫　層	直径1～10cm以上の礫の層．
	A	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	層上部に10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む．
	B	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	A層をブロック状に含む．
小溝　1	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にまばらに含む．
小溝　2	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に多量に含む．
ＳＩ３	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土をブロック状にわずかに含む．
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土を層上部に粒状にわずかに含み，下部には多く含む．
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土を層上部に含む．炭化物を下面に一部含む．層下面が住居の床面．
	4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に全体的に含む．
	5	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
	6	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	4層を小ブロック状に含む．周溝堆積土．
	7	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含む．
	8	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロックにわずかに含む．下部には下層のブロックを含み，底面は凹凸が著しい．



第4図　調査区南壁断面図

第５章　検出遺構と出土遺物

今回の調査によって検出された遺構は、掘立柱建物跡６棟、竪穴住居跡３軒、竪穴遺構１基、土坑10基、溝跡３条、性格不明遺構３基、小溝状遺構群、ピット147（SB２～６掘立柱建物跡の柱穴を含む）である（第５図）。掘立柱建物跡のうちの５棟は、検出されたピットを調査後に検討した結果、掘立柱建物跡の柱穴と判断されたことによって認定したものである。したがって遺構検出時に確認されているのはSB１掘立柱建物跡のみである。また、SI４竪穴遺構は竪穴住居跡の可能性も考えられるが、SI１竪穴住居跡に切られ、その大部分が失われていたことから竪穴遺構と扱うこととした。以下、各遺構の概要とおもな出土遺物について記述する。



第５図　遺構配置図

第１節　掘立柱建物跡

前述のとおり遺構検出作業によって確認された掘立柱建物跡はSB１のみであり、他の５棟は、検出ピットの形態、規模、堆積土、位置関係などの調査後の検討によって柱穴を抽出し、認定したものである。そのため、SB１以外の５棟については、現地での検出状況や完掘全景写真などに掘立柱建物跡としての撮影記録は残されていない。

１．SB１掘立柱建物跡（第６図，写真４～写真６－１）

調査区西辺の中央部やや北寄りの位置で発見されている。西側柱列は調査区の壁際で確認されており、土地境界の関係から調査区をさらに西側へ拡張することは不可能であったため、柱穴全体の検出はできなかった。東西２間、北側柱列総長3.98m（柱間寸法174cm・224cm、平均199cm）、南側柱列総長3.87m（計測可能な柱間170cm）、南北２間、西側柱列総長3.90m（柱間寸法190cm・200cm、平均195cm）、東側柱列総長3.80m（計測可能な柱間142cm）の建物跡である。南北柱列の方向は、東側柱列でN－3.5°－Eである。

柱穴は一辺62～105cmの隅丸方形もしくは隅丸長方形を基調としており、検出面からの深さは34～59.5cmである。柱痕跡は円形で、直径は14～19cmである。

北、東、南の柱列の外側には、１～1.5m離れた位置で小さなピットが検出されており、その間に小規模な溝跡が付設されている。このピットと溝跡は、一体となってSB１掘立柱建物跡を取り囲むことから、建物跡に付属する遺構と考えられる（以下、付属溝とする）。西側も同様な構造と推定されるが、調査区外のため不明である。

付属溝は幅35～50cm、長さ180～257cmの規模で、底面の状態は一様ではない。付属溝２・４・５のように部分的な落ち込みや大きな凹凸が確認されるものもあり、検出面からの深さは浅いもので４～５cm、深いもので16～29cmである。また、すべての付属溝の底面で掘削痕跡と考えられる、土木具の刃先による三日月形もしくは半月形の平面形を呈する浅いくぼみが確認された。堆積土は暗褐色もしくは黒褐色のシルト質粘土であり、層下部に基本層位の第Ⅱａ層～Ⅲ層起源と考えられる小ブロックを多く含んでいる。

SI１竪穴住居跡、SI４竪穴遺構、小溝状遺構群を切っている。

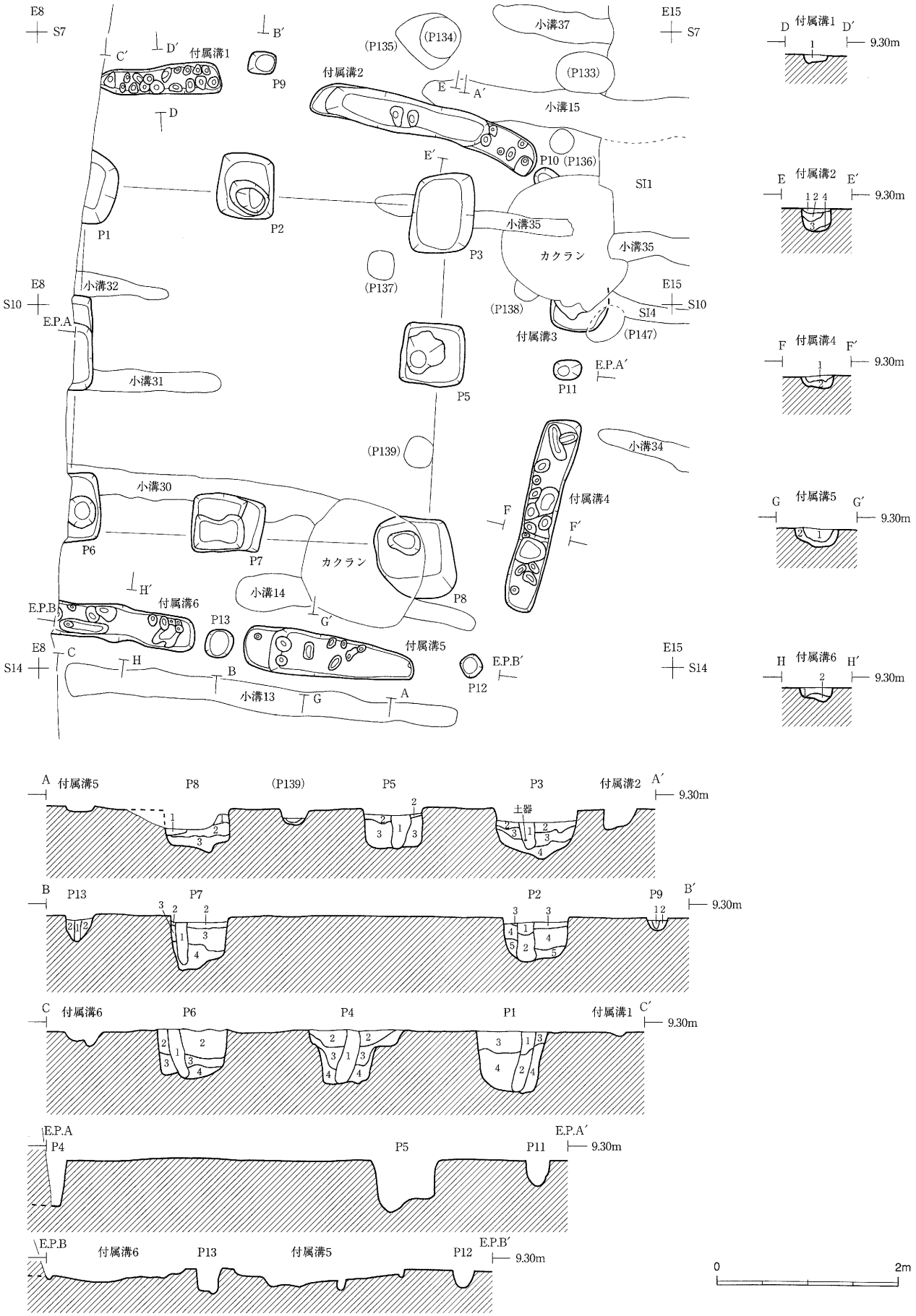
柱穴の堆積土中からは計79点の土師器片と、縄文土器片が１点出土している。しかし、いずれも細片であり、図、写真を掲載するまでにはいたらなかった。また、付属溝の堆積土からは縄文土器片１点、土師器・土師器片21点、須恵器・須恵器片２点、礫片２点の計26点の遺物が出土している。付属溝３の堆積土中より出土した土師器と須恵器の坏、各１点を図化し、第７図に掲載した。

第７図１はロクロを使用した土師器坏（D－２）である。口縁部を欠損するものの、残存する器高から欠損はわずかなものと考えられる。内面にはヘラミガキ調整が観察され、黒色処理されている。外面および底部は磨滅が著しく、底部調整の観察は困難である。

第７図２は須恵器坏（E－２）である。器高に比べ底径が大きく、回転ヘラ切りによる切り離しである。器面は明白色を呈し、やや軟質である。

２．SB２掘立柱建物跡（第８図）

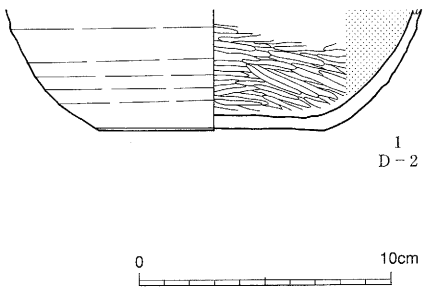
現地調査後に検出ピットの検討を行った結果によって認定された建物跡であり、調査区の北西部で確認されている。SB１掘立柱建物跡の北東の位置にあたる。建物跡の中央に位置するピット132も本遺構に関わる柱穴と考えられるが、北側柱列中央では柱穴は検出されなかった。ピット121・126・130・131・132・133・134・140によって構成され、東西２間、北側柱列総長3.26m、南側柱列総長3.25m（柱間寸法151cm・174cm、平均163cm）、南北２間、

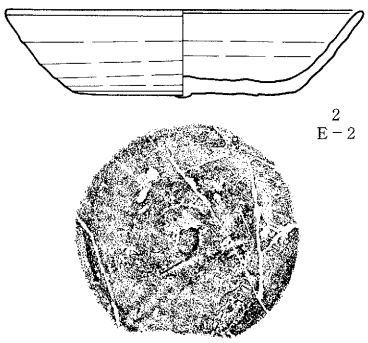


第６図　ＳＢ１掘立柱建物跡平面図・断面図

第２表　ＳＢ１掘立柱建物跡土層注記表

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
付属溝１	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む.
付属溝２	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に全体的に含む.
	2	2.5Y3/2　黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に全体的に含み，上面，下面に砂を層状に含む.
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に多量に含む.
	4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を粒状に含む.
付属溝３	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を上部では粒状に，下部では小ブロック状に全体的に含む.
付属溝４	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に全体的に含む。
	2	10YR5/3 にぶい暗褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を粒状に全体的にまばらに含む.
付属溝５	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に含み，下部に多くみられる.
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含み粒状に全体的にまばらに含む.
付属溝６	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/3 暗褐色シルト質粘土を粒状に含む.
Ｐ１	1	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に下部に多く含む. 基本層Ｉb層に類似する. 柱腐食後の落ち込み.
	2	5Y4/1　灰 色	粘 土	粘性強い.
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土をブロック状に上部に多く含む. 下部はにぶい黄褐色が主体で黒褐色は小ブロック状もしくは粒状.
	4	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を上部にブロック状に多く含む. 中部では小ブロック状で少量.
Ｐ２	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	
	2	5Y4/1　灰 色	粘 土	粘性強い.
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に全体的に含む.
	4	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に全体的に含み，下部に小ブロック状に含む.
	5	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を層上部にブロック状に含み，層状をなす.
Ｐ３	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土をブロック状に多量に含む.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に全体的に多量に含む.
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状にわずかに含む.
	4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を上部にブロック状にわずかに含む.
Ｐ４	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	下部は粘性強い.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含む.
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に全体的多くに含む.
	4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土をブロック状に上部に多く含む.
Ｐ５	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	下部は粘性強い.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含む.
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む層と含まない層が互層になっている.
Ｐ６	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	下部は粘性強い.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に多量に含む層と，粒状にわずかに含む層の互層になっている.
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土のブロックが部分的に層状をなす.
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘 土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状にわずかに含む.
Ｐ７	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含む.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を全体的にやや多く含む.
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に多量に含む.
	4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を全体的にやや多く含む.
Ｐ８	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状，小ブロック状にわずかに含む.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に多量に含む.
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状にわずかに含む.
Ｐ９	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状にわずかに含む.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に全体的に多量に含む.
Ｐ10	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
Ｐ11	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に全体的に含む.
Ｐ12	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含む.
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を粒状にわずかに含む.
Ｐ13	1	2.5Y4/1　黄灰色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含む.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含む.





図版番号	登録番号	種別・器種	出土遺構・層位	法　量（cm）			特　徴			備　考	写　真番　号
				口径	器高	底径	外　面	内　面	底　部		
7図1	D－2	土師器・坏	SB１付属溝 3 堆1層		(4.8)	9.1	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理			17-11
7図2	E－2	須恵器・坏	SB１付属溝 3 堆層中	14.3	3.4	8.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ		18- 2

第７図　ＳＢ１掘立柱建物跡出土遺物

西側柱列総長3.40m（柱間寸法169cm・171cm、平均170cm）、東側柱列総長3.38m（柱間寸法167cm・171cm、平均169cm）の建物跡である。南北柱列の方向は西側柱列がN－6°－E、東側柱列がN－7°－Eである。

柱穴は短軸38～58cm、長軸44～68cmの楕円形もしくは円形を呈しており、検出面からの深さは17～47cmである。柱痕跡は確認されなかったが、西側柱列の底面で直径20～28cmの落ち込みが確認されている。

SI 1 竪穴住居跡、SI 4 竪穴遺構、小溝状遺構群を切っている。

ピット121・131・132・133・134・140の堆積土中から計24点の土師器片が出土しているが、いずれも細片であり、図、写真を掲載するまでにはいたらなかった。

3．SB 3 掘立柱建物跡（第 8 図）

現地調査後に検出ピットの検討を行った結果、認定された建物跡であり、調査区の北側中央部、SB 2 掘立柱建物跡の南東に接した位置で確認されている。SB 2 掘立柱建物跡と直接的な切り合い関係は認められないため新旧は不明であるが、近接した位置関係にあり、柱列の方向も異なることから、同時に存在したものではない。

ピット114・116・122・124・125・142・143・144によって構成され、東西 2 間、北側柱列総長3.28m（柱間寸法161cm・167cm、平均164cm）、南側柱列総長3.30m（柱間寸法163cm・167cm、平均165cm）、南北 2 間、西側柱列総長3.30m（柱間寸法160cm・170cm、平均165cm）、東側柱列総長3.24m（柱間寸法152cm・172cm、平均162cm）の建物跡であり、SB 2 掘立柱建物跡とほぼ同規模である。南北柱列の方向は西側、東側ともにN－15°－Eである。

柱穴はSB 2 掘立柱建物跡と比べ全体的に小規模で、形態は短軸24～37cm、長軸26～40cmの円形もしくは隅丸方形を基調とし、検出面からの深さは15.5～37cmである。柱痕跡はピット114・116・124・142で確認されており、直径 6 ～14cmのほぼ円形を呈している。SI 1 竪穴住居跡、小溝状遺構群を切っている。

ピット122・125・142の堆積土中からわずかに遺物が出土しており、各ピットから土師器片 1 点とピット122から須恵器片が 1 点みられる。いずれも細片であり、図、写真を掲載するまでにはいたらなかった。

第 3 表　ＳＢ 3 掘立柱跡土層注記表

ピットNo.	層位	土　色	土　性	備　考
114	柱痕跡	10YR5/1 褐灰色	粘 土	
	埋土	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/4にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状，小ブロック状に含む．
116	柱痕跡	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	
	埋土	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR5/4にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む．
122	1	7.5YR4/2 灰褐色	シルト質粘土	層中部に10YR5/3にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む．
124	柱痕跡	7.5YR4/2 灰褐色	シルト質粘土	
	埋土	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土をブロック状にまばらに含む．
125	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	層下部の粘性強．
142	柱痕跡	10YR4/1 褐灰色	粘 土	
	埋土	7.5YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/3にぶい黄褐色シルト質粘土をわずかに粒状に含む．
143	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/3にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状，小ブロック状に含む．
144	1	2.5YR3/2 黒褐色	粘 土	10YR5/3にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状にわずかに含む．

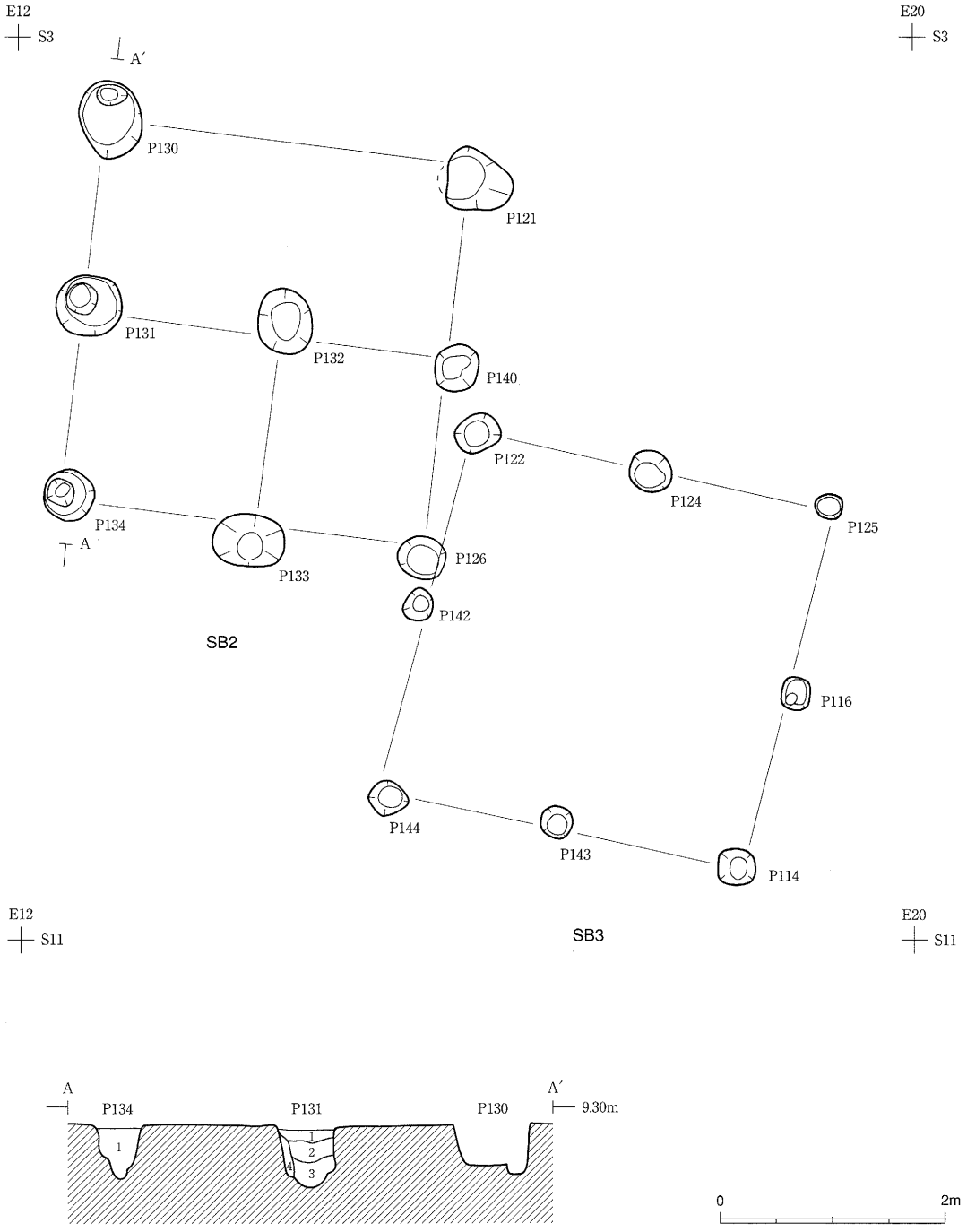
4．SB 4 掘立柱建物跡（第 9 図）

現地調査後に検出ピットの検討を行った結果、認定された建物跡であり、調査区の北東部、SB 2 掘立柱建物跡のほぼ真東の位置で確認されている。後述するSB 5 掘立柱建物跡と位置的に重複しており、SB 5 掘立柱建物跡の柱穴を切る柱穴が認められる。

ピット82・88・96・98によって構成され、東西 1 間（北側長3.12m、南側長3.34m）、南北 1 間（西側長3.36m、東側長3.36m）の建物跡であり、南北柱列の方向は西側がN－5°－E、東側がN－1°－Eである。

柱穴は短軸34～42cm、長軸41～47cmの不整円形を呈しており、検出面からの深さは26～45cmである。柱痕跡はすべてのピットで確認されており、直径 9 ～12cmの円形を呈している。SB 5 掘立柱建物跡を切っている。

遺物はピット82から土師器片 1 点と須恵器片 2 点が出土しているのみであり、いずれも細片で、図、写真を掲載するまでにはいたらなかった。



ピットNo.	層位	土　色	土　性	備　考
121	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に全体的に含む.
126	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	層下部に10YR5/2 灰褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
130	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	焼土, 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土, 10YR3/1黒褐色粘土をブロック状に含む.
131	1	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状にわずかに含む.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色および暗褐色シルト質粘土をブロック状に多く含む.
	3	10YR4/1 褐灰色	粘　土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状にまばらに含む.
	4	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状にまばらに含む.
132	上層	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状にまばらに含む.
	下層	10YR5/3 黄褐色	シルト質粘土	黒褐色のブロックを上部に多量に含む.
133	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
134	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR3/3 暗褐色および5/3にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状にまばらに含む.
140	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR5/2 灰褐色シルト質粘土をブロック状に含む.

第８図　ＳＢ２・３掘立柱建物跡平面図・断面図

5．SB 5 掘立柱建物跡（第 9 図）

現地調査後に検出ピットの検討を行った結果、認定された建物跡であり、調査区の北東部、SB 2 掘立柱建物跡のほぼ真東の位置で確認されている。SB 4 掘立柱建物跡と位置的に重複しており、SB 4 掘立柱建物跡の柱穴に切られる柱穴が認められる。

ピット81・85・89・90・91・95・97・99によって構成され、東西 2 間、北側柱列総長3.96m（柱間寸法185cm・212cm、平均198cm）、南側柱列総長4.04m（柱間寸法196cm・208cm、平均202cm）、南北 2 間、西側柱列総長3.94m（柱間寸法195cm・199cm、平均197cm）、東側柱列総長3.80m（柱間寸法180cm・200cm、平均190cm）の建物跡である。南北柱列の方向は西側がＮ－7.5°－Ｅ、東側がＮ－ 6°－Ｅである。北側柱列および南側柱列の中央の柱穴は、ともに外側へのわずかなズレが認められる。

柱穴の規模にはバラツキが認められるが、短軸29～51cm、長軸34～58cmの不整円形を呈しており、検出面からの深さは34～65cmである。柱痕跡はピット81・85・89・90・95・99で確認されており、直径10～13cmの円形もしくは楕円形である。

SB 4 掘立柱建物跡に切られ、小溝状遺構群を切っている。

ピット91を除く各ピットの堆積土中から 1 ～ 4 点の計12点の土師器片が出土しており、ピット89からは須恵器片も 1 点出土している。しかし、いずれも細片であり、図、写真を掲載するまでにはいたらなかった。

6．SB 6 掘立柱建物跡（第 9 図）

現地調査後に検出ピットの検討を行った結果、認定された建物跡であり、調査区の北東部、SB 5 掘立柱建物跡の南側にほぼ隣接した位置で確認されている。

ピット71・73・79・87によって構成され、東西 1 間（北側長3.77m、南側長3.64m）、南北 1 間（西側長3.34m、東側長3.42m）の建物跡であり、南北柱列の方向は西側がＮ－9.5°－Ｅ、東側がＮ－12°－Ｅである。

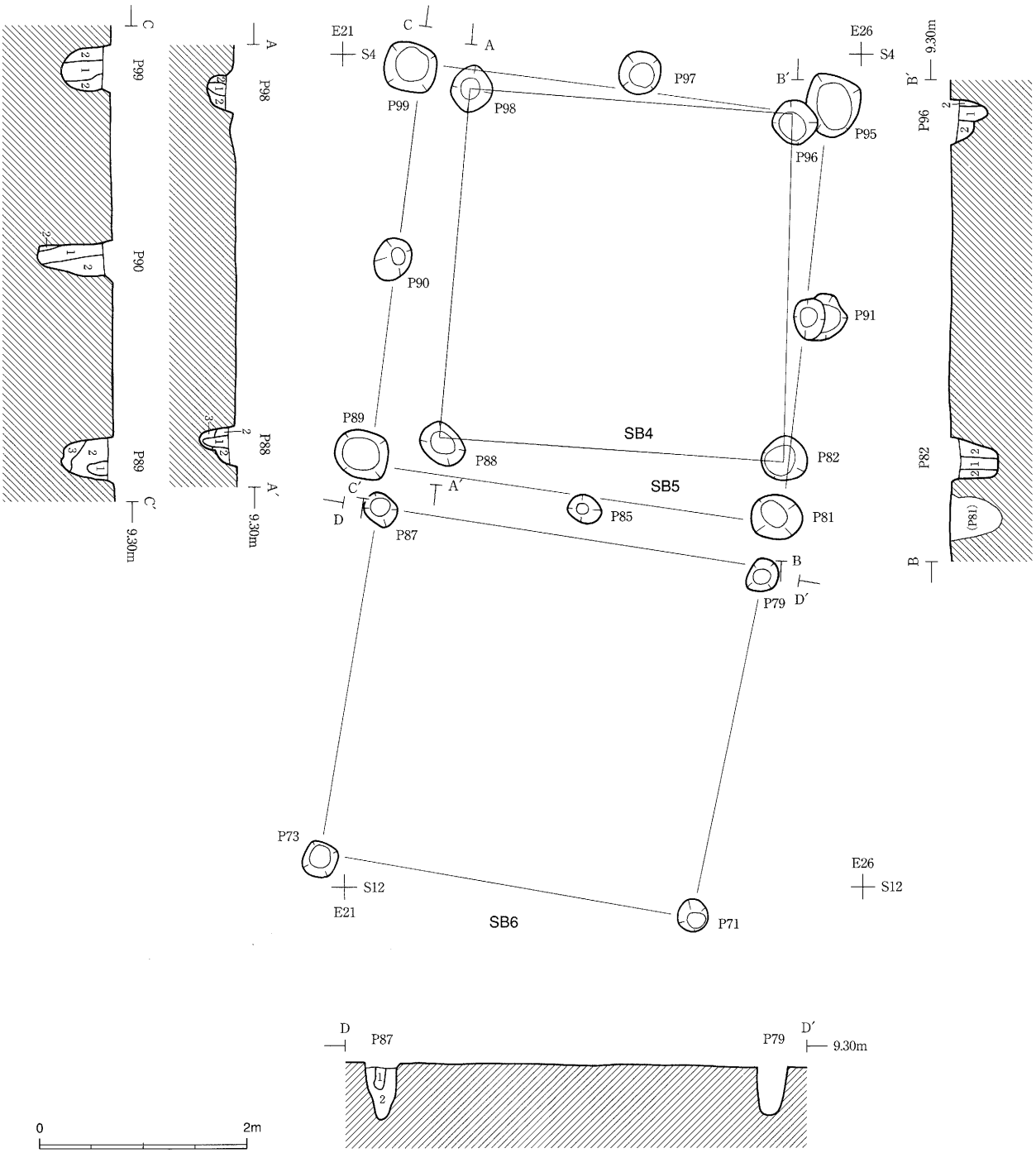
柱穴は小さく、ほぼ同一の規模であり、短軸26～32cm、長軸32～36cmの不整円形を呈している。検出面からの深さは24.5～49cmである。柱痕跡はすべてのピットで確認されており、直径 6 ～13cmのほぼ円形である。

小溝状遺構群を切っている。

遺物はピット71から土師器片 1 点が出土しているのみであり、図、写真を掲載するまでにはいたらなかった。

第 4 表　ＳＢ 5・6 掘立柱建物跡土層注記表

遺構名	ピットNo	層位	土　色	土　性	備　考
SB 5	81	柱痕跡	10YR3/2 黒褐色	粘 土	粘性強い.
		上層	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
		下層	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒褐色シルト質粘土を小ブロック状にまばらに含む.
	85	柱痕跡	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	黄褐色シルト質粘土を粒状に含む.
		上層	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
		下層	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐灰色シルト質粘土をブロック状, 粒状に含む.
	89	1	10YR3/4 暗褐色	粘 土	柱痕跡. わずかににぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む.
		2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に多量に含む.
		3	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
	90	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘 土	柱痕跡.
		2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む.
	91	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
	95	柱痕跡	7.5YR5/1 褐灰色	粘 土	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む.
		埋土	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
	97	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に全体的に含む.
	99	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡. 粘性強.
		2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒褐色シルト質粘土を小ブロック状, 粒状に全体的に含む.
SB 6	71	柱痕跡	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む.
		埋土	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に多量に含む.
	73	柱痕跡	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	
		埋土	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に多量に含む.
	79	柱痕跡	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色シルトを粒状に含む.
		埋土	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
	87	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡.
		2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に多量に含む.



遺構名	ピットNo.	層位	土　色	土　性	備　考
SB4	82	1	10YR4/1 褐灰色	粘 土	柱痕跡．粘性強い．にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む．
		2	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状,粒状に多量に含む．
	88	1	10YR4/1 褐灰色	粘 土	柱痕跡．粘性強い．
		2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含み,焼土をわずかに含む．
		3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	黒褐色シルト質粘土を粒状に含む．
	96	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	柱痕跡．粘性強い．にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む．
		2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にまばらに含む．
	98	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	柱痕跡．にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む．
		2	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状,粒状に全体的に含む．

第９図　ＳＢ４～６掘立柱建物跡平面図・断面図

第２節　竪穴住居跡・竪穴遺構

今回の調査によって発見された竪穴住居跡は３軒であるが、SI２竪穴住居跡とSI３竪穴住居跡は調査区の壁際で確認されたため、部分的な検出となっている。中でもSI３竪穴住居跡は住居の一角が確認されたのみで、大部分が調査区外になるため全容は不明である。SI２竪穴住居跡に関しても規模が推定される程度の検出であり、詳細については不明である。したがって施設や出土遺物、所属時期等について詳述可能な住居跡はSI１竪穴住居跡のみである。また、SI４竪穴遺構は、前述のとおり、SI１竪穴住居跡に切られ、そのほとんどが失われている。

１．SI１竪穴住居跡（第10～11図，写真６－２～写真11）

調査区北半のほぼ中央部で検出されており、SB１掘立柱建物跡の北東に位置する。掘立柱建物跡、溝跡、小溝状遺構群、ピットなどに切られるものの、遺存状況は良好で、その全容を確認することができた。

［平面形・規模・方向］　平面形はほぼ隅丸方形を呈しており、東西の軸長は5.74m、南北の軸長は5.36mである。方向は、南辺を基準としてＥ－６°－Ｓである。

［堆積土］　検出面から床面までの深さは32～38cmであり、堆積土は、カマド付近を除き、４層に分層される。１層から３層までは黒褐色のシルト質粘土であり、層によって量と大きさは異なるものの、暗褐色のシルト質粘土と基本層位の第Ⅱａ層以下を起源とする、にぶい黄褐色のシルト質粘土のブロックを含んでいる。ブロックは、特に２～３層に多く認められることから、２層、３層は人為的堆積と考えられる。また、１層下面で小溝状遺構群の溝跡が検出されており（小溝15・35～38）、小溝状遺構群が形成された段階で住居跡が完全には埋没していなかったか、あるいは後に２層以下の圧縮により１層が沈み込んだもののいずれかと考えられる。床面直上の層は基本的には灰色の粘土の４層であるが、床面の中央部には４層の分布しない箇所がある。そのため床面は部分的に３層に覆われた状態である。

［床面・壁面］　床面はほぼ平坦であるが、堅く締まった中央部と比べ、カマド周辺はわずかに下がっている。床面では周溝と土坑１基および16のピットが検出されている。主柱穴と考えられるピット以外は不整円形を呈するものが多く、規模は最小で短軸17cm、長軸26cm、深さ９cm、最大で短軸90cm、長軸93cm、深さ42.5cmとまちまちである。小型から中型のピットは北壁寄りにやや集中的に存在している。

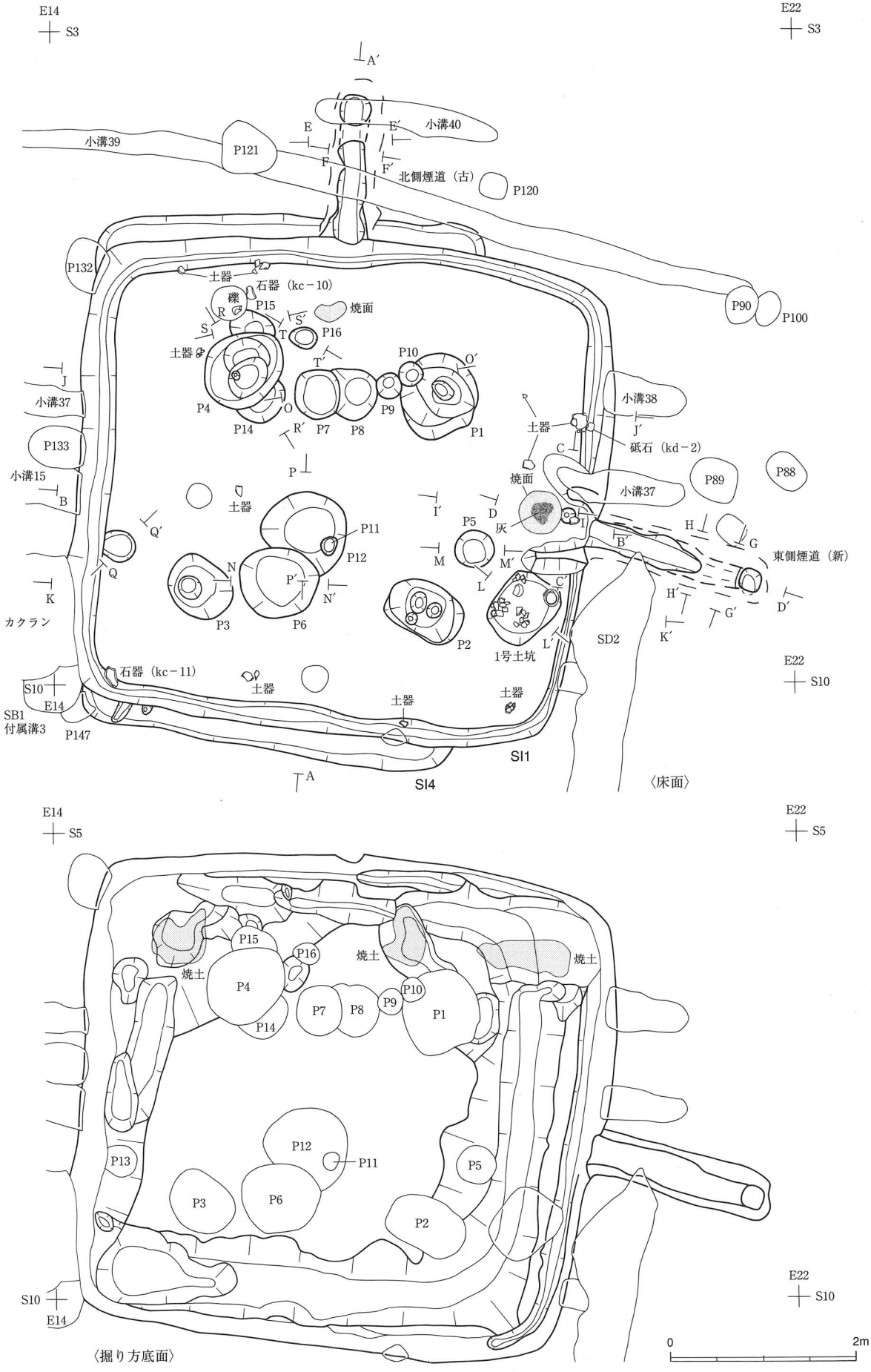
また、北側の煙道寄りに20cm×35cmの範囲で焼けた面が確認され、周囲に焼土や黒変した土壌の小ブロックが分布することから、カマド本体は残存していないものの、東壁中央で検出されたカマドとは別に、一時期、北壁の中央部にもカマドが付設されていたと考えられる。

壁面はほぼ垂直に立ち上がり、床面からの高さは最大で37.5cmである。

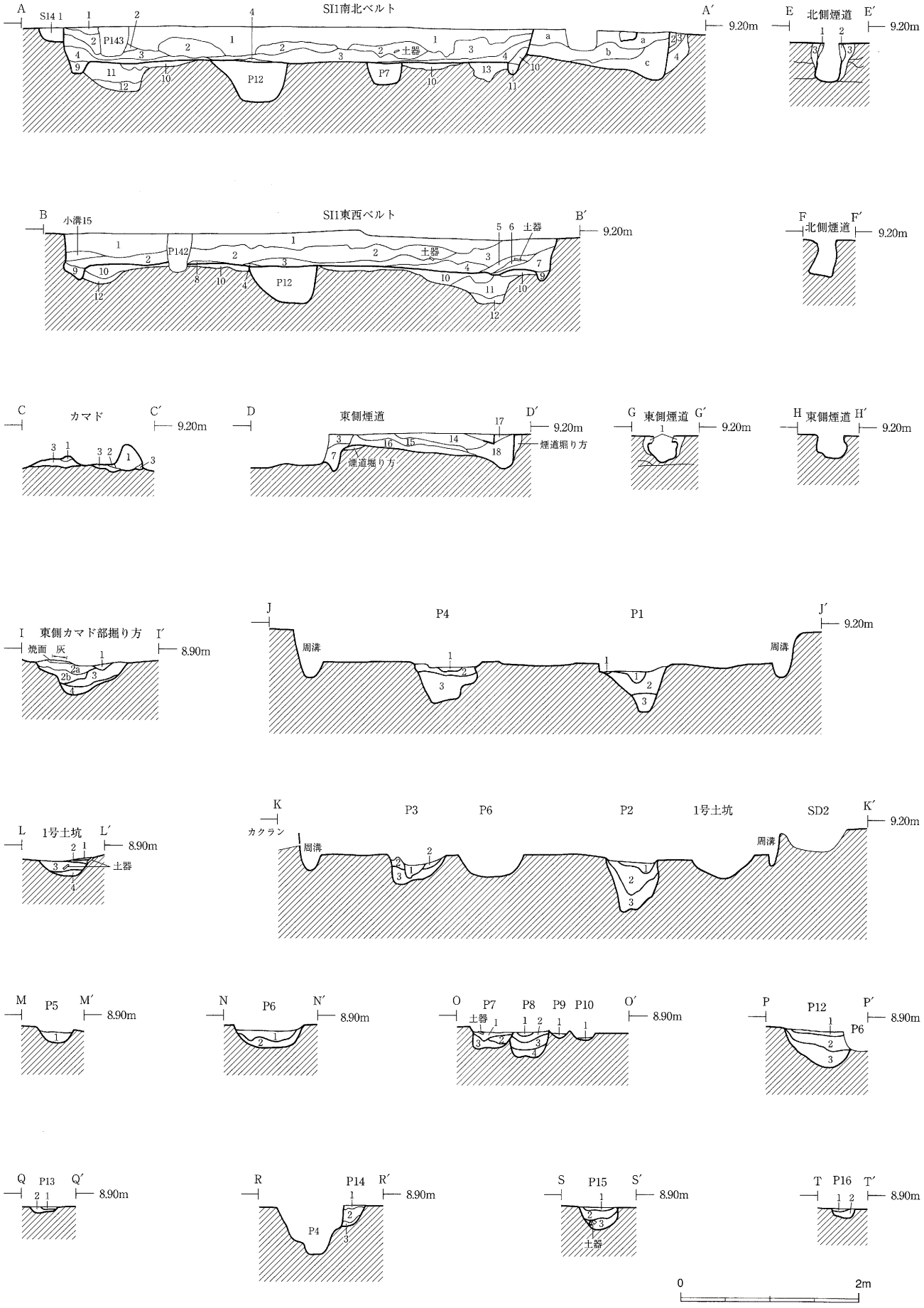
［柱穴と周溝］　床面で検出された16のピットのなかで、規模と位置関係からピット１～４を主柱穴と判断した。主柱穴の平面形は短軸54～94cm、長軸72～95cmの不整円形を呈しており、床面からの深さは30.5～56cmである。柱痕跡は、いずれの柱穴からも確認されなかった。

周溝は全周しており、断面の形状はＵ字形を呈している。床面からの深さは6.5～17cmである。上端幅は10～38cmで、東辺のカマド南側と南辺で幅が狭く、東辺のカマド北側と西辺では広くなっている。

［カマド］　カマドは東壁の中央部に付設されている。カマド本体の幅は両袖の外側で約130cmであり、袖部の先端から東壁までの奥行きは約65cmである。両袖を残存するものの、北側の袖部は小溝状遺構群の小溝37に切られ、上半を失っており、南側の袖部も小溝36に切られ、南半が失われている。袖部の基底からの残存高は北側が約10cm、南側が約25cmであり、幅は基底部で両袖部とも約35cmである。カマド内部の中央には直径約45cmの範囲で強く焼け



第10図　ＳＩ１竪穴住居跡・ＳＩ４竪穴遺構平面図



第11図　ＳＩ１竪穴住居跡断面図

第５表　ＳＩ１竪穴住居跡土層注記表

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	層下部ににぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にまばらに含む.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色および暗褐色のシルト質粘土をブロック状に多量に含む. わずかに炭化物を含む.
	3	2.5Y3/2　黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状もしくは小ブロック状に全体的に含む.
	4	10Y4/1　灰色	粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状にわずかに含む.
	5	7.5YR4/2 灰褐色	シルト質砂	にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状にわずかに含む.
	6	5Y5/1　灰色	灰	上面に炭化物を含む.
	7	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	焼土および7.5YR4/2灰褐色シルト質砂を含む.
	8	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	炭化物を多量に含む.
	9	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/3にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に多量に含む.
	10	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	炭化物, 焼土を含む.
	11	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	炭化物を含む.
	12	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	
	13	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	
	14	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト質粘土と, 直径3cm程の黒色～黒褐色の焼壁をブロック状に多量に含む.
	15	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	直径1cm内の黒色の焼壁ブロックを少量含み、焼土粒をわずかに含む.
	16	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	直径2cm内の黒色～黒褐色の焼壁ブロックを多量に含み, 焼土粒を全体的にわずかに含む. カマド近くに直径10cm内の赤褐色の焼壁ブロックをわずかに含む.
	17	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	直径5mm内のにぶい黄褐色シルト質粘土を多量に含み, 直径1cm内の焼壁ブロックを含む.
	18	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	直径5cm内のにぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含み, 直径2cm内の黒色～黒褐色の焼壁ブロックを多量に含む.
	19	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	わずかに黒変した壁土を含み, 10YR7/3にぶい黄褐色シルトを含む.
カマド	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色および10YR5/3にぶい黄褐色のシルト質粘土を粒状に全体的に含む. カマド本体
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む.
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	下部ににぶい黄褐色シルト質粘土がみられ, 全体的に砂が混じる.
	4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を粒状に含み, 部分的に層状をなす.
カマド部掘り方	灰	10Y6/1　褐灰色		部分的に10YR7/1灰白色を呈する.
	焼面	2.5YR5/8 明赤褐色		
	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色および10YR5/3 にぶい黄褐色のシルト質粘土を粒状に多量に含む.
	2a	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を粒状にわずかに含む.
	2b	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	焼面直下ではわずかに変色して赤みがかっている. 10YR3/2黒褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含む.
	3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色および10YR5/3 にぶい黄褐色のシルト質粘土をブロック状に多く含む.
	4	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	3層に見られるブロックを含まず, 粘性が強い.
北側煙道	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	焼土, 黒色の焼壁ブロックを含み, カマド寄りに10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	焼土, 黒化粘土を小ブロック状に多量に含む.
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	焼土, 黒色の焼壁ブロックをわずかに含む. 粘性強い.
	4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む. .
	5	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含む.
	6	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色および10YR5/3 にぶい黄褐色のシルト質粘土を粒状に含む.
	7	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR7/3 黄橙色シルトと黒色の焼壁ブロックをわずかに含む.
1号土抗	1	5Y3/1　オリーブ黒	粘　土	全体的に酸化鉄斑を多量に含む.
	2	2.5Y5/2　暗灰褐色	粗　砂	
	3	2.5Y4/1　黄灰色	粘土質シルト	直径1cm内の赤褐色焼土ブロックと炭化物ブロックを全体的に少量含む.
	4	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	全体的に酸化鉄斑を多量に含む.
Pit1	1	7.5YR4/2 灰褐色	シルト質粘土	焼土をわずかに含み, 炭化物片を特に下部に多く含む.
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色および10YR5/3 にぶい黄褐色のシルト質粘土を粒状, 小ブロック状に含む.
	3	7.5YR5/2 灰褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を粒状に含む.
Pit 2	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む.
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR4/1褐灰色シルト質粘土を上部に粒状に含む.
	3	10YR5/2 灰黄褐色	粘　土	粘性強い.
Pit3	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	炭化物片を含む.
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を粒状に含む.
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘　土	粘性強い.
Pit4	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄斑を含み, 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土を粒状に含む.
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色および10YR5/3 にぶい黄褐色のシルト質粘土を粒状に含む.
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を粒状に含む. 粘性強い.
Pit5	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	直径1cm程のにぶい黄褐色砂質ブロックと焼土ブロックを多量に含み, 炭化物粒をわずかに含む.
Pit6	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR4/1 褐灰色シルト質粘土をブロック状に含む.
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR4/1 褐灰色シルト質粘土を粒状に含む.
Pit7	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土のブロックと焼土, 炭化物, 黒色の焼壁ブロックを全体的に多量に含む.
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土の小ブロック状に含む.
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	焼土を全体的に含む.
Pit8	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土の粒状に含む.
	2	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	焼土炭化物を含み, 上部に10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	焼土黒色の焼壁ブロックを下部に多く含む. 上部に10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
	4	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	層中部に炭化物片を層状に含む.
Pit9	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土のブロック状に含む.
Pit10	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	焼土, 炭化物片を全体的にまばらに含む.
Pit11	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	焼土を含み, 10YR5/3にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状に含む.
Pit12	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土の小ブロック状にわずかに含む.
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土をブロック状に含み, 硬化してやや褐色がかった床面のシルト質粘土をブロック状にまばらに含む.
	3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	硬化してやや褐色がかった床面のシルト質粘土をブロック状に多く含む.
Pit13	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土の粒状に含む.
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む.
Pit14	1	7.5YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土の粒状に含む.
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	焼土黒色の焼壁ブロックを含み, 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む.
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	焼土をわずかに含む.
Pit15	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色および10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状, 粒状に含む.
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	層上面に炭化物層がみられ, 上部に炭化物片, 焼土を含む.
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む.
Pit16	1	7.5YR4/2 灰褐色	シルト質粘土	焼土ブロック, 炭化物を全体的に含む.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	焼土ブロックを含む.

た面が認められ、焼面の中央には直径25cmほどで灰が残されていた。

煙道は25～35cmの幅で住居の外に193cmの長さで延びている。煙道の方向は、住居の方向に比べ先端側が若干南へ振れており、E－17.5°－Sの方向である。先端には直径約25cmの煙出しピットが設けられ、ピットの住居側の上端縁から約45cmの長さで天井部が残存していた。煙道の堆積土は5層に分層され、灰黄褐色、にぶい黄褐色、暗褐色のシルト質粘土である。いずれも焼壁のブロックを含んでいる。煙道の底面は住居の壁際がもっとも高く、先端の煙出しピットへ向かって徐々に低下し、煙出しピットの底面でさらに下がっている。本竪穴住居跡の掘り方底面に関わる調査を終了した後、煙道の裁ち割り作業を行ったところ、煙道の掘り方が確認された（写真10－8、11－1・2）。煙道部は、幅45～55cm、長さ202cmの規模で溝状に掘削した後、基本層位の第Ⅱa層に極めて類似する、にぶい黄褐色のシルト質粘土を使って、側壁と天井部および煙出し部の奥壁が形作られている。

また、煙道は住居の北壁中央部でも確認されており、北辺に直交するN－6°－Eの方向で住居の外に延びている。煙道の幅は20～25cmで、長さは162cmである。先端には直径約35cmの煙出しピットが設けられており、ピットの住居側の上端縁から約15cmの長さで天井部が残存していた。煙道の堆積土は3層に分層され、黒褐色、灰黄褐色のシルト質粘土である。いずれも焼壁のブロックを含んでいる。煙道の底面は住居の壁際がもっとも高く、先端の煙出しピットへ向かって徐々に低下し、煙出しピットの底面でさらに低くなる。裁ち割り作業の結果、東側の煙道部と同様に掘り方が確認された（写真11－6～8）。煙道部は幅45～55cm、長さ180cmで溝状に掘削した後、灰黄褐色もしくはにぶい黄褐色のシルト質粘土を使って、側壁と天井部および煙出し部の奥壁が形成されており、東側の煙道部とほぼ同様の構造である。しかし、この煙道に伴うカマド本体は残存しておらず、前述のように床面に焼面が確認されるのみである。焼面の周囲には焼土や黒変した土壌の小ブロックの分布が確認されることから、カマドは取り壊され、撤去されたものと考えられる。

したがって、本竪穴住居跡では、カマドが北壁中央部から東壁中央部に位置を変えて造り直されたものか、あるいは北壁中央部にも造られ、ある程度機能していたが、最終的には東壁中央部のカマドのみが残されたもののいずれかと考えられる。後述するように前者である可能性が高く、その場合は、北側煙道は造り直し以前の古期のカマドに伴うものとなる。

［その他の施設］　1号土坑はカマドの南側袖部の南に隣接する位置で確認された土坑である。短軸64cm、長軸78cmの隅丸長方形を呈し、断面形は開いた浅いU字形で、床面からの深さは20cmである。堆積土は4層に分層されるが、もっとも厚い3層は焼土と黒変した土壌の小ブロックを含んでいる。堆積土中より土師器坏、甕などの遺物が多く出土しており、出土状況から設置されていた可能性が考えられる甕もみられる（写真6－7・8）。

［住居掘り方］　住居の掘り方は中央部を除き四周をめぐるように検出された。掘り方底面は全般的に凹凸が著しく、南側から東側にかけては幅70～110cm、深さ30～40cmの溝状を呈する落ち込みとなっている。埋め土はにぶい黄褐色シルト質粘土であり、含まれる黒褐色シルト質粘土のブロックの大きさと量によって4層に分層される。最下層には焼土と炭化物の直径1～2cmの小ブロックがみられる。北壁寄りの掘り方では、埋め土中に焼土と炭化物の小ブロックが集中する箇所が3箇所検出されており、北壁中央部に付設されていたカマドの撤去に関わるものと考えられる。カマドが北壁中央部から東壁中央部に位置を変えて造り直され、掘り方の掘削も行われていることから、住居の建て替えが行われた可能性が高い。

［重複］　SB1～3掘立柱建物跡、SD2溝跡、小溝状遺構群に切られ、SI4竪穴遺構、SX4性格不明遺構を切っている。

［出土遺物］　本竪穴住居跡は、今回検出された遺構のなかで最も遺物出土量の多い遺構である。

床面から土師器・土師器片13点、礫石器1点が出土しており、周溝からは土師器片9点、須恵器片1点、砥石1点、打製石器1点、礫石器2点が出土している。カマド内では70点、東側煙道では2点、北側煙道では1点の土師

器片がみられ、掘り方の埋め土からは土師器片71点と縄文土器片23点が出土している。また、床面で検出された1号土坑から土師器・土師器片54点、粘土塊1点、各柱穴から6～20点の土師器片が出土しており、ピット9～11・13を除く、ほかのピットからも1～8点の土師器片と少量の縄文土器片、礫石器が出土している。

堆積土の1～4層の出土遺物は、土師器・土師器片754点、須恵器・須恵器片8点、粘土塊5点、鉄滓1点、縄文土器片1点である。

おもな出土遺物を第12～14図に図示した。

第12図1・2・4・5は堆積土の1～3層より出土したロクロ不使用の土師器坏であり、2・4・5の内面には黒色処理が施されている。1（C－9）は丸底の坏で、外面には輪積み痕が残り、器面が凹凸している。内外面ともに磨滅しており、ヨコナデ調整が観察されるのみである。2（C－14）は平底であるが、わずかに丸みを帯びている。全体的にやや厚みがあり、大きさの割りには重量感がある。内面はヘラミガキ調整されているが、外面の調整は磨滅により不明である。外面の口縁部上部には、磨滅のため明瞭ではないが、弱い凹みが観察される。4（C－5）はやや尖り気味の丸底の坏である。底部内面は弱く凹んでいる。内面を中心に赤みを帯び、黒色処理がかなりぬけていることから、再酸化を受けたものと考えられる。内面はヘラミガキ調整されているが、上半部は磨滅によってヘラミガキ調整の単位が不明瞭である。外面はヨコナデとヘラケズリ調整であり、口縁部と体部の境にはヨコナデによる弱い稜が認められ、ケズリとケズリの間にも微弱な稜が観察される。小溝37の堆積土中から出土した破片と接合している。5（C－6）は丸底の坏で、内面はヘラミガキ調整、外面はヨコナデとヘラケズリ調整である。口縁部と体部の境にはヨコナデによる稜が認められるが、4に比べ稜の位置は低く、また、口縁部の立ち上がりは大きく開き、口径に対する器高の割合も小さい。

第12図3（E－3）は、堆積土の1層より出土した須恵器坏である。焼成は良好であり、器高に比べ底径が大きく、回転ヘラ切りによる切り離しである。

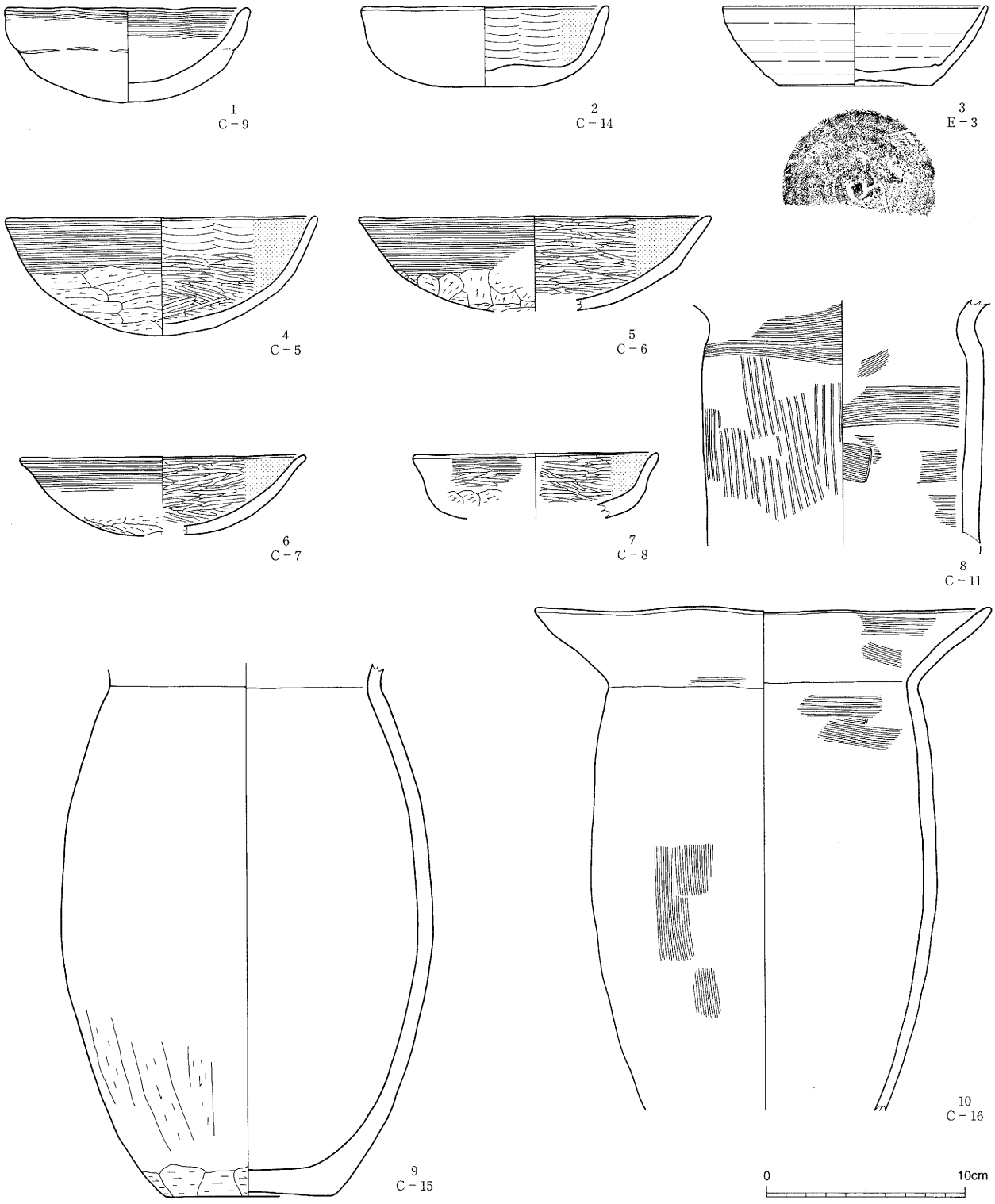
第12図8・9・10は堆積土中から出土したロクロ不使用の土師器甕である。8（C－11）は口縁部の上半と胴部下半を欠損しており、残存部分が少ないため形態を把握することは難しいが、胴部上半が直立して円筒状を呈することから、膨らみのない長胴形になるものと考えられる。口縁部の外面の調整はヨコナデであるが、内面は磨滅しており、調整の観察は不可能である。体部は外面がハケメ、内面はヘラナデである。内外面ともに赤褐色を呈している。9（C－15）は口縁部の上半を欠損している。長胴形で、最大径の位置は中央部にある。底部には木葉痕が残されている。磨滅が著しいため調整の観察は難しく、特に内面ではまったく観察できない。外面の調整は、体部下半が縦方向のヘラケズリ、下端は横方向のヘラケズリである。本竪穴住居跡内のピット5から出土した破片と接合している。10（C－16）は体部の下部を欠損している。長胴形で、最大径の位置は中央部付近にある。口縁部はやや長く、直線的に開いている。調整は磨滅によって明瞭ではないが、口縁部の内外面はヨコナデの後、ナデが行われているものと判断される。体部外面は縦方向のナデ、内面はヘラナデの後、ナデである。

第12図の6と7は床面より出土したロクロ不使用の丸底の土師器坏であり、内面にはともに黒色処理が施されている。6（C－7）は口縁部上端が弱く外反しており、内面はヘラミガキ調整、外面はヨコナデとヘラケズリ調整である。外面のヨコナデとヘラケズリの間には、筋状の痕跡等は確認されず、指をあて器面を整えた程度のものと考えられる。7（C－8）の内面はヘラミガキ調整であるが、外面は磨滅によって調整の観察は難しく、ヨコナデとヘラミガキおよびヘラケズリ調整が観察されるものの、ミガキとケズリの新旧関係は不明である。口縁部は弱く外反して立ち上がっている。底部は大きく失われているが、体部下半にヘラケズリ調整が施されていることから底部もヘラケズリと推定される。

第13図1～5は1号土坑より出土したロクロ不使用の土師器であり、1・2の坏の内面には黒色処理が施されている。1（C－4）の坏は平底であるが、体部が強く弯曲して底部へと移行するため底部との境は不明瞭である。

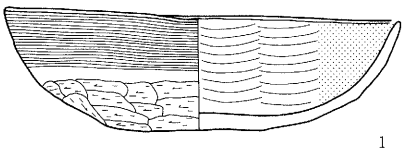
内面はヘラミガキ調整、外面はヨコナデとヘラケズリ調整である。内面には酸化鉄が付着していることから、ヘラミガキの単位を確認することはできない。外面のヨコナデとヘラケズリの間には、筋状の痕跡等は確認されず、指をあて器面を整えた程度の調整と考えられる。本竪穴住居跡内の床面から出土した破片と接合している。2（C－3）は平底の坏であるが、底部はわずかに丸みをもつと考えられ、体部と底部との境は不明瞭である。口縁端部と底部の一部を欠損する。調整は、内面はヘラミガキ、口縁部の外面はヨコナデである。体部の調整は磨滅のため不明である。接合した破片は、1号土坑を切る後世のピット115からも出土している。3（C－12）は口縁部と体部の下半を欠損する甕である。口縁部側を上にした正位置の状態で出土しており、土坑内に設置されていた可能性が高い。体部の最大径は、中央部よりやや下の位置にある。内外面ともに磨滅しており、特に外面の磨滅が著しく、調整は観察できないが、体部の上端にヨコナデによると考えられる弱い稜が認められる。内面の調整の観察も困難であり、上半にのみナデ調整が認められる程度である。ススやコゲの付着は観察されないものの、体部外面の下部から中央部にかけてと、内面の上部は暗く変色しており、煤けたような色調を呈している。4（C－13）は口縁部と体部下端から底部にかけてを欠損する、長胴形の甕である。最大径の位置は体部中央付近にある。歪みが著しく、向きを変えると土器の傾きも変化する。外面の調整は口縁部がヨコナデ、頸部がヘラナデ、体部が縦方向のヘラケズリであり、内面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラナデである。ススやコゲの付着は認められないが、器面には黒斑状の黒色の部分と、赤褐色の赤変した部分とが観察される。5（C－10）は口縁部と体部下端から底部にかけてを欠損している。長胴形の甕で、最大径の位置は体部中央付近にある。全体的に歪みが認められる。口縁部の調整は内外面ともヨコナデ、体部は外面が縦方向のヘラナデであり、内面はナデである。内面のヨコナデとナデの新旧は不明である。外面にススの付着はないが、器面は煤けた色調であり、内面の色も暗い。

第14図1～3は、使用による磨滅と損傷が認められる礫石器と、砥石である。1（Kc－10）は住居の床面から出土している。1側面が平坦で、平面形が隅丸三角形を呈する礫を素材としており、片面には磨痕が残されている。3箇所の突出部分と長辺の1箇所の計4箇所に敲打痕が認められ、a面右側の突出部の敲打痕が最も顕著である。石材は安山岩である。2と3は住居の周溝より出土している。2（Kc－11）は凹凸のある不整形の礫を素材としており、片面に部分的な磨痕が認められる。また、1側縁の中央部が突出した部位には、わずかな敲打痕が観察される。磨痕は確認される面の最も高い箇所にみられ、ゆるやかな凹凸がある。石材は珪質頁岩である。3（Kd－2）は折れた砥石の一端である。表裏両面と両側面が使用され、磨痕が観察される。b面が最も頻繁に使用されており、長軸方向に弯曲している。他の面には製作時の剥離痕が磨痕下に認められる。端面は使用されておらず、製作時の剥離面が明瞭に残されている。石材は珪化凝灰岩が用いられている。

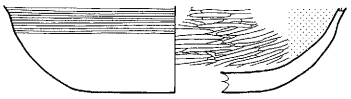


図版番号	登録番号	種別・器種	出土遺構・層位	法量(cm) 口径	器高	底径	特徴 外面	内面	底部	備考	写真番号
12図 1	C－ 9	土師器・坏	SI1 堆1層	12.3	4.8		ヨコナデ	ヨコナデ			17- 1
12図 2	C－14	土師器・坏	SI1 堆1～3層	12.5	4.0	5.1		ミガキ, 黒色処理			17- 2
12図 3	E－ 3	須恵器・坏	SI1 堆1層	13.4	4.0	7.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切		18- 3
12図 4	C－ 5	土師器・坏	SI1 カマド付近 堆3層	15.7	5.9		ヨコナデ,ケズリ	ミガキ, 黒色処理	ケズリ		17- 3
12図 5	C－ 6	土師器・坏	SI1 a区 堆2層	17.8	(4.8)		ヨコナデ,ケズリ	ミガキ, 黒色処理	ケズリ		17- 4
12図 6	C－ 7	土師器・坏	SI1 d区 床面	14.4	(3.9)		ヨコナデ,ケズリ	ミガキ, 黒色処理	ケズリ		17- 6
12図 7	C－ 8	土師器・坏	SI1 d区 床面	12.4	(3.3)		ヨコナデ,ミガキ,ケズリ	ミガキ, 黒色処理			17- 5
12図 8	C－11	土師器・甕	SI1 堆1～3層		(12.2)		ヨコナデ,ケズリ	ヘラナデ			18- 4
12図 9	C－15	土師器・甕	SI1 堆1～3層, pit 5		(26.7)	8.3	ケズリ		木葉痕		18- 5
12図10	C－16	土師器・甕	SI1 堆2・5層	23.0	(25.3)		ナデ	ヘラナデ,ナデ			18- 6

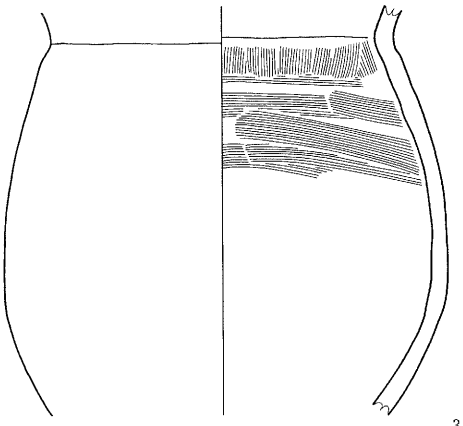
第12図　ＳＩ１竪穴住居跡出土遺物（１）



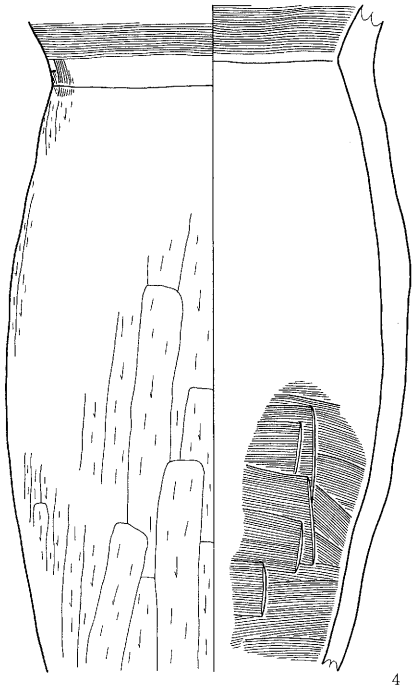
1
C－4



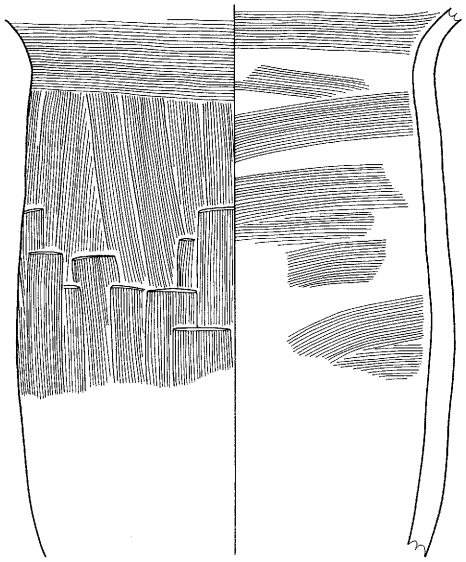
2
C－3



3
C－12



4
C－13

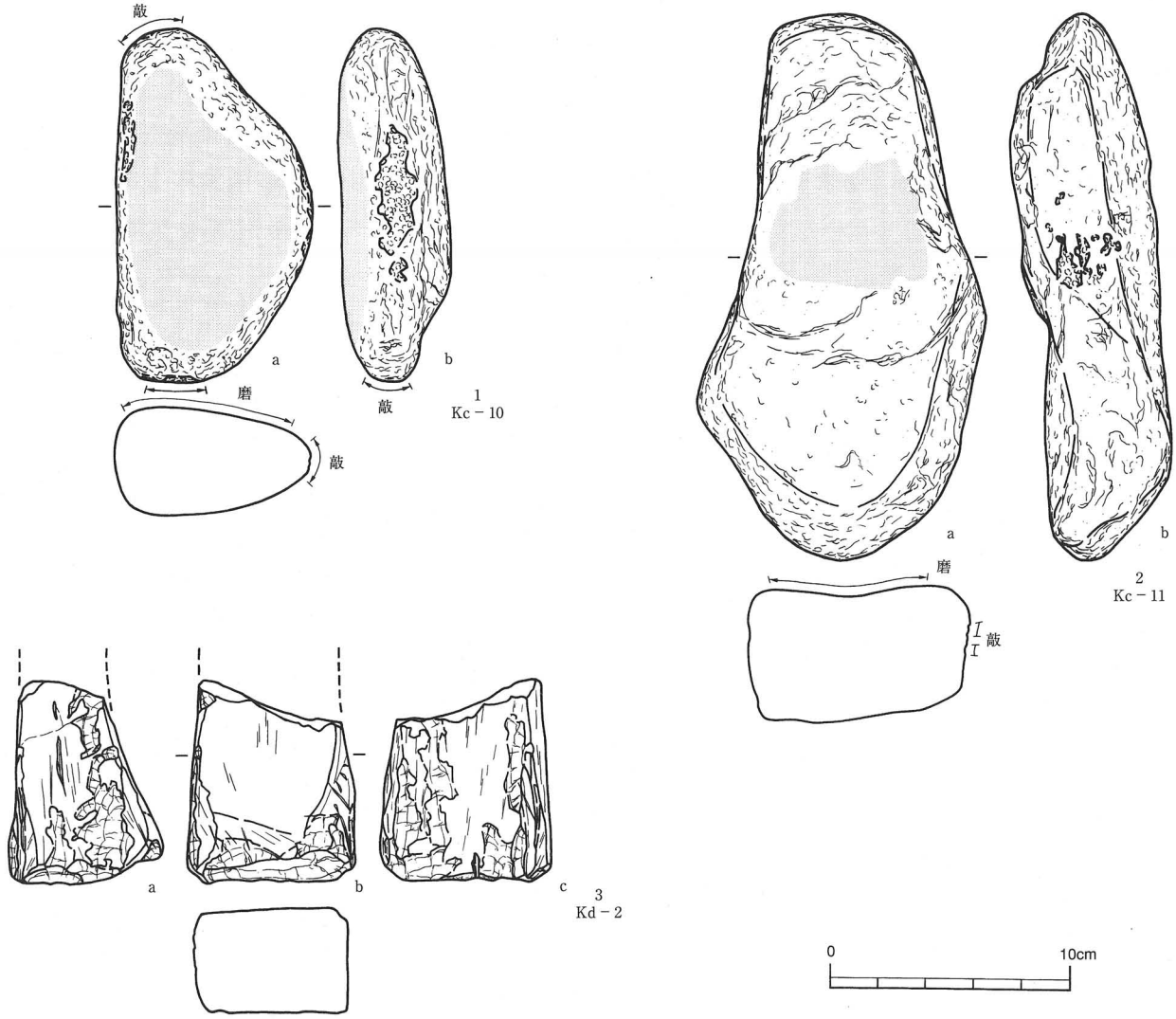


5
C－10

0　10cm

図版番号	登録番号	種別・器種	出土遺構・層位	法量（cm）			特徴			備考	写真番号
				口径	器高	底径	外面	内面	底部		
13図 1	C－ 4	土師器・坏	SI 1 1号土坑	15.8	4.5	5.2	ヨコナデ,ケズリ	ミガキ, 黒色処理	ケズリ		17- 7
13図 2	C－ 3	土師器・坏	SI 1 1号土坑		(3.4)	7.0	ヨコナデ	ミガキ, 黒色処理			17- 8
13図 3	C－12	土師器・甕	SI 1 1号土坑		(16.2)			ナデ			19- 1
13図 4	C－13	土師器・甕	SI 1 1号土坑		(26.5)		ケズリ,ヘラナデ,ヨコナデ	ヨコナデ, ヘラナデ			19- 3
13図 5	C－10	土師器・甕	SI 1 1号土坑		(21.7)		ヘラナデ, ヨコナデ	ヨコナデ, ナデ			19- 2

第13図　ＳＩ１竪穴住居跡出土遺物（２）



図版番号	登録番号	種別	石　材	出土遺構・層位	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	備　考	写真番号
14図 1	Kc－10	磨＋敲	安 山 岩	SI 1 床面	14.9	8.3	4.65	760.4		21- 4
14図 2	Kc－11	磨＋敲	珪質頁岩	SI 1 周溝	22.9	12.2	5.5	2029.0		21- 5
14図 3	Kd－ 2	砥　石	珪化凝灰岩	SI 1 周溝	(8.5)	7.2	6.2	497.1		21- 6

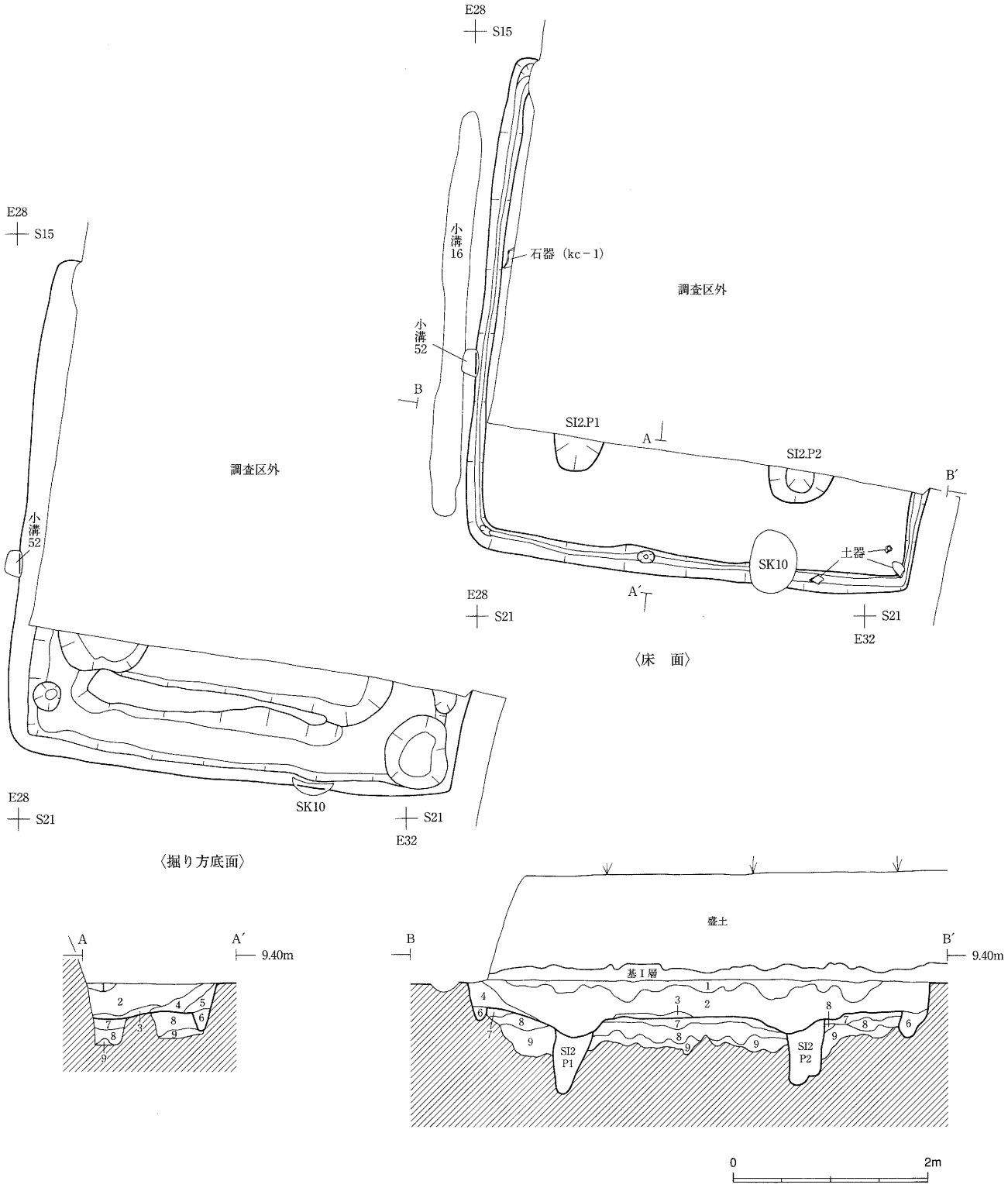
第14図　ＳＩ１竪穴住居跡出土遺物（３）

２．SI２竪穴住居跡（第15図，写真12－１～５）

調査区東壁際のほぼ中央部で発見されている。調査区内では住居の南辺側の幅1.1～1.3mと、西辺が検出されたのみであり、大部分は調査区外となっている。そのため北辺の状況やカマド、その他の施設などは不明である。

［平面形・規模・方向］　平面形は、北東角が確認されていないものの、ほぼ隅丸方形を呈するものと推定され、東西軸長4.72m、南北軸長5.07mである。方向は、南辺を基準としてＥ－６°－Ｓであり、SI１竪穴住居跡と同一方向である。

［堆積土］　検出面から床面までの深さは30～38cmである。堆積土は５層に分層される。１層、２層はにぶい黄褐色のシルトである。１層下面で小溝状遺構群の南北方向の溝跡が４条検出されており（小溝48～51）、小溝状遺構群が形成された段階では住居跡が完全には埋没していなかったか、埋没後に２層以下が圧縮され１層が沈み込んだもののいずれかと考えられる。２層は黒褐色の粘土質シルトのブロックを多量に含み、人為的堆積である可能性が高い。３層から５層は、灰黄褐色、黒褐色、にぶい黄褐色の粘土質シルトであり、自然堆積層と考えられる。

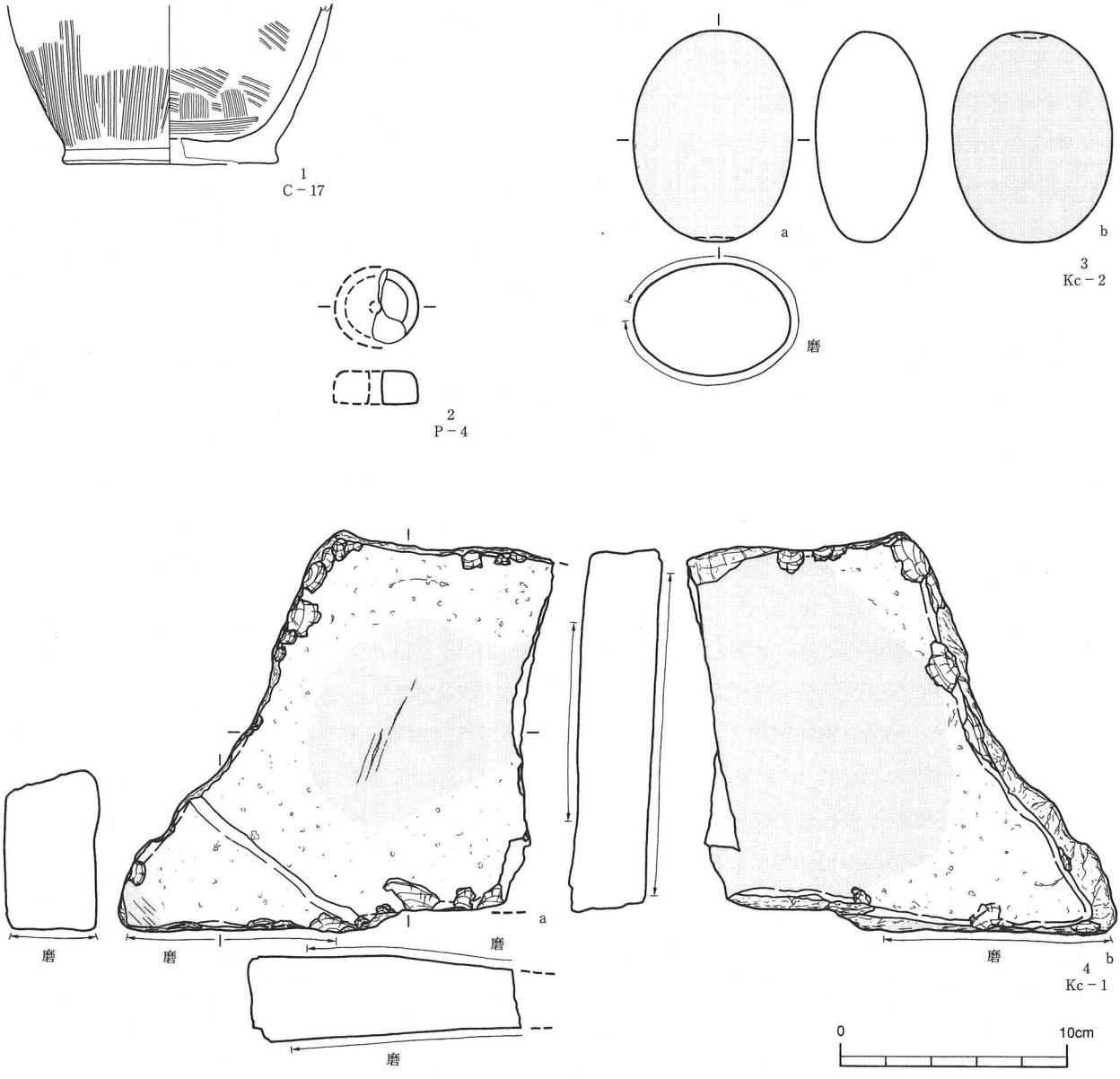


遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	全体に酸化鉄斑，マンガン粒を多量に含む．
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	直径5㎝内の10YR3/2 黒褐色粘土質シルトをブロック状に多量に含む直径1㎝内の焼土，炭化物ブロックをわずかに含む．
	3	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/3 にぶい黄褐色シルトをブロック状に少量含む．
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	直径1㎝内のにぶい黄褐色シルトをブロック状に少量含む．
	5	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色シルトを小ブロック状にわずかに含む．
	6	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	10YR3/2 黒褐色粘土質シルトの小ブロックを多量に含む．
	7	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	10YR4/1 褐灰色粘土質シルトを粒状に含み，10YR5／2 灰黄褐色粘土質シルトをブロック状に多量に含む．
	8	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2 黒褐色粘土質シルトをブロック状に多量に含む．
	9	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	10YR3/2 黒褐色粘土質シルトを小ブロック状にわずかに含む．下面の凹凸著しい．
P1	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	直径2㎝内の10YR3/2黒褐色粘土質シルトをブロック状に多量に含む．
P2	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	直径2㎝内の10YR3/2黒褐色粘土質シルトをブロック状に多量に含む．

第15図　ＳＩ２竪穴住居跡平面図・断面図

［床面・壁面］　床面は検出された範囲内では、ほぼ平坦である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、床面からの高さは最大で34.5cmである。

［柱穴と周溝］　床面で検出されたピット１と２はともに北半が調査区外に延びる部分的な検出であるが、位置関係から主柱穴と判断される。主柱穴の平面形は、不整円形と推定される。床面からの深さは、確認された底面で、69～76cmである。柱痕跡は確認されなかった。周溝は確認された壁際ですべて認められ、断面の形状はU字形を呈している。床面からの深さは7.5～26cmである。



図版番号	登録番号	種別・器種	出土遺構・層位	法量(cm) 口径	器高	底径	特徴 外面	内面	底部	備考	写真番号
16図 1	C－17	土師器・甕	SI 2 床面		(7.0)	9.6	ハケメ	ハケメ,ナデ,ヘラナデ			19- 4

図版番号	登録番号	種別	出土遺構・層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考（推定法量）	写真番号
16図 2	P－4	紡錘車	SI 2 堆 2層	(3.3)	(2.0)	1.5	(10.0)	狭端面径2.8cm, 広端面径3.7cm, 貫通孔径0.6cm	20- 9

図版番号	登録番号	種別	石材	出土遺構・層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	写真番号
16図 3	Kc－2	磨	凝灰岩	SI 2 周溝	9.3	7.1	4.9	464.7		21- 7
16図 4	Kc－1	磨	安山岩	SI 2	17.7	(19.4)	4.6	1863.5	両面	21- 8

第16図　ＳＩ２竪穴住居跡出土遺物

［カマド］　調査区内で検出された住居の西辺と南辺にはカマドは付設されていない。北辺もしくは東辺に設けられたと推測される。

［住居掘り方］　住居の掘り方は壁際に沿って溝状に確認され、北側の調査区壁際が落ち込んでいることから、住居の中央部も掘り込まれていたものと考えられる。掘り方底面は全般的に凹凸が著しく、深さは15～40cmである。

［重複］　SK10土坑、小溝状遺構群に切られている。

［出土遺物］　本竪穴住居跡では、部分的な検出ということもあり、遺物の出土量は多くはない。床面からの出土は土師器甕１点であり、周溝からは礫石器が１点出土しているのみである。また、ピット１から縄文土器が３点出土しているが、周溝出土の礫石器と同様に混入によるものである。

堆積土の１～５層の出土遺物は、土師器片47点、須恵器片６点、土製紡錘車１点、縄文土器片６点、礫石器１点であり、掘り方の埋め土からは土師器片10点と縄文土器片25点が出土している。

おもな出土遺物を第16図に図示した。

第16図１（C－17）は床面より出土したロクロ不使用の土師器甕である。体部下半から底部にかけてのみ残存しており、他の部位はすべて欠損している。外面の調整はハケメ、内面はハケメ、ナデ、ヘラナデであるが、底部は欠損と磨滅により調整等の観察はできない。外面は赤変し、ススが付着しており、内面には漆と考えられる付着物がみられる。２（P－４）は約半分を欠損する土製の紡錘車である。厚さは1.5cm、広端面の推定径は3.7cmである。表面の状態が良好ではなく、調整などの観察は難しい。３（Kc－２）は磨面の観察される礫石器である。表裏両面および両側縁、上下両端縁と、ほとんどの面が磨られており、ａ面の左側縁に自然面がわずかに残されるのみである。上下両端縁の磨面は著しく、やや平坦な面を形成している。石材は凝灰岩である。４（Kc－１）は安山岩の扁平な角礫を素材とした、表裏両面に磨痕が観察される礫石器である。扁平な角礫の表裏両面の周縁にまばらな剝離が施され、角が落とされている。磨痕は表裏両面とａ面の下端縁に観察される。ａ面中央の磨痕は右上がりの条線状のキズを伴い、左斜め下の磨痕には右下がりの擦痕が認められる。ａ面の右側面は欠損面である。

３．SI３竪穴住居跡（第17図，写真12－６～８）

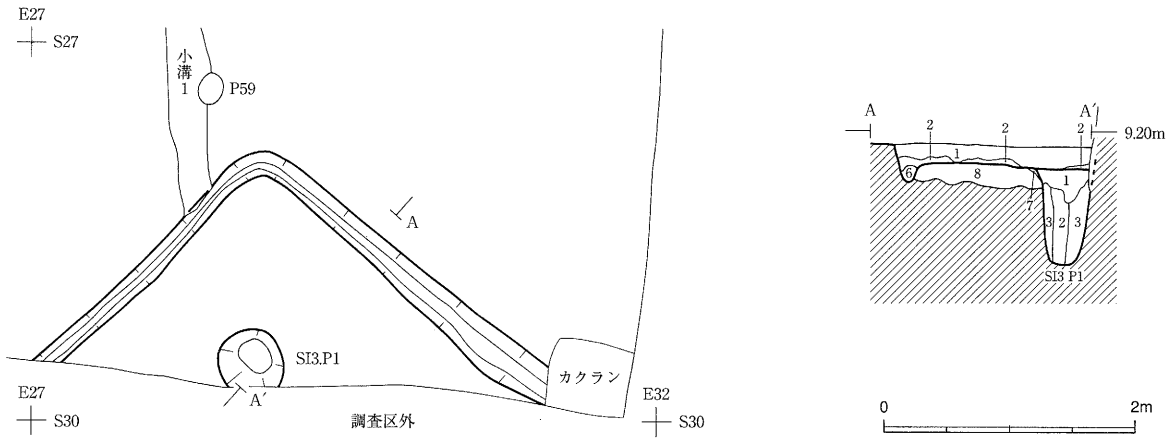
調査区の南東角で発見された竪穴住居跡であるが、住居の一角と主柱穴のひとつと考えられるピットが確認されたのみで、大部分は調査区外へ延びている。そのためカマドの有無や位置、その他の施設などについては不明である。出土遺物も多くはない。

［平面形・規模・方向］　平面形は方形を呈するものと推測されるが、東西および南北の軸長はともに不明である。方向は南西から北東へ延びる辺を基準としてＮ－45°－Ｅであり、SI１竪穴住居跡、SI２竪穴住居跡と大きく異なっている。

［堆積土］　検出面から床面までの深さは16～21.5cmであり、堆積土は５層に分層される。４層と５層は住居の壁際に部分的に分布する層であり、住居の床面は３層に覆われている。１～３層は黒褐色からにぶい黄褐色のシルト質粘土である。３層の下面には部分的に炭化物が認められる。１～５層には人為的堆積を推測させるような多量のブロック等は確認されず、SI１竪穴住居跡、SI２竪穴住居跡とは堆積状況が異なっている。

［床面・壁面］　床面は検出された範囲内ではほぼ平坦である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、床面からの高さは最大で21.5cmである。

［柱穴と周溝］　床面で検出されたピットは、一部調査区外となるものの、ほぼ全体が確認され、住居内の位置関係から主柱穴と判断される。平面形は不整円形で、床面からの深さは76cmである。長軸17cm、短軸14cmの円形に近い柱痕跡が確認された。周溝は確認範囲内すべてで認められ、断面形状はＵ字形を呈している。床面からの深さは11～18cmである。堆積土はにぶい黄褐色のシルト質粘土であり、基本層位の第Ⅳ層を小ブロック状に含んでいる。



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土をブロック状にわずかに含む.
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	層上部に10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土を粒状に含み下部に特に多い.
	6	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	4層を小ブロック状に含む. 周溝堆積土.
	7	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含む.
	8	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状にわずかに含む. 下部に下層のブロックを含み, 底面は凹凸が著しい.
P1	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒をわずかに含む.
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を微量含む. しまりなし. 柱痕跡.
	3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	直径1㎝内の褐灰色粘土質シルトを少量含む.

第17図　ＳＩ３竪穴住居跡平面図・断面図

［カマド］　調査区内で検出された範囲内ではカマドは確認されず、有無についても不明である。

［住居掘り方］　掘り方の深さは11～20㎝であり、底面には全般的に凹凸が著しい。埋め土はにぶい黄褐色のシルト質粘土であり、下層には基本層位の第Ⅳ層および第Ⅴａ層のブロックが認められる。

［重複］　小溝状遺構群に切られている。

［出土遺物］　本竪穴住居跡からの遺物の出土量は少ない。堆積土中より土師器片28点、縄文土器片25点、打製石器３点、掘り方の埋め土から土師器片８点、縄文土器片17点、礫石器１点が出土しているのみで、混入と考えられるものが多い。また、主柱穴と考えられるピットからも土師器片が４点出土しているが、堆積土および掘り方出土遺物と同様にいずれも細片であり、図および写真を掲載するまでにはいたらなかった。

４．SI４竪穴遺構（第10図，写真６－３）

調査区北半のほぼ中央部で検出されているが、SI１竪穴住居跡に切られ大部分が失われている。そのため、わずかに残存する部分から竪穴住居跡の可能性も考えられるものの、主柱穴と特定されるピットやカマドは検出されず根拠に乏しいことから、竪穴遺構として扱うこととした。

［平面形・規模・方向］　平面形は南北に長い長方形と推測され、西辺はSI１竪穴住居跡の西辺と重複している。南北軸長は5.83mであり、東西軸長は4.12mと推定される。方向は、南辺を基準としてＥ－10°－Ｓである。

［堆積土］　検出面から床面までの深さは16～21.5㎝である。堆積土は、にぶい黄褐色のシルト質粘土である。

［底面・壁面］　検出された底面は、壁面から移行した部分のみの残存であるため、状態は不明である。壁面は検出された範囲内ではゆるやかに立ち上がっている。

［柱穴と周溝］　柱穴の有無は不明であり、周溝は確認されていない。

［重複］　SB１～３掘立柱建物跡、SI１竪穴住居跡、小溝状遺構群に切られている。

［出土遺物］　出土遺物は少なく、堆積土中より土師器片が５点出土しているのみであり、図および写真を掲載するまでにはいたらなかった。

第3節　土坑

今回の調査によって発見された土坑は10基である。各土坑からの出土遺物は少なく、遺物が出土しない土坑もあることから、時期不明なものが多い。

1．SK1土坑（第18・19図，写真13－1・2）

調査区中央部の東側で確認された土坑である。平面形は長軸76cm、短軸68cmのほぼ円形に近く、深さは15cmである。断面形は大きく開いた、浅いU字形を呈しており、底面には若干の凹凸が認められる。堆積土は暗灰黄色のシルトであり、褐色の粘土質シルトをブロック状に含んでいることから人為的堆積と考えられる。

底面中央から扁平な礫が1点出土しているが、使用による磨痕や損傷などの痕跡は確認されなかった。他に遺物は出土していない。

小溝状遺構群の小溝18に切られている。

2．SK2土坑（第18・19図，写真13－3・4）

調査区中央部で確認された土坑である。長軸115cm、短軸107cmの、西側に張り出す不整円形で、深さは35cmである。断面形は開いた逆台形に近く、中位に屈曲点がある。底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分層され、暗灰黄色のシルトである上層に、褐色の粘土質シルトがブロック状に認められることから、人為的堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

3．SK3土坑（第18・19図，写真13－5・6）

調査区中央部で確認された土坑であり、SK2土坑の西側に位置する。平面形は長軸189cm、残存短軸152cmの楕円形で、深さは74cmである。断面形は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に分層されるが、堆積土の大部分を占める1層に、にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に含んでいることから、人為的堆積と考えられる。3層は自然堆積層であり、4層は土坑壁面の崩落土である。

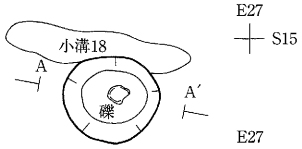
堆積土中より土師器片11点、須恵器坏片1点、縄文土器片4点が出土しているが、いずれも細片であり、図、写真を掲載するまでにはいたらなかった。

4．SK4土坑（第18・19図，写真13－7・8）

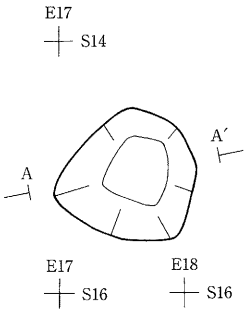
調査区中央部のやや南側で確認された土坑である。平面形は楕円形と推定されるが、攪乱によって西側が失われている。残存長軸166cm、残存短軸133cmで、深さは68cmである。断面形は大きく開いた字形を呈しており、底面には凹凸が認められる。堆積土は暗灰黄色のシルトであり、にぶい黄褐色の粘土質シルトをブロック状に含んでいることから人為的堆積と考えられる。

SK5土坑および小溝状遺構群の小溝10を切っている。

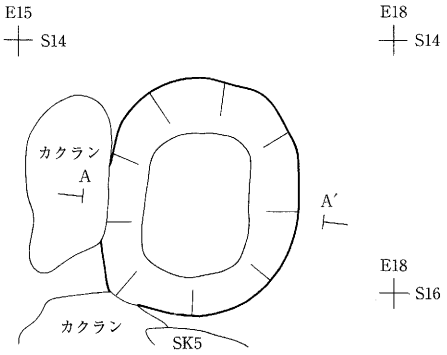
堆積土中より土師器片1点、縄文土器片2点、剥片石器1点が出土している。剥片石器は削器である。第20図2に図示した（Ka－1）。表面に自然面を残す縦長剥片を素材としている。a面の右側面は素材剥片を剥離する際の同時割れによる面である。a面左側縁に表裏両面からの細部調整が施されており、刃角は60～80度である。また、末端には、主にb面からa面への細部調整がわずかに施されている。角度はa面左側で約75度である。器体中央の稜線には磨滅が観察される。石材は珪質頁岩である。



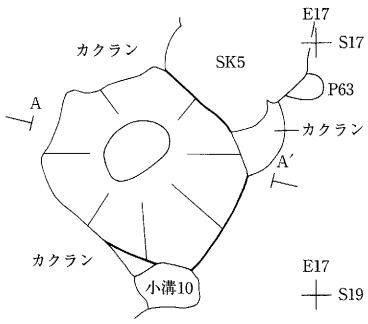
SK1



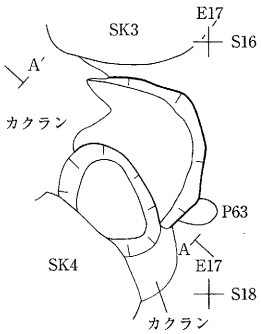
SK2



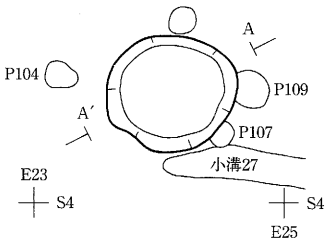
SK3



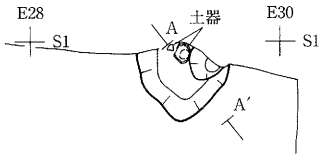
SK4



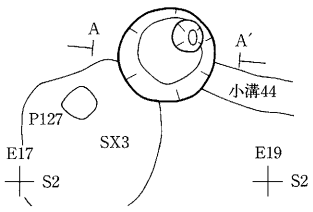
SK5



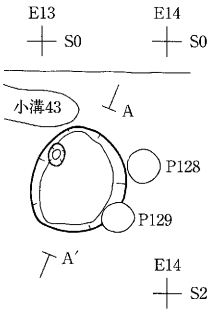
SK6



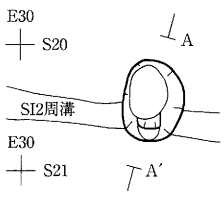
SK7



SK8



SK9



SK10

第18図　ＳＫ１～10土坑平面図

5．SK５土坑（第18・19図，写真14－１・２）

調査区中央部のやや南側で確認された土坑である。SK４土坑と攪乱に切られ、平面形は不明である。残存長軸127cm、残存短軸112cmで、深さは46cmである。底面には段差があり、南側が一段低くなっている。堆積土は灰黄褐色の粘土質シルトであり、褐色の粘土質シルトをブロック状に含んでいることから人為的堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

6．SK６土坑（第18・19図，写真14－３・４）

調査区東側の北壁に近い位置で確認された土坑である。長軸107cm、短軸75cmの不整円形で、深さは９cmである。断面形は浅いU字形を呈しており、底面はほぼ平坦である。堆積土は上層が黒色の炭化物層であり、中層、下層は暗褐色、灰黄褐色の粘土質シルトである。中層、下層は炭化物、焼土粒を含んでいる。

堆積土中より土師器片10点、須恵器坏片・甕片各２点、砥石１点が出土している。砥石を第20図３に図示した（Kd－１）。ａ、ｂ両面とａ面の右側面に使用による磨痕が残されている。ａ面中央には長軸方向に浅い溝状の凹みが認められ、凹み内には粗い擦痕が観察される。石材は珪化凝灰岩である。

7．SK７土坑（第18・19図，写真14－５・６）

調査区の北東隅で確認された土坑であり、検出は部分的で、さらに北側へ延びるものと考えられる。長軸62cm以上、短軸73cmであり、平面形は不整円形もしくは不整楕円形と推定される。深さは14cmである。断面形は浅いU字形を呈しており、底面はほぼ平坦であるが、東側に落ち込みがみられる。堆積土は暗褐色およびにぶい黄褐色の粘土質シルトである。

堆積土中より土師器片が９点出土している。第20図１にロクロ不使用の土師器甕を図示した（Ｃ－１）。底部から体部下半にかけての破片である。外面の調整は体部下端に横方向のケズリが観察されるのみであるが、輪積みの凹凸が残っている。内面のナデ調整は粗く、器面はなめらかではない。底部には２枚の葉を重ねた状態の圧痕が認められる。

8．SK８土坑（第18・19図，写真14－７・８）

調査区中央部の北壁際で確認された土坑である。長軸77cm、短軸76cmの円形で、深さは32cmである。断面形はやや開いたU字形を呈しており、底面には若干の凹凸がみられ、北側にはピット状の落ち込みがある。堆積土は上層が黒褐色の粘土質シルトであり、下層はにぶい黄褐色のシルトである。

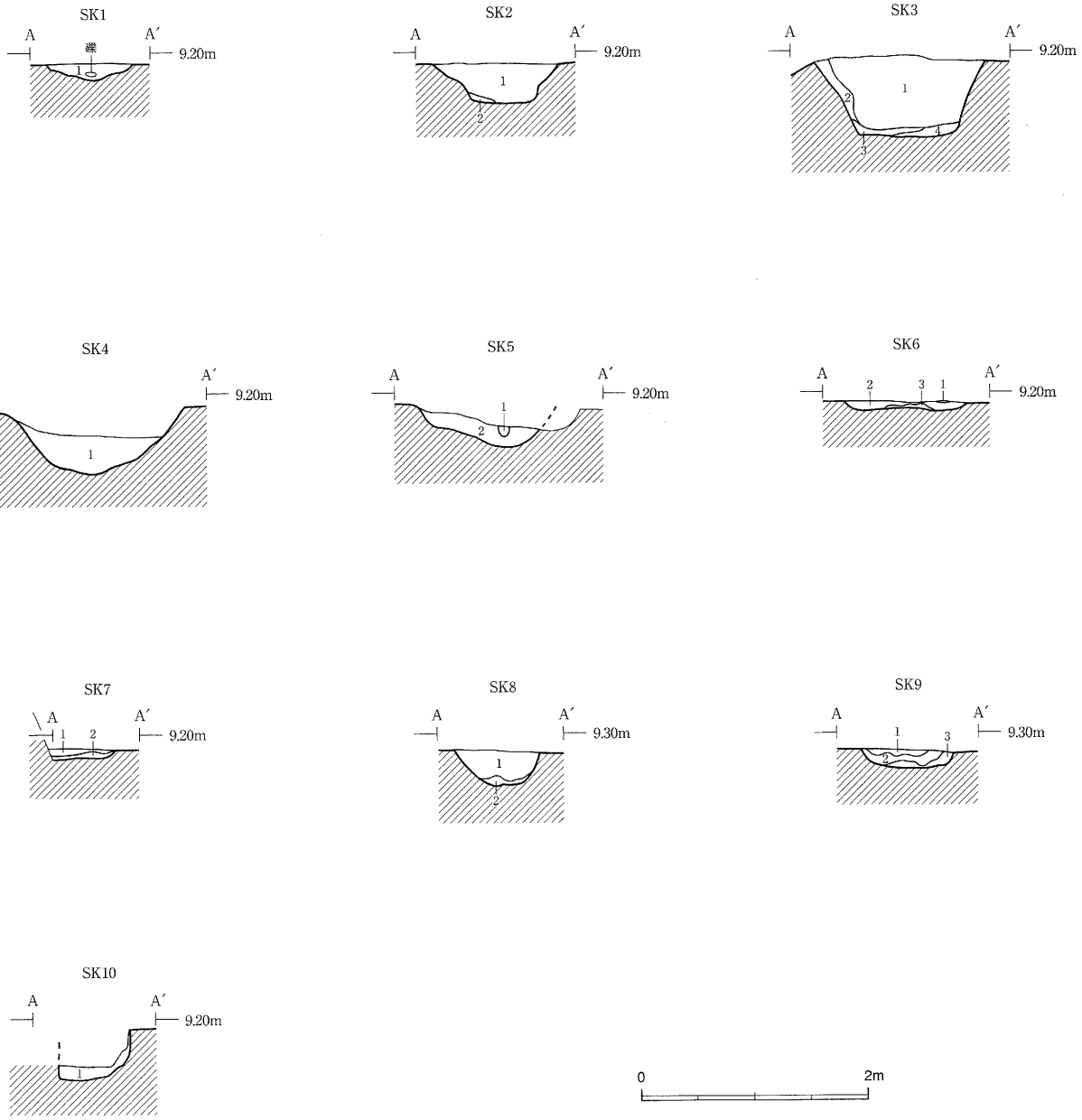
SX３性格不明遺構と小溝状遺構群の小溝44を切っている。

堆積土中より土師器片４点が出土しているが、いずれも細片であり、図化するまでにはいたらなかった。

9．SK９土坑（第18・19図，写真15－１・２）

調査区西側の北壁に近い位置で確認された土坑である。長軸86cm、短軸75cmの不整円形で、深さは17cmである。断面形は浅いU字形を呈しており、底面はほぼ平坦であるが、西側に小さなピット状の落ち込みがみられる。堆積土は黒褐色、暗褐色、にぶい黄褐色のシルト質粘土である。

出土遺物は少なく、堆積土中より土師器片が２点出土しているのみである。いずれも細片で、図化するまでにはいたらなかった。



遺構名	層位	土　　色	土　性	備　　考
SK1	1	2.5Y5/2　暗灰黄色	シルト	人為堆積土．10YR4/4褐色粘土質シルトを直径5cm以下のブロック状に含む．マンガン粒，酸化鉄斑を少量含む．
SK2	1	2.5Y5/2　暗灰黄色	シルト	人為堆積土．10YR4/4褐色粘土質シルトを直径5cm内のブロック状に含む．1cm内のマンガン粒を少量含む．
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
SK3	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	人為堆積土．10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルトを5 cm内のブロック状に含む．酸化鉄斑，マンガン粒を少量含む．
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
	3	10YR5/1 褐灰色	シルト	自然堆積層か．
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑を多量に含む．壁面崩落土か．
SK4	1	2.5Y5/2　暗灰黄色	シルト	人為堆積土．10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルトを直径3～5cmのブロック状に含む．マンガン粒を少量含む．
SK5	1	2.5Y5/1　灰黄色	粘土質シルト	酸化鉄斑をブロック状に含む．
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	人為堆積土．10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトを3cm内のブロック状に含む．酸化鉄斑を多量に，マンガン粒を少量含む．
SK6	1	10YR1.7/1　黒　色	シルト	炭化物層．直径1cm以内の焼土ブロックを含む．
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	直径5mm内の炭化物，粘土ブロックを全体的に含む．
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	焼土粒を微量含む．
SK7	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	直径5cm内のにぶい黄褐色ブロックを少量含む．炭化物粒をわずかに含む．
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	直径1cm内のにぶい黄褐色ブロックを多量含む．
SK8	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	一部にこぶし大の10YR5/4 にぶい黄褐色ブロックを含み，全体的に同小ブロックを多く含む．炭化物粒をわずかに含む．
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	ブロック状を呈する．
SK9	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	わずかに10YR5/3 にぶい黄褐色シルトを粒状に含む．
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルトを粒状に多量に含む．
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/3 暗褐色シルト質粘土を粒状にわずかに含む．
SK10	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	2cm内のにぶい黄褐色土を少量含み，焼土ブロックを多量に含む．炭化物粒をわずかに含む．

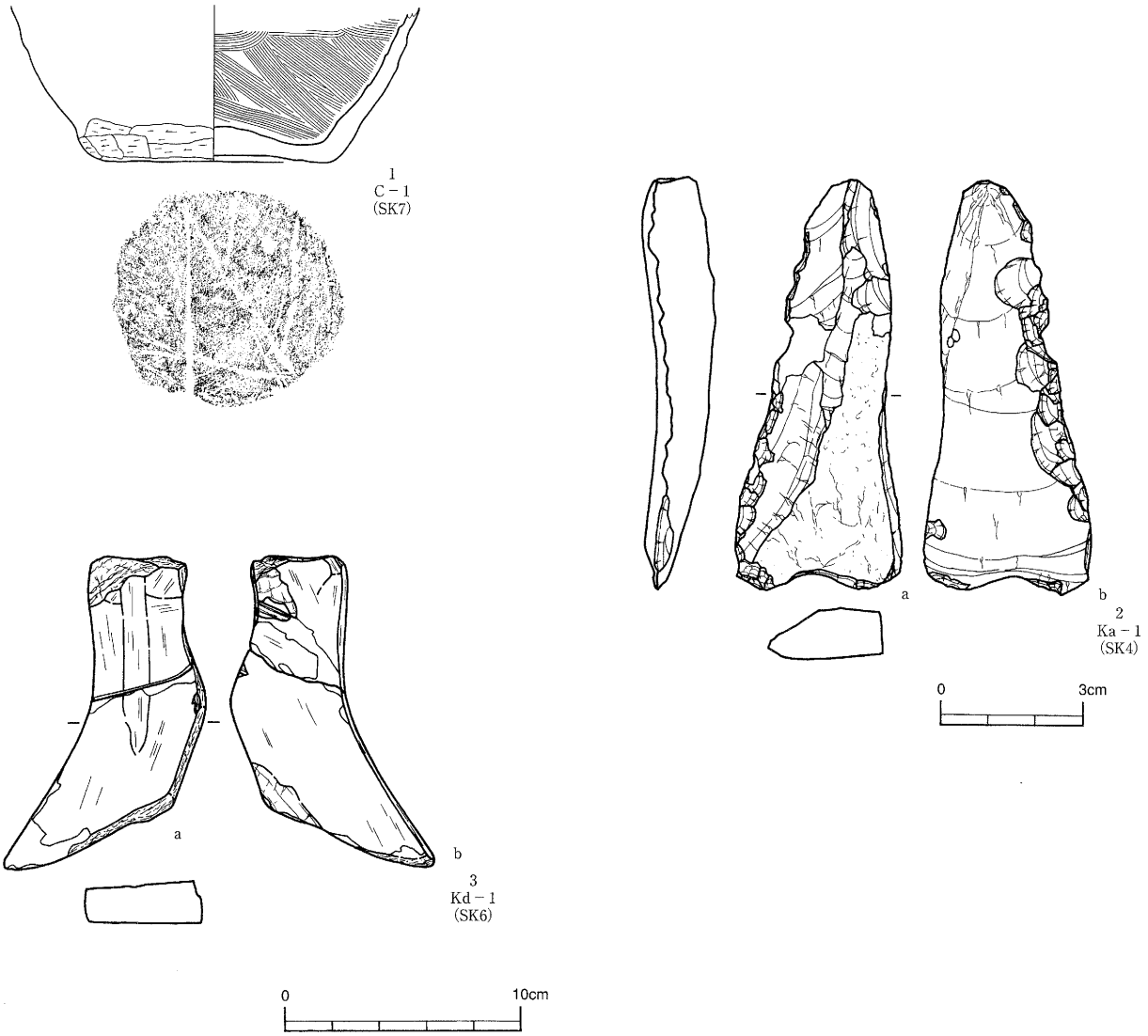
第19図　ＳＫ１～10土坑断面図

10．SK10土坑（第18・19図，写真15－３・４）

調査区南部の東側に位置している。南壁がSI２竪穴住居跡の南壁とほぼ重複しており、SI２竪穴住居跡の掘り込み作業中に別遺構であることが判明した。そのため調査によって大部分が失われ、残存部のみの記録となった。残存長軸65cm、残存短軸48cmの円形に近い平面形で、深さは45cmである。断面形はU字形を呈するものと推測されるが、ほぼ平坦な底面からの立ち上がりにはわずかな段差がみられる。堆積土はにぶい黄褐色の粘土質シルトであり、焼土ブロックを多量に含み、炭化物粒もわずかに認められる。

SI２竪穴住居跡を切っている。

堆積土中より土師器甕片３点が出土しているが、いずれも細片であり、図化するまでにはいたらなかった。



図版番号	登録番号	種別・器種	出土遺構・層位	法量(cm) 口径	器高	底径	特徴 外面	内面	底部	備考	写真番号
20図 1	C－1	土師器・甕	SK 7 堆 1層		(6.6)	10.1	ケズリ（ヨコ）	ナデ（ナナメ）	木葉痕		19- 5

図版番号	登録番号	種別	石材	出土遺構・層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	写真番号
20図 2	Ka－1	削器	珪質頁岩	SK 4 堆 1層	8.7	3.7	1.4	37.1		21- 2
20図 3	Kd－1	砥石	珪化凝灰岩	SK 6	13.3	5.5	1.9	211.5		21- 3

第20図　土坑出土遺物

第4節　溝跡

今回の調査によって発見された溝跡は3条である。SD1溝跡は残存状況は良好ではないが、調査区を横断して、さらに東西に続く溝跡と推定される。他の2条は小規模な溝跡である。

1．SD1溝跡（第24・25図，写真2－1・3、15－5・6）

調査区の南部で確認された溝跡である。東西方向に調査区を横断して直線的に延びているが、深さは一定ではない。そのため、後世の削平によって、浅い部分は残存せず途切れ途切れの状態で検出されたが、堆積土の検討から同一の遺構と判断することが可能であった。上端幅26～91cm、下端幅19～67cm、深さ1.0～23.5cmである。底面は凹凸が著しく、所々に不整楕円形の深い落ち込みがみられる。底面のほぼ全面には、平面形が半月形もしくは楕円形に近い土木具の痕跡が残されている。方向はE－6°－Sである。検出長は24.5mであるが、さらに調査区外の東西へ延びるものと考えられる。断面形は、浅いところでは大きく開いたU字形を呈し、深い箇所では逆台形を呈している。堆積土は基本層第Ⅱ層以下の土壌を含む程度によって大別2層に分層され、下部に基本層のブロックが多量に含まれる。

堆積土中より、弥生時代後期と考えられる弥生土器片1点、土師器片2点、礫石器1点が出土している。土器片はいずれも細片であり、図、写真を掲載するまでにはいたらなかった。第22図3には片面に磨痕が残された礫石器を図示した（Kc－5）。珪化木を石材としており、珪化木の年輪界に沿って割れた、わずかに弯曲する面1面に磨痕が観察される。

2．SD2溝跡（第21図，写真15－7・8）

調査区中央部のやや北側で確認された溝跡である。長さ3m21cm、上端幅50～76cm、下端幅30～39cmの規模で、深さは14～24cmである。底面はほぼ平坦であるが、南半には小さな落ち込みがみられる。方向はN－14°－Eである。断面形は逆台形を呈している。堆積土は2層に分層され、ともに暗褐色のシルト質粘土であるが、下層は基本層第Ⅱ層以下のブロックを多量に含んでいる。

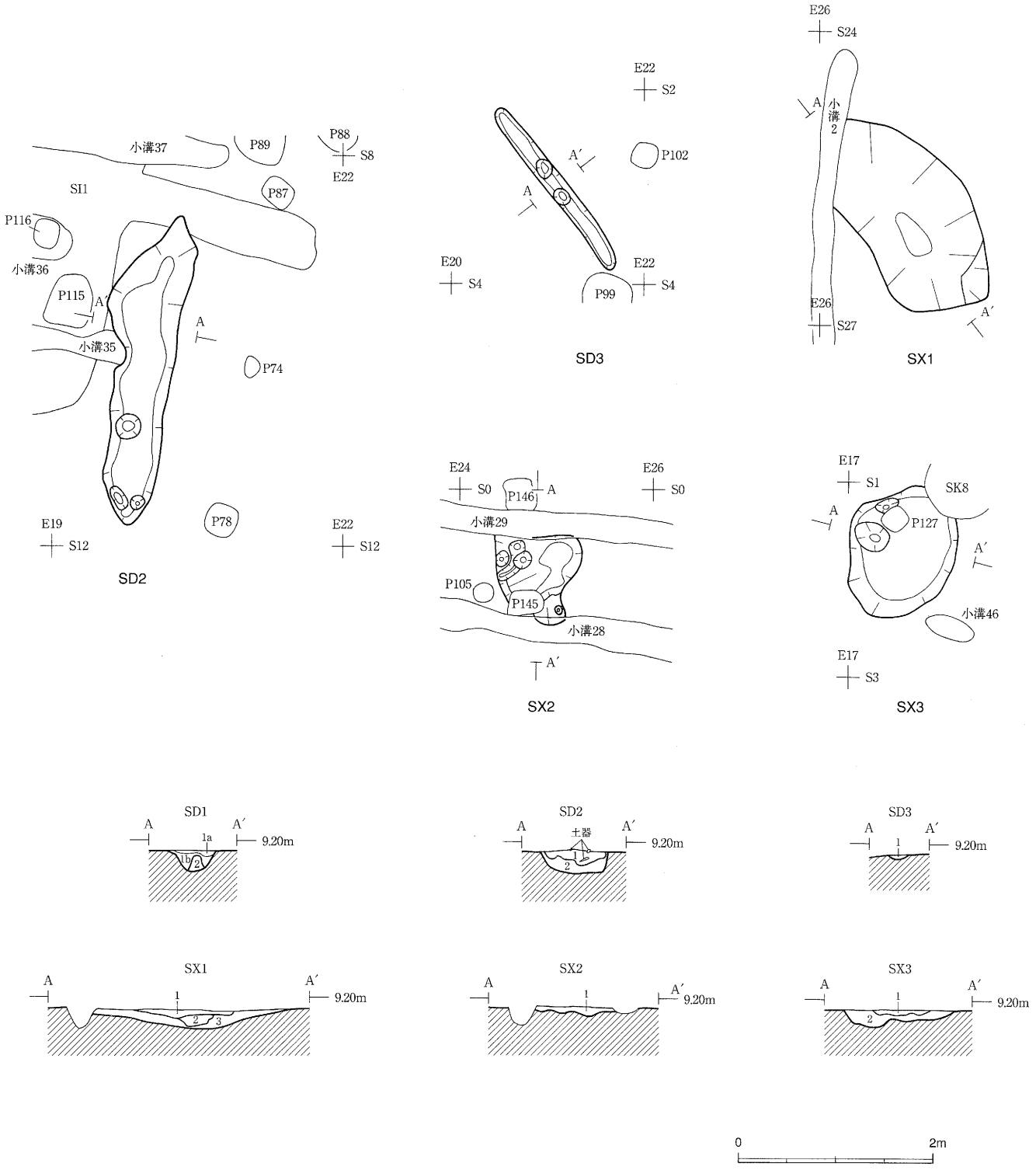
SI1竪穴住居跡と小溝状遺構群の小溝35を切っている。

堆積土の1層中より土師器・土師器片10点、須恵器坏・坏片2点が出土している。第22図1に土師器坏を図示し（D－1）、2には須恵器坏を図示した（E－1）。D－1はロクロを使用した土師器坏である。内面にはヘラミガキ調整が観察され、黒色処理が施されている。全体的に磨滅が著しく、底部も磨滅により不明である。E－1は焼成良好な須恵器坏である。器高に比べ底径が大きく、回転ヘラ切りによる切り離しである。

3．SD3溝跡（第21図，写真16－1・2）

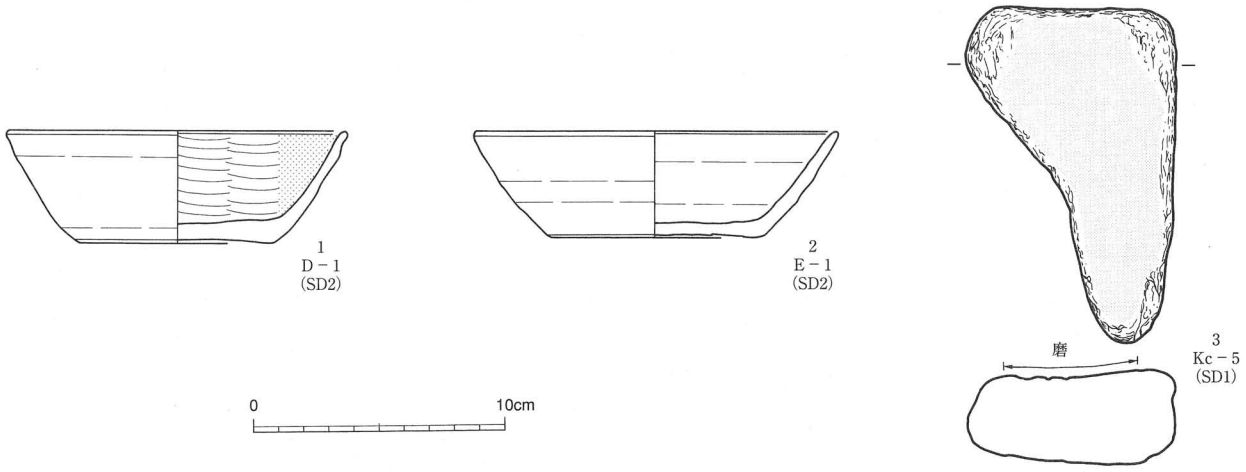
調査区東側の北壁寄りで確認された溝跡である。長さ1m98cm、上端幅19～21cm、下端幅9～13cmの小規模な溝跡で、深さは5cm前後である。底面はほぼ平坦で、中央部に小さな落ち込みが認められる。方向はN－39°－Wである。断面形は浅いU字形を呈している。堆積土は単層で、灰黄褐色の粘土質シルトである。小溝状遺構群の堆積土とは異なっており、小溝状遺構群に特徴的な黒褐色や暗褐色のシルト質粘土の混入もみられない。

遺物は出土していない。



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
ＳＤ１	1a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	直径１cm程の酸化鉄斑とにぶい黄褐色粘土質シルトをブロック状に少量含む.
	1b	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	直径１cm程の酸化鉄斑とにぶい黄褐色粘土質シルトをブロック状に多量含む.
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	直径５cm内の10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトをブロック状に少量含む.
ＳＤ２	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色粘土質シルトをブロック状に多量に含む.
ＳＤ３	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	小溝状遺構群堆積土とは異なり，黒褐色土の混入はない．基本層に類似する.
ＳＸ１	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒を微量に含む.
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルトをブロック状に少量含む.
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒を少量に含む.
ＳＸ２	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土をブロック状に含む.
ＳＸ３	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を小ブロック状に含み，炭化物を含む.
	2	10YR4/6 褐色	シルト質粘土	10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土を大きなブロック状に含み，炭化物を含む.

第21図　ＳＤ２・３，ＳＸ１～３平面図・ＳＤ１～３，ＳＸ１～３断面図



図版番号	登録番号	種別・器種	出土遺構・層位	法量（cm）			特徴			備考	写真番号
				口径	器高	底径	外面	内面	底部		
22図 1	D－1	土師器坏	SD 2 堆1層	13.6	4.5	7.8	ロクロナデ	ミガキ，黒色処理			17-10
22図 2	E－1	須恵器坏	SD 2 堆1層	14.6	4.2	8.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切		18- 1

図版番号	登録番号	種別	石材	出土遺構・層位	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考	写真番号
22図 3	Kc－5	磨	珪化木	SD 1 堆1層	13.3	8.4	3.95	472.0		21-1

第22図　ＳＤ１・２溝跡出土遺物

第５節　性格不明遺構

今回の調査では、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土坑、溝跡、小溝状遺構群、ピットなどのほかに、平面形が不定形で底面の一定しない落ち込みが３基確認された。それらを一括し、性格不明遺構として報告する。

１．SX１性格不明遺構（第21図，写真16－３・４）

調査区南部の東側で検出された遺構である。長軸232cm以上、短軸117cmの不整楕円形と推測され、深さは23cmである。底面がゆるやかに窪んだ遺構であり、断面形は大きく開いたU字形を呈している。堆積土は暗褐色の粘土質シルトと、にぶい黄褐色のシルトである。

小溝状遺構群の小溝２に切られている。

堆積土中より縄文土器片が１点出土している。

２．SX２性格不明遺構（第21図，写真16－５・６）

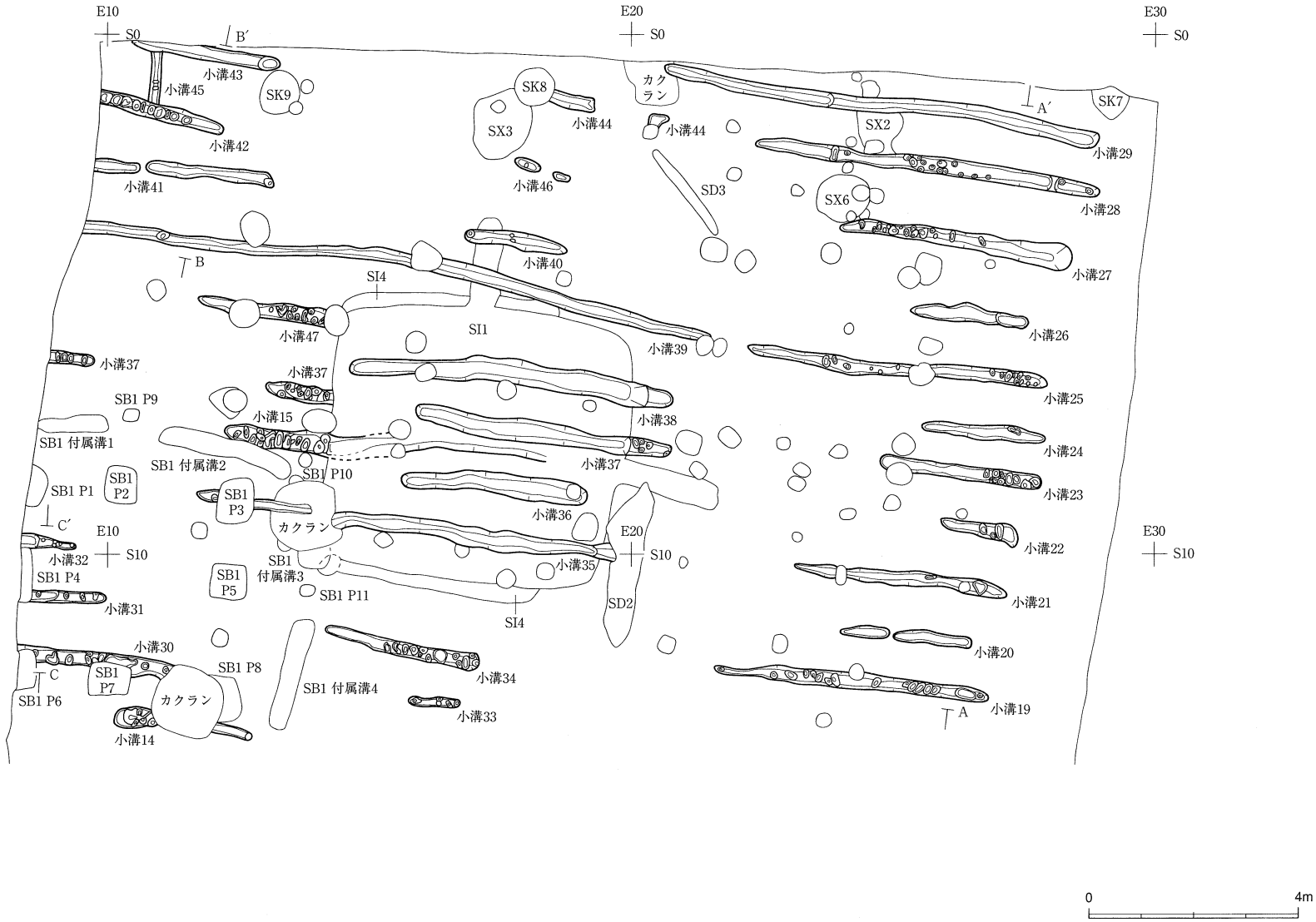
調査区東側の北壁寄りで検出された遺構である。長軸88cm以上、短軸86cmの不整形で、深さは９cmである。底面は凹凸が著しい。堆積土は単層で、灰黄褐色のシルト質粘土である。

小溝状遺構群の小溝28・29に切られている。遺物は出土していない。

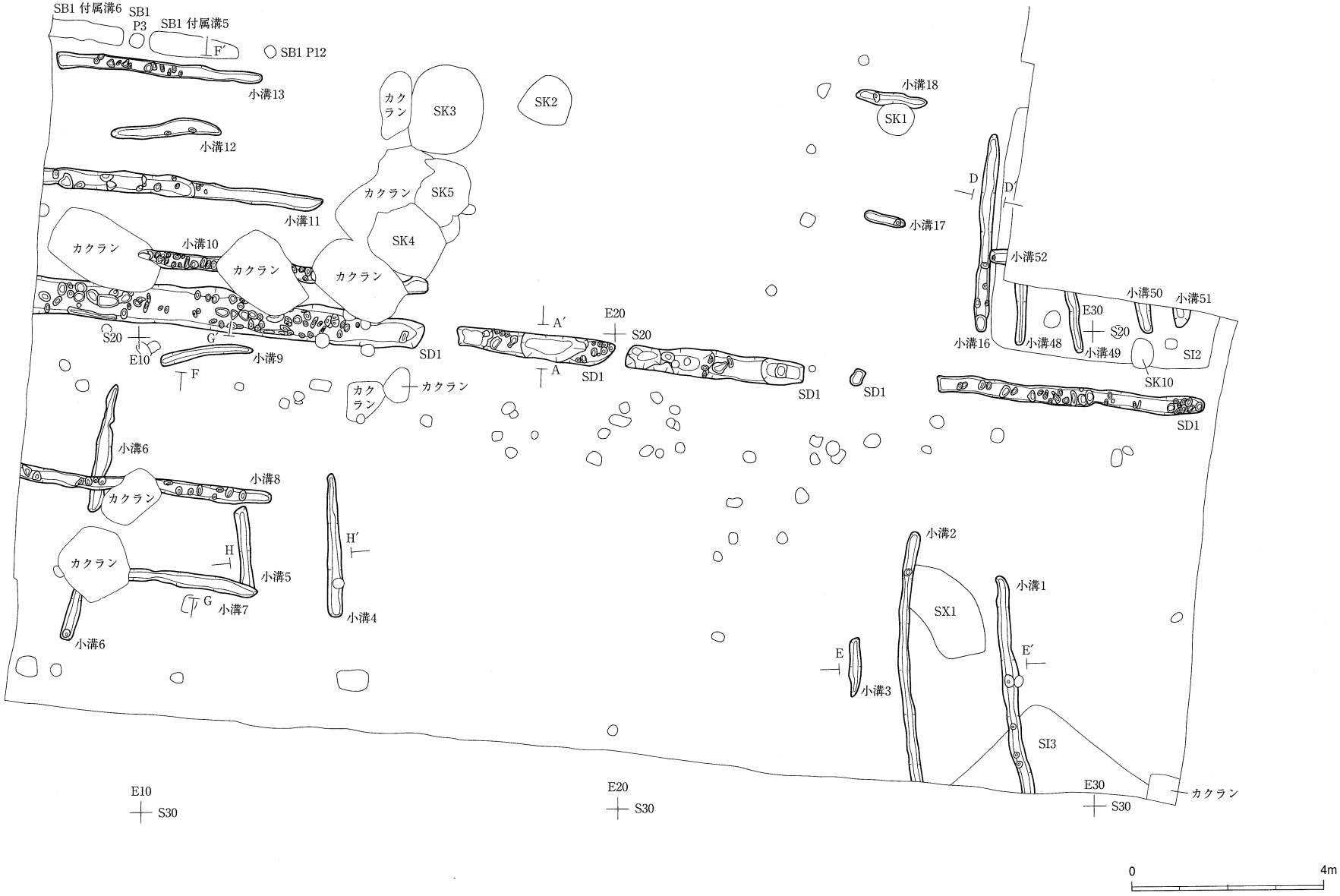
３．SX３性格不明遺構（第21図，写真16－７・８）

調査区西側の北壁寄りで検出された遺構である。長軸137cm以上、短軸116cmの不整円形で、深さは14cmである。底面には凹凸があり、西側に小さな落ち込みがみられる。堆積土は褐灰色もしくは褐色のシルト質粘土であり、炭化物を含んでいる。

SK８土坑に切られている。遺物は出土していない。



第23図　小溝状遺構群（北半部）平面図



0 4m

第24図　ＳＤ１溝跡・小溝状遺構群（南半部）平面図

第6節　小溝状遺構群

調査区北半を中心として、一定の間隔をおいて平行する細い溝跡が52条検出されている。同様な溝跡群は大野田地区周辺で多く確認され、「小溝状遺構群」と呼称されている。その性格については、畑の耕作に関わる何らかの痕跡と理解されている。本調査においてもこれらの溝跡群を小溝状遺構群として一括して捉え、それぞれの溝跡の呼称については、他の溝跡と区別するため「SD」の遺構略号は使用せず、「小溝○」として報告している。

本調査で検出した小溝状遺構群には東西方向の一群と南北方向の一群がみられる。切り合い関係では南北方向より東西方向の一群が新しく、東西方向の条数がより多く確認されている。

1．東西方向の小溝状遺構群（第23・24図，写真2－1～3）

東西方向の小溝状遺構群は、おもに調査区の北半に分布している。南半では西側にわずかに分布し、東側では痕跡的に確認されたのみである。検出された溝跡は40条であり、それぞれの溝跡の計測値を第7表に示した。検出長は0.85～12.22m以上、幅は10～48cmで、深さは浅い溝が1～4.5cm、深い溝が4～28.5cmである。断面形はU字形もしくは開いたU字形を呈している。溝と溝との間隔は心心距離で約0.8～2.4mである。

堆積土には黒褐色もしくは暗褐色のシルト質粘土を主体とするものと、にぶい黄褐色もしくは灰黄褐色のシルト質粘土を主体とするものとがみられるが、互いにそれぞれをブロック状に含んでいることから、どちらが主体的であるかの違いによるものであり、類似した堆積状況を示している。

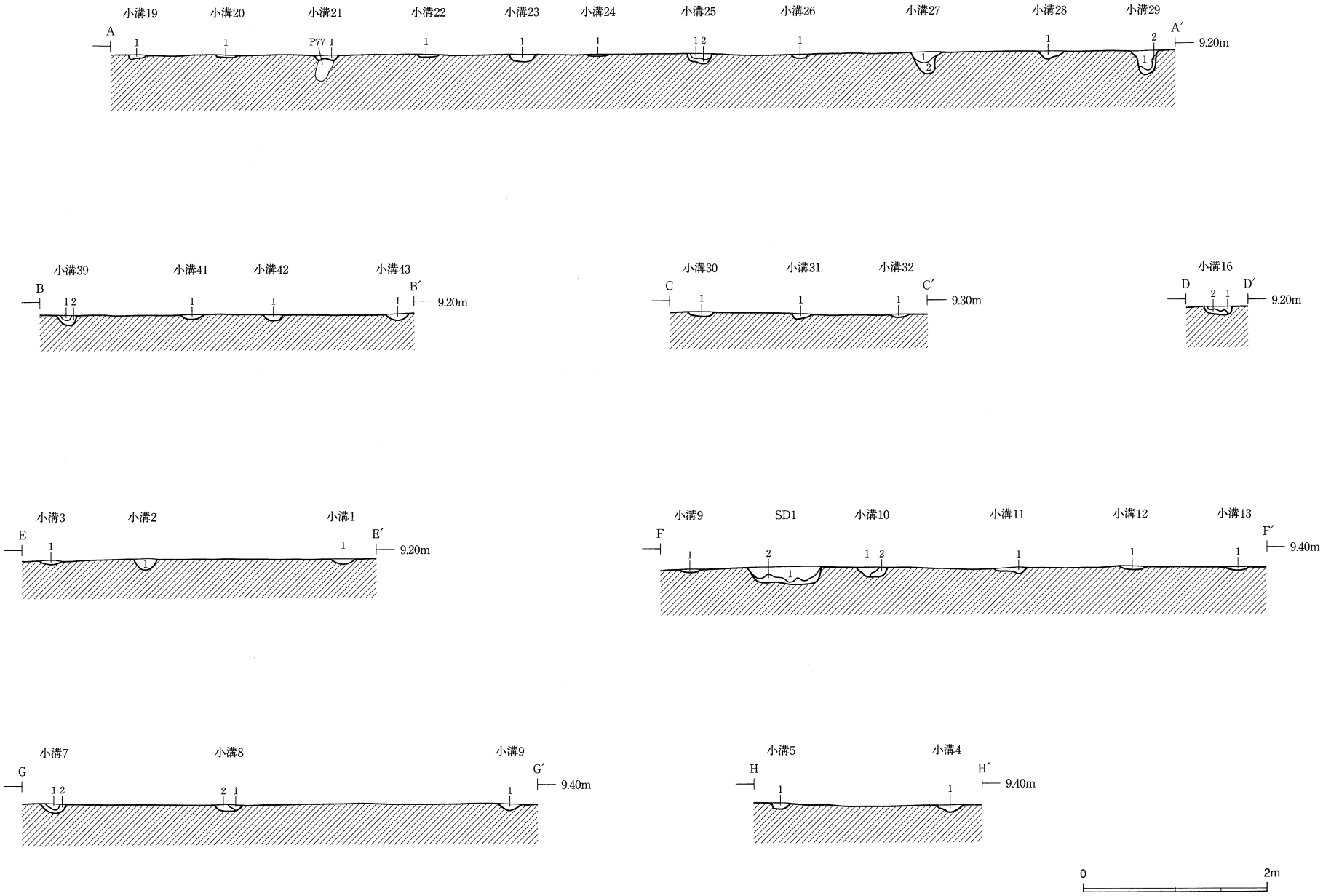
それぞれの溝跡からの出土遺物は全般的に少なく、40条のうち26条では遺物は出土していない。遺物が比較的多く出土している溝跡は小溝15、35～40であるが、いずれもSI1竪穴住居跡を切っていることから、出土遺物のほとんどは、本来はSI1竪穴住居跡に属していた遺物の混入によるものと考えられる。残りの7条の溝跡からは土師器片が1～3点出土しているのみである。第26図の遺物は、小溝37から出土した土師器坏と小溝39出土の礫石器である。第26図1はロクロ不使用の土師器坏であり、丸底で、口縁部が軽く屈曲している。内面には黒色処理が施されている。調整は外面の口縁部がヨコナデ、内面はミガキ調整である。外面の体部調整は磨滅により不明である。2はやや扁平で棒状の礫の一端に敲打痕が残された礫石器である。敲打痕はわずかな損傷として観察され、認められる部位は、長軸の一端とc面の一端である。石材には凝灰岩が用いられている。3は扁平な円盤状の礫の片面に磨痕が認められる礫石器である。磨り面には大別して2方向の線状痕が観察される。石材はデイサイトである。

2．南北方向の小溝状遺構群（第23・24図，写真2－1～3）

南北方向の小溝状遺構群は、調査区北西端で検出された小溝45を除き、すべて調査区の南半に分布している。しかし南半中央部では検出されず、西側で3条、東側で8条確認されている。検出された溝跡は計12条であり、それぞれの溝跡の計測値を第8表に示した。検出長は1.26～5.30m以上、幅は12～35cmで、深さは浅い溝が3.5～4.0cm、深い溝が17.5cmである。断面形態はU字形もしくは開いたU字形を呈している。溝と溝との間隔は心心距離で0.8～3.2mである。

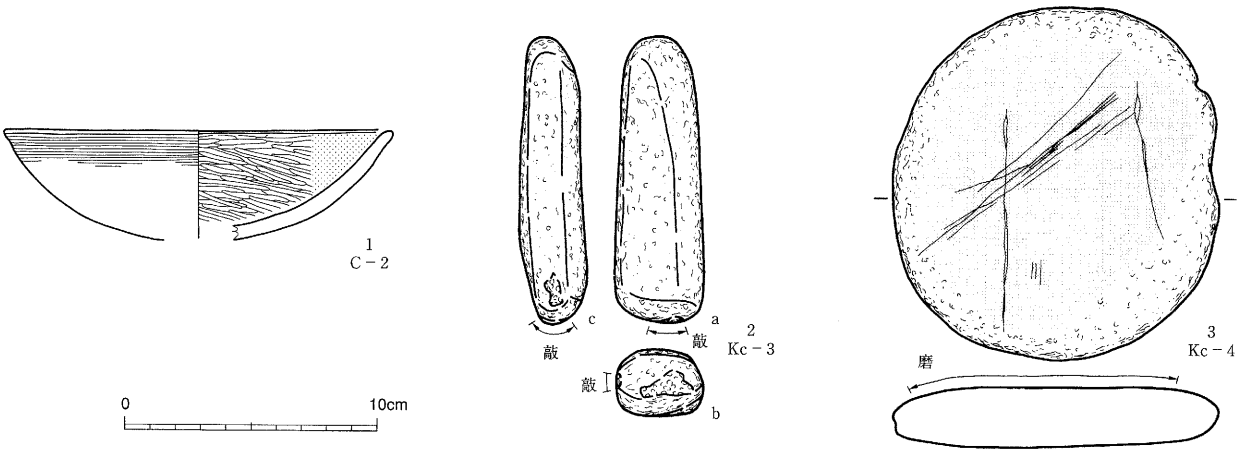
堆積土には、黒褐色もしくは暗褐色のシルト質粘土を主体とするものと、にぶい黄褐色もしくは灰黄褐色のシルト質粘土、粘土質シルトを主体とするものとがみられ、互いにそれぞれをブロック状に含んでおり、東西方向の一群と類似した堆積状況である。

それぞれの溝跡からの出土遺物は少なく、12条のうち7条では遺物は出土していない。遺物が比較的多く出土している溝跡は小溝1であるが、土師器片6点と縄文土器3点の計9点である。それ以外の4条の溝跡からは土師器



第25図　ＳＤ１溝跡・小溝状遺構群断面図

片が1点ずつ出土しているにすぎない。なお、SI 2竪穴住居跡を切る小溝49から出土した土師器坏片は、SI 2竪穴住居跡の堆積土から出土した破片と接合していることから、小溝50、51出土土師器片を含め、本来はSI 2竪穴住居跡に属していた遺物の混入と考えられる。



図版番号	登録番号	種別・器種	出土遺構・層位	法量（cm）			特徴			備考	写真番号
				口径	器高	底径	外面	内面	底部		
26図 1	C－2	土師器・坏	小溝37, 基Ⅰ層	15.5	(4.3)		ヨコナデ	ミガキ, 黒色処理			17- 9

図版番号	登録番号	種別	石材	出土遺構・層位	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考	写真番号
26図 2	Kc－3	敲	凝灰岩	小溝39 1層	11.4	3.6	2.67	177.3		22-1
26図 3	Kc－4	磨	デイサイト	小溝39 1層	14.0	13.2	2.6	739.1	線条痕あり	22-2

第26図　小溝状遺構群出土遺物

第6表　ＳＤ１溝跡，小溝状遺構群土層注記表

遺構名	層位	土色	土性	備考
小溝 19	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/3 暗褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む．底面に土木具痕あり．凹凸著しい．
小溝 20	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR3/3 暗褐色粘土質シルトを小ブロック状にまばらに含む．底面はほぼ平坦．
小溝 21	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む．底面はほぼ平坦．
小溝 22	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/3 暗褐色粘土質シルトを小ブロック状にまばらに含む．底面に土木具痕あり．凹凸著しい．
小溝 23	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状にまばらに含む．底面に土木具痕あり．凹凸著しい．
小溝 24	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/3 暗褐色粘土質シルトをまばらに含む．下端付近に土木具痕の凹凸あり．
小溝 25	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に含み下部に顕著である．
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/3 暗褐色粘土質シルトを小ブロック状にまばらに含む．底面に土木痕の著しい凹凸あり．
小溝 26	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/3 暗褐色粘土質シルトを小ブロック状にまばらに含む．底面に土木痕の凹凸あり．
小溝 27	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状にまばらに含む．底面に土木具痕あり．西半で凹凸著しい．
	2	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土をブロック状に含む．
小溝 28	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/3 暗褐色シルト質粘土を小ブロック状にまばらに含む．底面に土木具痕あり．
小溝 29	1	10YR3/2 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を粒状にまばらに含む．炭化物片をわずかに含む．
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む．底面は大きく凹凸する．土木具痕あり．
小溝 39	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルトを粒状に含む．底面にわずかに土木具痕．
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を粒状に含む．土木具痕あり．
小溝 41	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む．底面はほぼ平坦．
小溝 42	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む．底面中央に明瞭で規則的な土木具痕あり．
小溝 43	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に全体的に含む．底面にわずかに土木具痕あり．
小溝 30	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に粒状に含む．土木具痕の凹凸あり．
小溝 31	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む．底面にわずかに土木具痕の凹凸あり．
小溝 32	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土をブロック状に含む．底面にわずかに土木具痕の凹凸あり．
小溝 16	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	直径1㎝内のにぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む．
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	直径5㎜内の10YR4/3 にぶい黄褐色シルトをブロック状に含む．
小溝 1	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR4/1 褐灰色シルト質粘土をブロック状に含む．両下端側に交互に土木具痕あり．
小溝 2	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR4/1 褐灰色シルト質粘土を小ブロック状にまばらに含む．
小溝 3	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR4/1 褐灰色シルト質粘土を小ブロック状に含む．底面に部分的な凹凸あり．
小溝 9	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む．底面にわずかに凹凸あり．
小溝 10	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む．底面に土木具痕あり．凹凸著しい．
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2 黒褐色シルト質粘土を粒状に含む．底面に土木具痕あり．凹凸著しい．
小溝 11	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に多く含む．西半では底面に土木具痕の凹凸あり．
小溝 12	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む．底面はほぼ平坦．
小溝 13	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む．底面に土木具痕の凹凸あり．
小溝 7	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルトをブロック状および粒状に含む．
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	10YR4/1 褐灰色シルト質粘土を小ブロック状に部分的に含む．底面はほぼ平坦．
小溝 8	1	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む．
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR3/1 黒褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む．底面に土木具痕あり．凹凸著しい．
小溝 9	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR3/1 黒褐色シルトをブロック状に含む．底面にわずかな凹凸あり．
小溝 4	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/1 褐灰色シルト質粘土をブロック状に含む．底面の全体に凹凸あり．
小溝 5	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	10YR4/1 褐灰色シルト質粘土をブロック状に含む．底面はほぼ平坦．

第７表　東西方向の小溝状遺構群計測表

遺構名	長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）	方　向	遺構名	長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）	方　向
小溝７	(2.72)	16～34	5.5	E－8.5°－S	小溝28	6.63	18～32	4～15.5	E－8.5°－S
小溝８	5.27	24～35	4～7	E－7°－S	小溝29	8.39	21～36	11～19.5	E－10°－S
小溝９	1.93	18～25	3.5	E－9.5°－N	小溝30	2.92以上	16～41	3	E－8°－S
小溝10	(6.10)	28～37	6～10	E－6.5°－S	小溝31	1.63以上	20～24	1～7	E－2°－S
小溝11	5.86以上	25～46	5～14.5	E－11.5°－S	小溝32	1.04以上	11～28	3.5～10.5	E－6.5°－S
小溝12	2.30	23～35	3.5～6	E－4.5°－N	小溝33	0.99	15～19	2.5	E－2.5°－S
小溝13	4.34	18～36	2.5～5	E－5.5°－S	小溝34	3.02	20～35	3～6	E－13°－S
小溝14	2.66	20～33	1～4.5	E－8°－S	小溝35	(8.06)	17～44	7～20.5	E－7°－S
小溝15	6.17以上	34～46	4.5～19.5	E－8.5°－S	小溝36	3.54	29～45	10～18	E－5°－S
小溝17	0.85	19～23	5.5	E－14.5°－S	小溝37	12.0以上	21～46	6.5～26	E－9°－S
小溝18	1.48	24～28	7～10	E－8°－S	小溝38	6.21	26～48	6～24.5	E－5.5°－S
小溝19	5.24	10～32	4～12.5	E－6.5°－S	小溝39	12.2以上	17～33	6～20.5	E－5°－S E－14.5°－S
小溝20	2.50	20～24	3.5～4.5	E－5.5°－S	小溝40	1.98	26～34	6～17	E－11.5°－S
小溝21	4.09	15～32	3.5～5	E－6°－S	小溝41	3.45以上	20～29	3～3.5	E－4.5°－S
小溝22	1.51	23～38	3	E－9°－S	小溝42	2.43以上	27～32	6～12	E－16.5°－S
小溝23	3.12	25～32	3～5.3	E－8.5°－S	小溝43	2.87以上	25～28	4～8	E－10°－S
小溝24	2.36	21～30	2.5～9	E－6.5°－S	小溝44	(2.25)	26～29	6～17	E－14°－S
小溝25	5.75	19～32	2.5～8.3	E－7.5°－S	小溝46	1.13	15～23	2～4	E－19°－S
小溝26	2.38	22～36	3.5～4	E－6°－S	小溝47	2.42以上	23～34	2.5～7	E－9°－S
小溝27	4.48	23～54	4～28.5	E－10.5°－S	小溝52	0.34以上	25～30	17	E－2.5°－S

第８表　南北方向の小溝状遺構群計測表

遺構名	長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）	方　向	遺構名	長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）	方　向
小溝１	4.61以上	24～35	6～9	N－6.5°－W	小溝16	4.17	12～33	6～10.5	N－5°－E
小溝２	5.30以上	19～26	4.5～11.5	N－5°－W N－6°－E	小溝45	0.98以上	17～21	3.5～4	N－5°－E
小溝３	1.26	17～25	6.5～10.5	N－0°－E	小溝48	1.21以上	20～27	9	N－3°－E
小溝４	3.01	16～34	3～6	N－1.5°－W	小溝49	1.20以上	17～25	9.5	N－6.5°－W
小溝５	18.2	22～28	3.5～6	N－4°－W	小溝50	0.58以上	28～32	10.5	N－7°－W
小溝６	5.49	14～34	3～4.5	N－10.5°－E	小溝51	0.33以上	27～34	17.5	N－3°－E

第７節　基本層出土遺物

今回の調査では、これまでの報告以外に、基本層から縄文土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、土製品、打製石器、礫石器、金属製品等が出土している。その主な遺物を第27図と第28図、および写真20、写真22に掲載した。以下、各層出土遺物の概要について記述する。

１．第Ⅰ層出土遺物（写真22－８～11）

盛土以前の旧耕作土である基本層第Ⅰ層からは、縄文土器片150点、土師器片38点、須恵器片18点、陶器・磁器片13点、金属製品６点、打製石器３点、礫石器２点などが出土している。写真22－８～11は第Ⅰ層出土の陶器・磁器片である。

写真22－８（Ｊ－１）は中国産の磁器であり、染付の碗口縁部の破片である。16世紀末から17世紀前半頃のものと考えられる。９（Ｊ－２）は肥前産の白磁碗の体部破片である。染付の無紋部分と考えられる。江戸時代のものであるが、時期は限定できない。10（Ｉ－１）は小野相馬の陶器であり、鉢と考えられる口縁部の破片である。淡青色の上釉に飴釉流しであり、18世紀頃のものと考えられる。11（Ｉ－２）は大堀相馬の陶器であり、瓶類の破片で、土瓶の可能性がある。白濁釉が施されており、19世紀頃のものである。

２．第Ⅱ層出土遺物（第27図１・６，第28図１～４，写真20－１・６，写真22－３～６）

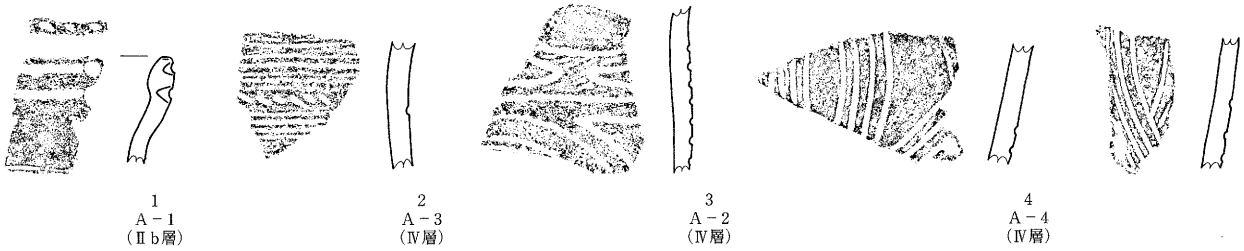
第Ⅱ層は２層に細分されるが、出土遺物に関しては一括して取り扱うこととする。層中からは、縄文土器片75点、土製品１点、石鏃１点、礫石器３点などが出土している。縄文土器片は地文のみのものが多く、いずれも細片であることから、特徴的な文様をもつ口縁部破片であるＡ－１のみを第27図に図示した。また、土製品、石鏃、礫石器についても第27図および第28図に図示している。

第27図１（Ａ－１）は縄文土器深鉢の口縁部破片であり、基本層位第Ⅱｂ層と第Ⅲ層から出土した破片が接合している。沈線内に深い刺突がみられ、口唇部には工具を斜めに当てて刻み目が施されている。口縁部上端は肥厚している。後期前葉南境式期のものと考えられる。なお、基本層位第Ⅲ層から出土した遺物はきわめて少なく、この縄文土器片１点のみである。

第27図６（Ｐ－１）は土器片を素材とした円盤である。土器の口縁部が用いられており、不整円形を呈している。磨滅が著しく加工方法等については不明である。沈線文と刺突文が観察され、口唇部には刻み目が施されている。

第28図１（Ka－２）は先端部と茎部を欠損する有茎の石鏃である。先端部の欠損は先端からの、ｂ面からａ面側への剝離であり、衝撃剝離と考えられる。茎部の折れはｂ面からａ面側への力によるものである。石材は玉髄が用いられている。

第28図２～４は礫に使用の痕跡が確認される礫石器である。２（Kc－６）は基本層位第Ⅱａ層から出土しており、平面形が不整楕円形を呈する礫の表裏両面の中央に凹痕が残されている。凹痕には表裏両面とも２箇所の深い部分がみられるが、ａ面よりもｂ面側が深く、範囲も広い。用いられている石材は凝灰岩である。３（Kc－８）は磨痕と凹痕の残された礫石器である。平面形が楕円形で、片面が平坦な礫を素材としている。磨痕は平坦な面であるｂ面の中央に認められるが、多孔質な石材であるため礫表面の高い部分にのみ観察される程度である。また、表裏両面の中央には浅い凹痕が残されており、ｂ面側よりもａ面側が深い。石材は安山岩である。４（Kc－７）は３に比べ小さな礫を素材としているが、３と同様に片面に磨痕が観察され、表裏両面に凹痕が残されている。凹痕はａ面側がやや深く、磨痕を伴うｂ面側は浅い。石材は安山岩が用いられている。

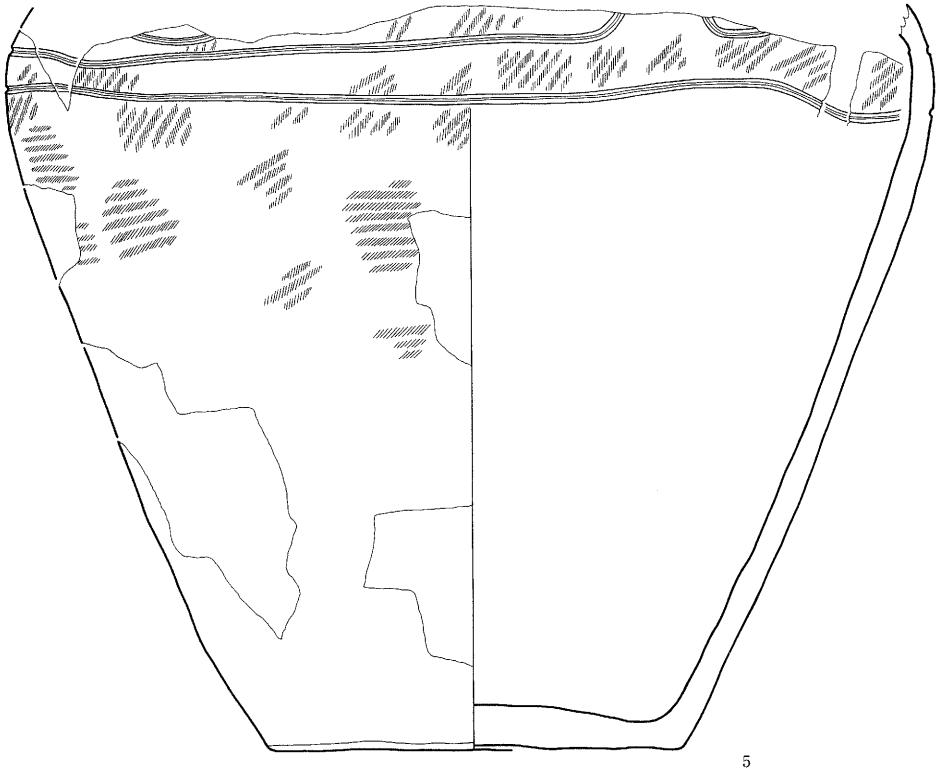


1
A－1
（Ⅱb層）

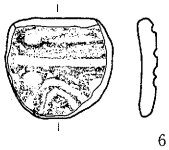
2
A－3
（Ⅳ層）

3
A－2
（Ⅳ層）

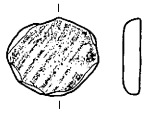
4
A－4
（Ⅳ層）



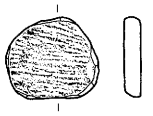
5
A－5
（Ⅳ層）



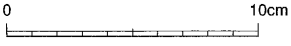
6
P－1
（Ⅱ層）



7
P－2
（Ⅳ層）



8
P－3
（Ⅴ層）



図版番号	登録番号	種別・器種	出土遺構・層位	法量（cm）			特徴			備考	写真番号
				口径	器高	底径	外面	内面	底部		
27図 1	A－1	縄文土器・深鉢	基Ⅱb層・基Ⅲ層				ミガキ・沈線文・刺突文・口唇部に刻み目文	ミガキ			20- 1
27図 2	A－3	縄文土器・深鉢	基Ⅳ層				多条沈線文・刻み目文	ナデ			20- 2
27図 3	A－2	縄文土器・深鉢	基Ⅳ層				沈線文・縄文	ナデ			20- 3
27図 4	A－4	縄文土器・深鉢	基Ⅳ層				縄文RL・沈線文	ミガキ			20- 4
27図 5	A－5	縄文土器・壺or深鉢	基Ⅳ層		(29.6)	16.5	ケズリ(タテ・ヨコ)・縄文L・沈線	ナデ（ヨコ）	網代痕,木葉痕		20- 5
27図 6	P－1	土器片製・円盤	基Ⅱ層				ミガキ・縄文・沈線文・刺突文	ミガキ			20- 6
27図 7	P－2	土器片製・円盤	基Ⅳ層				縄文LR				20- 7
27図 8	P－3	土器片製・円盤	基Ⅴ層				縄文RL	ナデ			20- 8

第27図　基本層出土遺物（１）

3．第Ⅳ層出土遺物（第27図２～５・７，第28図５，写真20－２～５・７，写真22－７）

第Ⅳ層からは縄文土器片が268点出土している。しかし、そのほとんどが地文のみの破片や磨滅した細片であり、図示したものは５点のみである。他には土製品が４点、礫石器と打製石器が各１点ずつ出土しており、土製品１点と礫石器を図示した。

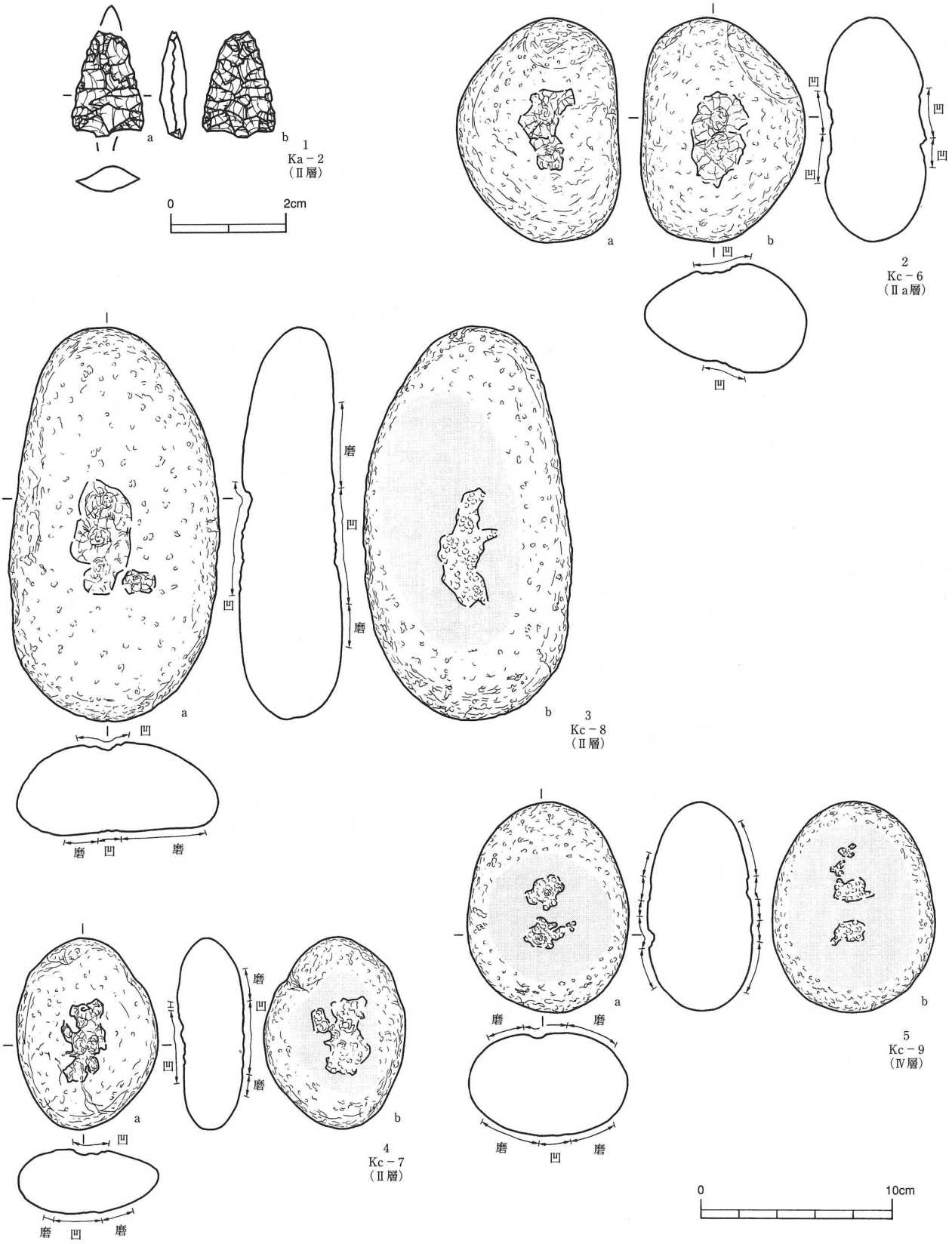
第27図２～５はいずれも後期前葉南境式期に属すると考えられる縄文土器片である。２（A－３）は深鉢体部上半の破片であり、横方向の多条沈線を施し、その間に米粒大の刻み目文を連続的に施文している。３（A－２）も深鉢体部上半の破片と考えられ、渦状の構図になるものと推定される。縄文の施文された区画が確認されるものの磨滅により縄文の種類等は不明である。４（A－４）の２点は、接合は確認されなかったが、同一個体と考えられる深鉢体部の破片である。多条沈線による連続弧線文が描かれていたものと推定される。縄文RLは磨消手法による施文であるが、磨き消されている箇所はない。内面のミガキは丁寧で、縦方向の中にわずかに横方向のミガキが施されている。５（A－５）は体部上半から口縁部を欠損しており、全体的に磨滅している。壺もしくは深鉢と考えられるが、体部最大径部内面の調整が粗いことから壺の可能性が高いものと考えられる。文様は横方向に展開する構図である。上位と中位、中位と下位の沈線間に地文が認められるが、上位の沈線の上部は残存部分が少なく、さらに磨滅により地文の観察ができないことから、磨消部分については不明である。体部下半には地文は施されておらず縦方向のケズリが確認され、底部付近では横方向である。底部には網代痕と木葉痕が残されている。内面は粗いナデで、滑らかさはない。

第27図７（P－２）は、土器片を打ち欠いて作られた円盤であり、平面形は不整円形を呈している。内面の調整は磨滅により不明である。

第28図５（Kc－９）は、表裏両面に浅い凹痕と磨痕がともに残されている礫石器である。凹痕はａ面で２箇所、ｂ面では４箇所に分かれて確認されるが、いずれもごく浅い凹痕である。石材は安山岩が用いられている。

4．第Ⅴ層出土遺物（第27図８、写真20－８）

第Ⅴ層からは縄文土器片39点と土製品が２点出土している。土製品１点を第27図８に図示した（P－３）。土器片を打ち欠いて作られた円盤であり、平面形は不整円形を呈している。



図版番号	登録番号	種別	石　材	出土遺構・層位	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	備　　考	写真番号
28図 1	Ka－2	石　鏃	玉　髄	基Ⅱ層	(1.9)	1.3	0.4	1		22- 3
28図 2	Kc－6	凹	凝灰岩	基Ⅱa層	11.8	8.6	5.7	553.0	表裏両面	22- 4
28図 3	Kc－8	磨＋凹	安山岩	基Ⅱ層上面	20.7	11.3	5.3	1506.0	凹表裏両面，磨片面	22- 5
28図 4	Kc－7	磨＋凹	安山岩	基Ⅱ層	10.1	7.5	3.5	381.0		22- 6
28図 5	Kc－9	磨＋凹	安山岩	基Ⅳ層	11.1	8.6	5.4	773.3		22- 7

第28図　基本層出土遺物（２）

第6章　ま　と　め

今回の大野田遺跡第２次調査によって得られた成果をまとめると以下のようになる。

１．検出された遺構は、掘立柱建物跡６棟、竪穴住居跡３軒、竪穴遺構１基、土坑10基、溝跡３条、性格不明遺構３基、小溝状遺構群２群、ピットである。しかし、調査区全体が古い河川跡内に位置していたことから、縄文時代の遺構は検出されず、流れ込みと判断される縄文土器や石器が確認されたのみである。

２．ＳＢ１掘立柱建物跡は、付属溝３から、ロクロを使用し内面黒色処理の施された土師器坏と、底部切り離し後の再調整が行われていない須恵器坏が出土しており、９世紀代の時期の遺構と考えられる。他の５棟の掘立柱建物跡は出土遺物が少なく、しかも細片がほとんどであるため時期は不明である。ただし、５棟の柱穴からは中世以降の遺物はまったく出土しておらず、建物の方向や規模が類似していることから、古代の近接した時期の遺構である可能性が考えられる。

ＳＢ1掘立柱建物跡の北列、東列、南列の柱穴の外側には１～1.5m離れた位置にピットがあり、ピット間に小規模な溝が設けられている。このピットと溝は、建物跡を取り囲んだ状態になっており、その位置関係からＳＢ１掘立柱建物跡と一体のものと考えられる。西側柱列が調査区西壁際で検出されたため、調査区外の西側の状況は不明であるが、庇もしくは縁が廻らされていたものと推定される。調査では付属溝出土遺物から９世紀代の時期の遺構と判断されたものの、性格を類推させる資料は得られなかった。しかし前述の構造から、一般的な建物ではなく、特別な施設である可能性も考えられる。たとえば、最近、集落内の仏教関連施設として注目されている遺構の中には、周囲に溝を廻らせた掘立柱建物跡も見うけられる。このような仏教関連の遺構は８世紀末頃に出現し、９世紀代に盛行して、９世紀後半から10世紀前半に急速に衰退するとされている。ＳＢ１掘立柱建物跡がこのような施設と関連するものか否か、今後の類例の確認や伴出遺物等に注意を払っていく必要がある。

３．３軒の竪穴住居跡のうち時期が判明したのはＳＩ１竪穴住居跡である。住居床面と、カマド袖の南側に隣接する位置で確認された１号土坑から出土した土器は、多賀城市山王遺跡ＳＤ180溝跡の２層ないし３層出土土器に類似しており、ＳＤ180溝跡の２層に対応する層からは763年の漆紙文書(具注暦)が、３層に対応する層からは740～749年の漆紙文書(戸口損益帳草案)が出土している。したがってＳＩ１竪穴住居跡は８世紀中葉頃の時期と考えられる。

部分的な検出となったＳＩ２竪穴住居跡の床面からは、体部下半から底部にかけて残存するロクロ不使用の土師器甕が出土しているのみであるが、ＳＩ１竪穴住居跡と同一方向で造られていることにより同時期の住居跡と推定される。

ＳＩ３竪穴住居跡は、調査区内では主柱穴１基と住居の一角が確認されたのみであり、時期決定資料は出土していない。また、ＳＩ１、ＳＩ２竪穴住居跡と堆積土の状況、方向が異なっており、古墳時代から古代にかけての時期のいずれかとせざるをえない。

ＳＩ４竪穴遺構はＳＩ1竪穴住居跡に切られるものの、西辺が重複していることから８世紀中葉以前の遺構で、ＳＩ１竪穴住居跡に近い時期と考えられる。

４．土坑は出土遺物が少なく時期不明のものが多い。ＳＫ３～５はきわめて近接した位置関係にあり、切り合いも確認されている。また、堆積土の状態が人為堆積を示している共通性もみられる。これまでの周辺の調査で検出されている近世以降の土坑に類似した堆積土と堆積状況であり、近世もしくはそれ以降の時期と推定される。

ＳＫ６と７は堆積土の状況と出土遺物から、古代に属する可能性がある。

５．溝跡は３条検出されているものの、規模が大きく異なっている。ＳＤ１溝跡は調査区を東西方向に横断し、調査区外のさらに東西へ続くと考えられる溝跡である。時期決定資料は得られなかったが、ＳＩ１、ＳＩ２竪穴住居跡の南辺の方向と同一方向に延びていることから関連が推定され、溝の南側と竪穴住居のある北側を区画する施設である可能性が考えられる。

ＳＤ２溝跡はＳＩ１竪穴住居跡を切る溝跡であり、堆積土の上層より土師器と須恵器の坏が出土している。土師器坏はロクロを使用した内面黒色処理が施されたものであり、須恵器坏は底部切り離し後の再調整が行われていないものであることから、９世紀代の遺構と考えられる。

６．東西方向と南北方向の２群の小溝状遺構群からは時期を決定する良好な資料は得られなかったが、竪穴住居跡を切り、掘立柱建物跡に切られていることから、８世紀中葉から９世紀にかけての古代の遺構である。小溝状遺構群はこれまでの大野田地区周辺の調査でも多く確認されており、畑の耕作に関わる何らかの痕跡と理解されている。したがって、今回の調査区を含む周辺一帯が古代の一時期、耕作域となっていたことを示している。

以上の調査成果から、縄文時代の遺構、遺物は発見されなかったものの、今回の調査区周辺における奈良時代から平安時代にかけての土地利用の変遷が確認された。すなわち、８世紀中葉頃には東西方向の溝によって区画された区域に竪穴住居が造られる居住域であったが、その後、畑の耕作域として利用されるようになる。しかし９世紀代になると掘立柱建物が造られ、再び居住域に戻っている。わずかな期間に居住域から耕作域へ、そしてまた居住域へと変遷しているわけであるが、８世紀中葉頃の居住域の遺構は方向を意識した構成となっており、計画性に基づく集落であった可能性が考えられる。それが廃絶し一時的に耕作域になった期間があったということは、９世紀代の集落が以前の集落と連続するものではないことを示している。この土地利用の変遷には、奈良時代後半から平安時代にかけての何らかの社会的背景が反映されているものと考えられる。

参考・引用文献

小川淳一・高橋綾子　2000　『王ノ壇遺跡－都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡－発掘調査報告書Ⅰ』
仙台市文化財調査報告書第249集

川名秀一　1987　『元袋遺跡－第２次発掘調査報告書－』　仙台市文化財調査報告書第188集

木村浩二　1995　「古代　解説」『仙台市史　特別編２　考古資料』p.p.356～361

工藤哲司　1999　『富沢遺跡　第104次発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第235集

笹生　衛　1998　「古代集落と仏教信仰－千葉県内の事例を中心に－」『第３回特別展　仏の住まう空間－古代霞ケ浦の仏教信仰－図録』p.p.51～58　上高津貝塚ふるさと歴史の広場

佐藤　淳　2001　「(5)大野田遺跡（第２次調査）」『文化財年報22』p.15　仙台市文化財調査報告書第254集

白鳥良一　1995　「縄文時代　解説」『仙台市史　特別編２　考古資料』p.p.32～36

主濱光朗　1995ａ　「縄文時代234　大野田遺跡」『仙台市史　特別編２　考古資料』p.p.134～137

主濱光朗　1995ｂ　「縄文時代235　王ノ壇遺跡」『仙台市史　特別編２　考古資料』p.p.138～139

主濱・小川ほか　1994　「(3)大野田遺跡」『年報15』p.12　仙台市文化財調査報告書第189集

仙台市教育委員会　1994　『大野田遺跡　現地説明会資料』

仙台市教育委員会　1996　「縄文人のハート　大野田遺跡」　仙台市文化財パンフレット第38集

多賀城市埋蔵文化財調査センター　1991　『山王遺跡－第10次発掘調査概報－』多賀城市文化財調査報告書第27集

多賀城市埋蔵文化財調査センター　1992　『山王遺跡－第12次調査概報－』多賀城市文化財調査報告書第30集

豊島正幸　1987　「第１節　富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷」『富沢　富沢遺跡第15次発掘調査報告書』p.p.４～８
仙台市文化財調査報告書第98集

豊島正幸　1992　「第１節　地形・地質－26層堆積時の地形復元－」『富沢遺跡－第30次調査報告書第Ⅱ分冊－旧石器時代編』p.p.217～219　仙台市文化財調査報告書第160集

沼山源喜治　1999　「北上盆地の古代集落における仏神信仰（Ⅰ）」『北上市埋蔵文化財センター紀要第１号』p.p.23～38

吉岡恭平　1995ａ　「縄文時代228　富沢遺跡」『仙台市史　特別編２　考古資料』p.p.104～105

吉岡恭平　1995ｂ　「縄文時代229　下ノ内遺跡」『仙台市史　特別編２　考古資料』p.p.106～111

吉岡恭平　1995ｃ　「縄文時代230　六反田遺跡」『仙台市史　特別編２　考古資料』p.p.112～117

吉岡恭平　1995ｄ　「縄文時代231　下ノ内浦遺跡」『仙台市史　特別編２　考古資料』p.p.118～123

吉岡恭平　1995ｅ　「縄文時代232　山口遺跡」『仙台市史　特別編２　考古資料』p.p.124～127

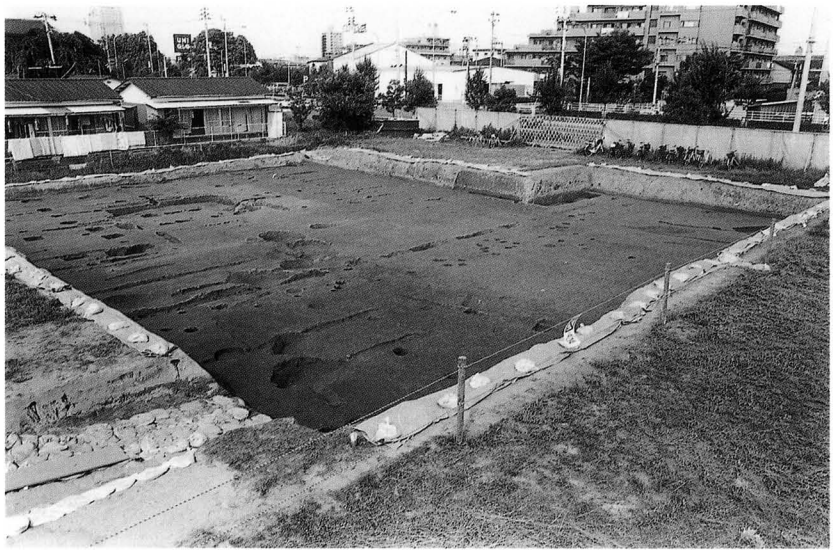
吉岡恭平　1995ｆ　「縄文時代233　伊古田遺跡」『仙台市史　特別編２　考古資料』p.p.128～133

渡部弘美　1987　『元袋Ⅲ遺跡－奈良・平安時代集落跡調査報告－』　仙台市文化財調査報告書第103集

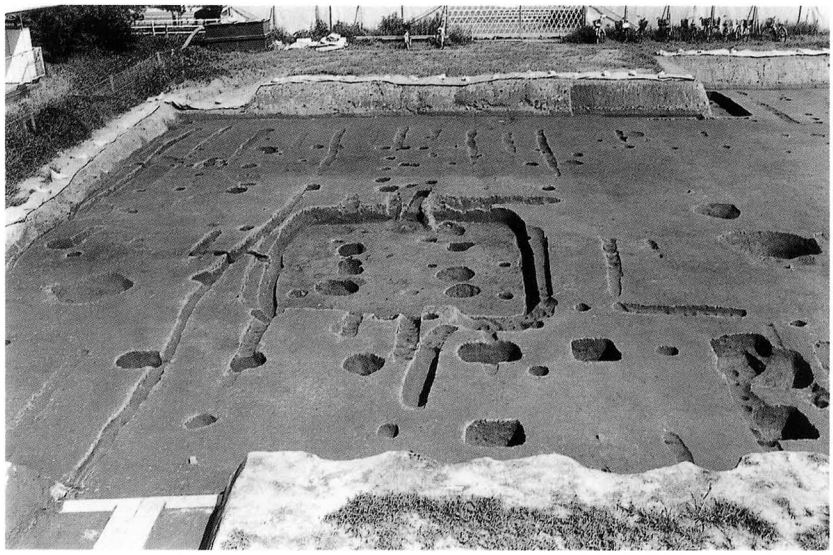
渡邊　誠・竹田幸司　2000　『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡－仙台市富沢駅周辺区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』　仙台市文化財調査報告書第243集

写　真　図　版

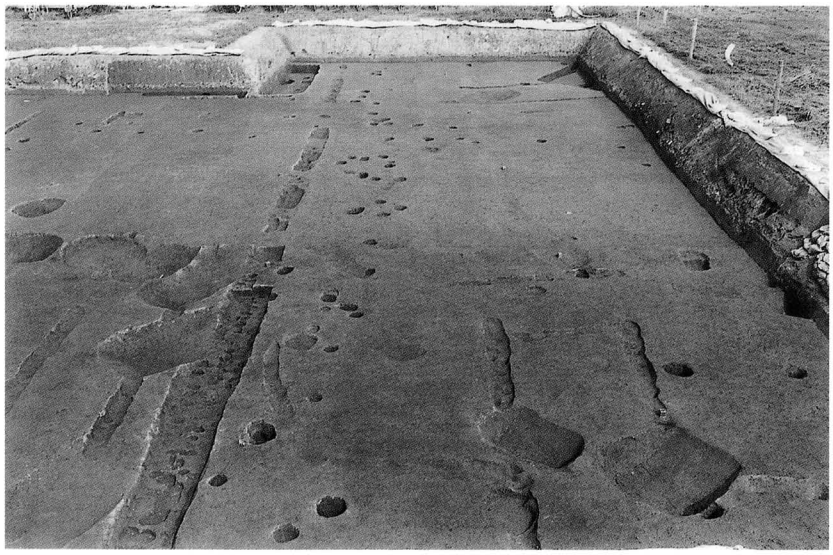
写真１　遺跡周辺の航空写真（約12,500分の１　平成11年 国土地理院）



1 調査区全景（南西から）



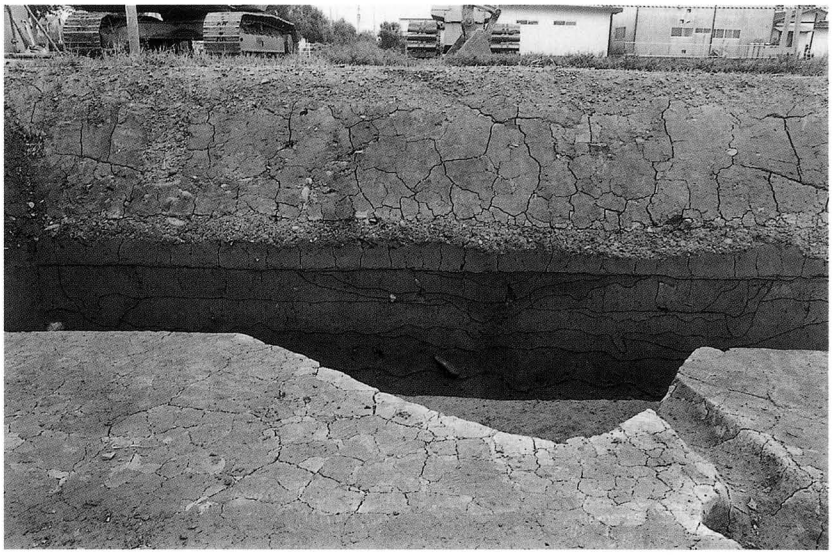
2 調査区北半（西から）



3 調査区南半（西から）

写真2　全　景

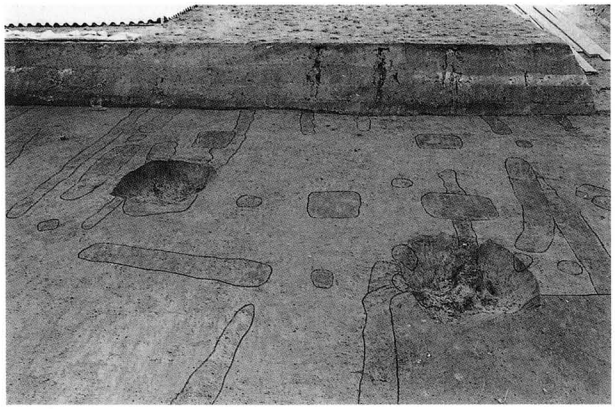
1 トレンチ全景（東から）



2 東端ＳＩ３竪穴住居跡断面（北から）

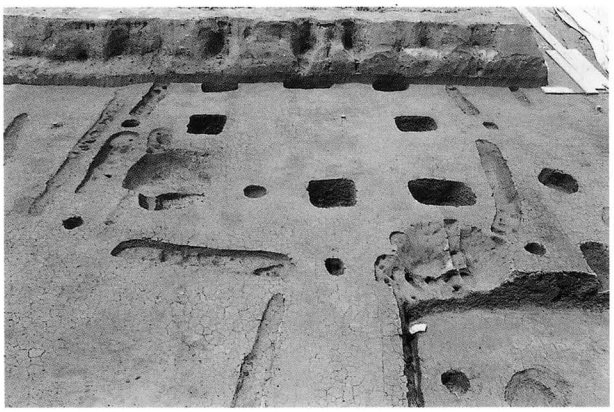
3 基本層序（北から）

写真３　調査区南辺トレンチ



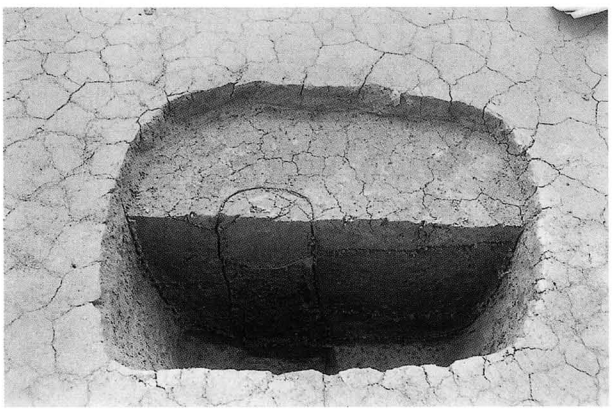
1　検出状況（東から）

2　柱痕跡確認状況（東から）

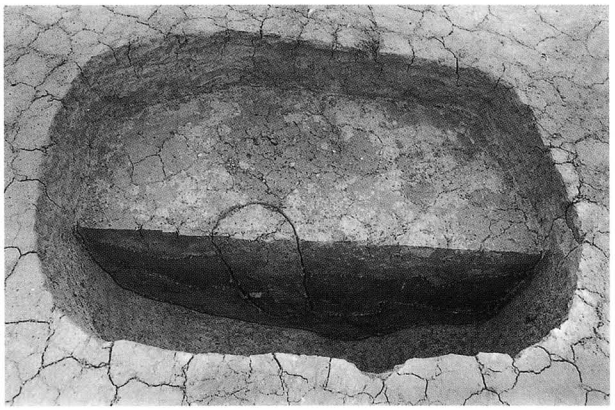


3　全　景（東から）

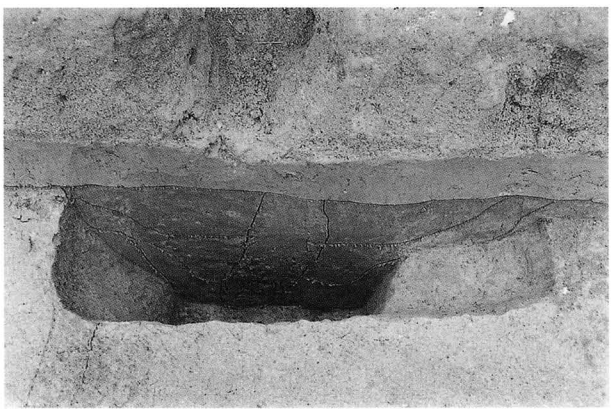
4　P１断面（東から）



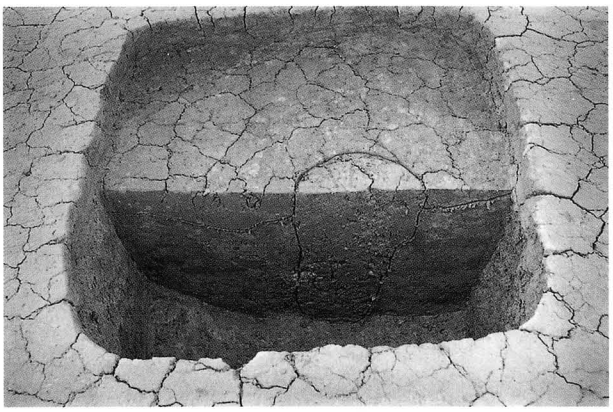
5　P２断面（東から）



6　P３断面（東から）



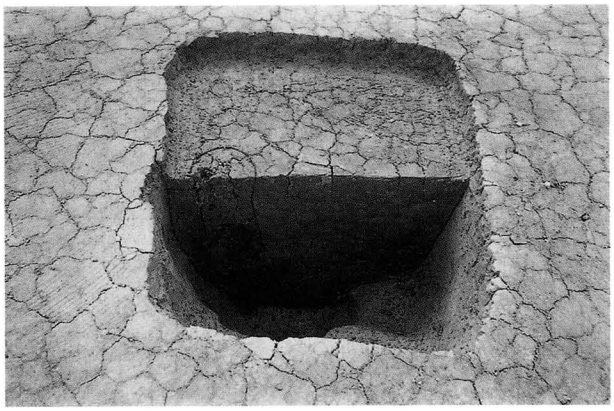
7　P４断面（東から）



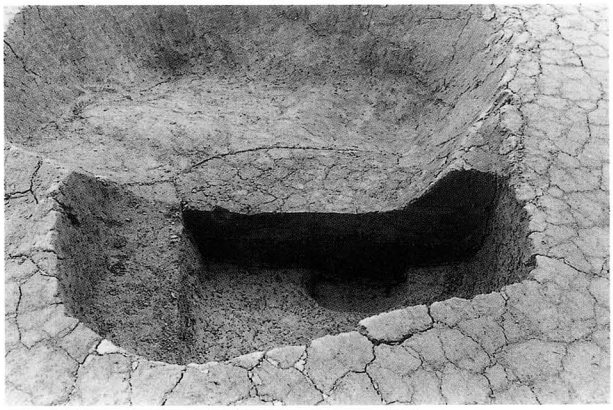
8　P５断面（東から）

写真４　SB１掘立柱建物跡（１）

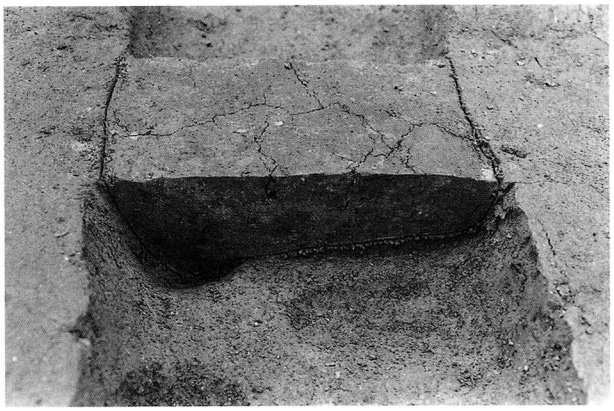
1　P６断面（東から）



2　P７断面（東から）

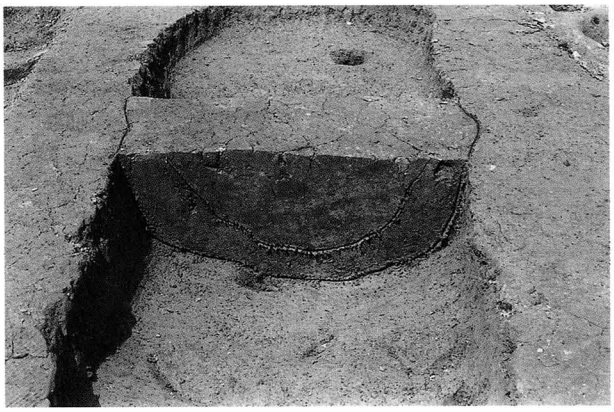


3　P８断面（東から）

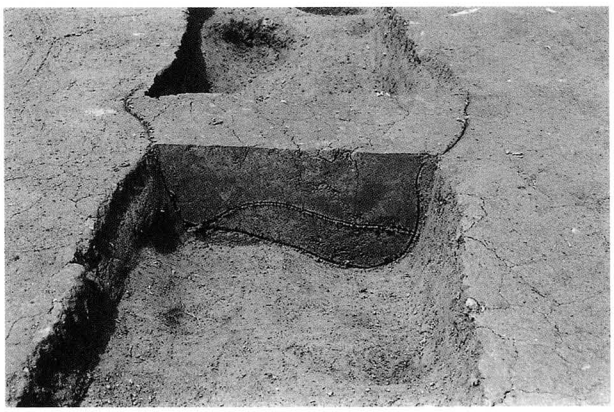


4　付属溝１断面（東から）

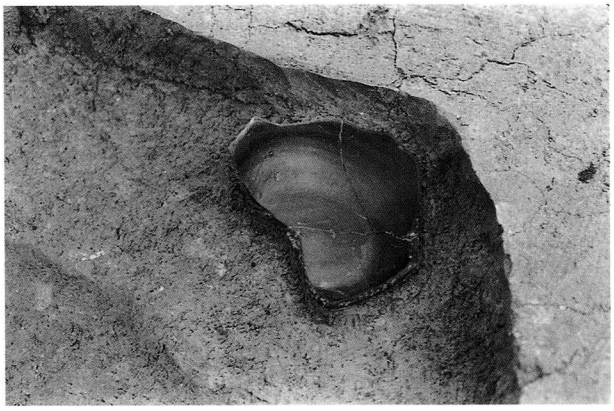
5　付属溝４断面（南から）



6　付属溝５断面（東から）

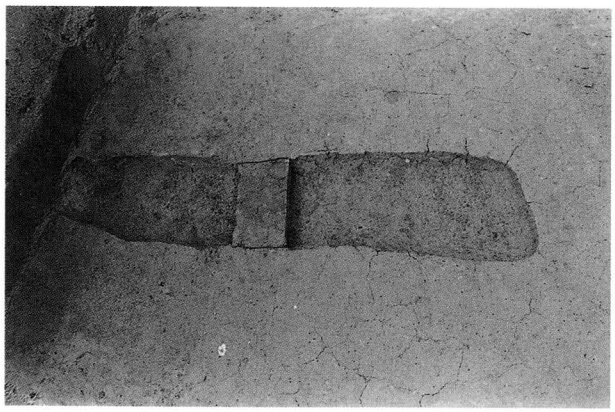


7　付属溝６断面（東から）

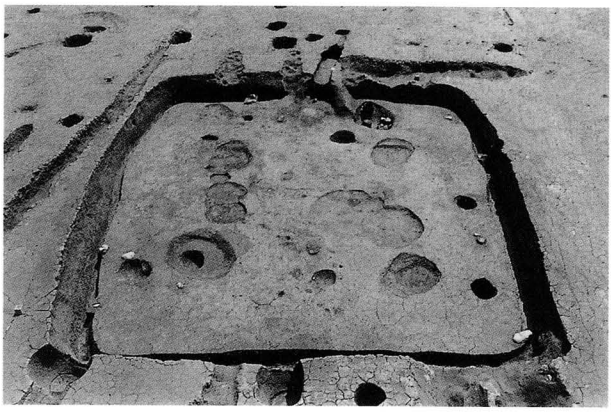


8　付属溝３遺物Ｄ－２出土状況（北から）

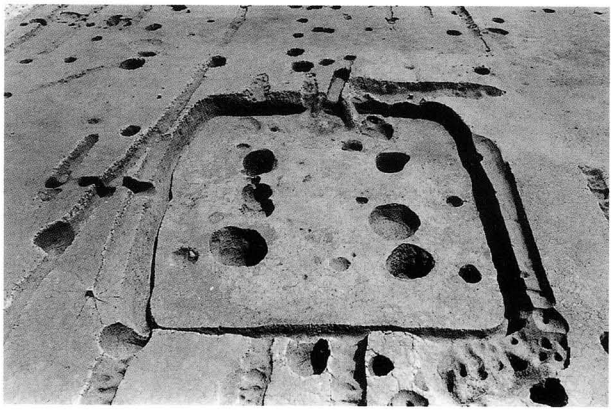
写真５　ＳＢ１掘立柱建物跡（２）



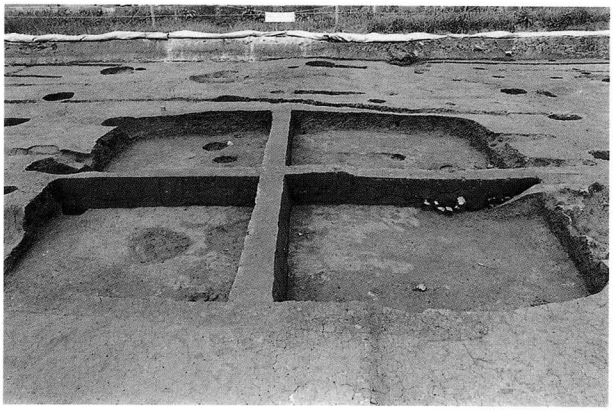
1　SB1 掘立柱建物跡付属溝 3 底面の土木具痕（南から）



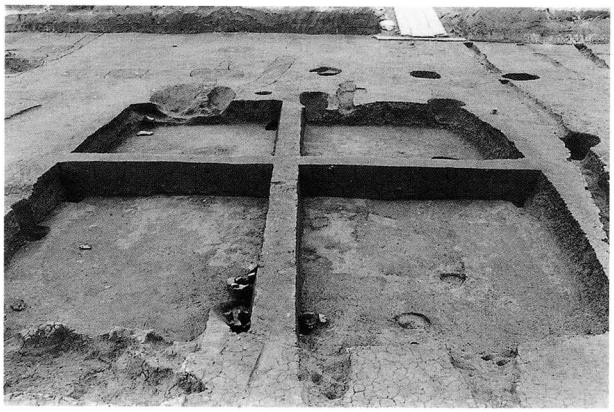
2　SI1 竪穴住居跡床面検出状況（西から）



3　SI1 竪穴住居跡・SI4 竪穴遺構全景（西から）

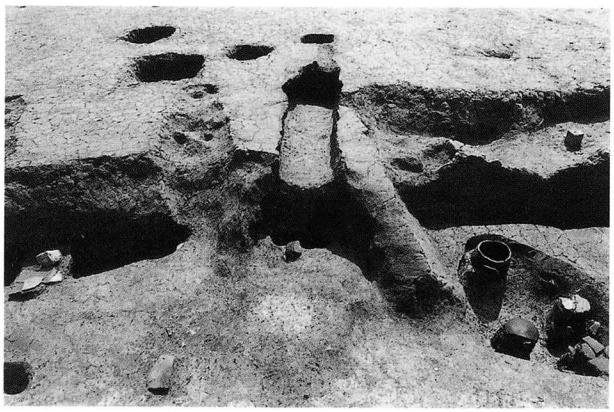


4　SI1 竪穴住居跡東西ベルト断面（南から）



5　SI1 竪穴住居跡南北ベルト断面（東から）

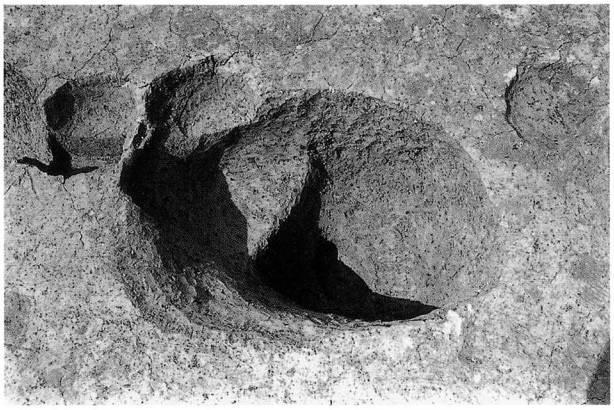
6　SI1 竪穴住居跡カマド付近遺物出土状況（北西から）



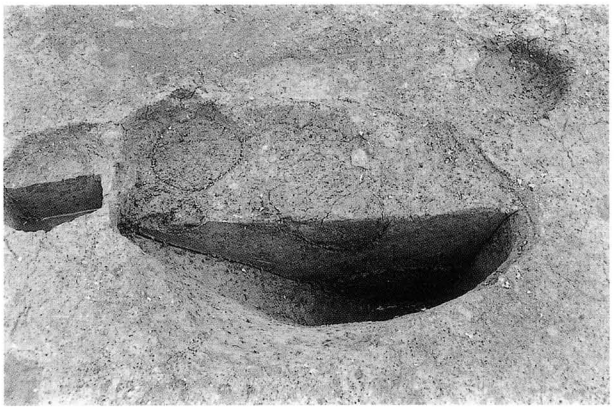
7　SI1 竪穴住居跡カマド（西から）

8　SI1 竪穴住居跡 1 号土坑遺物出土状況（南から）

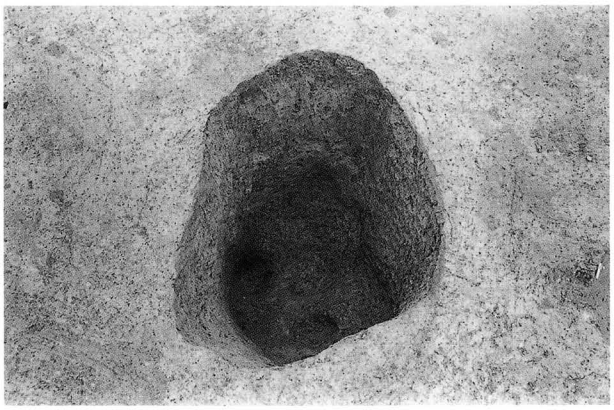
写真 6　SB1 掘立柱建物跡（3），SI1 竪穴住居跡（1）・SI4 竪穴遺構



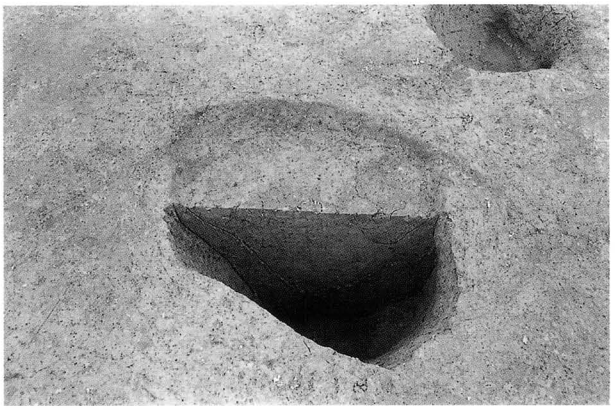
1　P１柱穴・P10全景（南から）



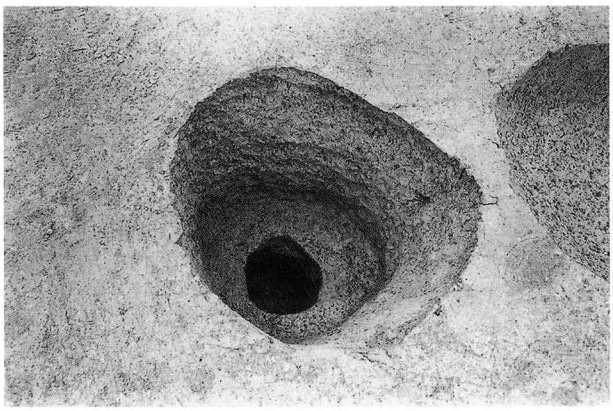
2　P１柱穴断面（南から）



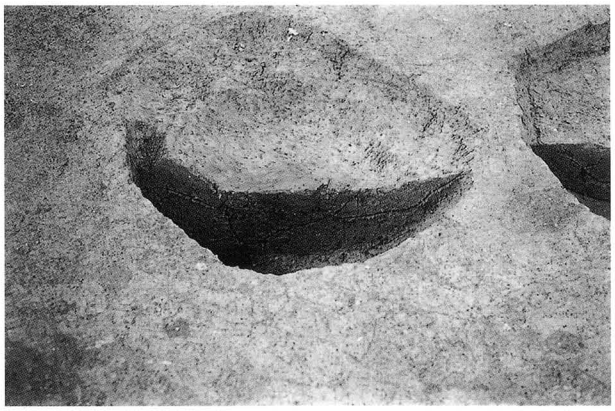
3　P２柱穴全景（南東から）



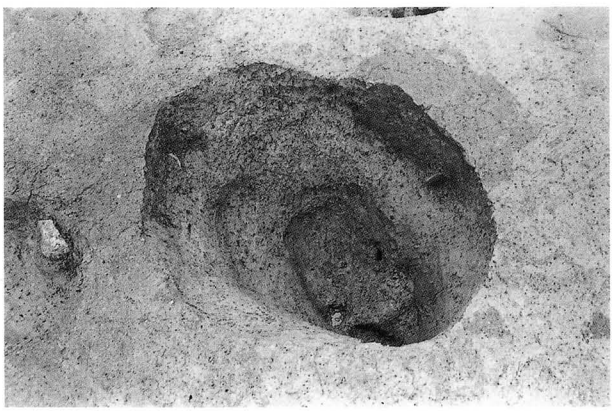
4　P２柱穴断面（南から）



5　P３柱穴全景（南東から）



6　P３柱穴断面（南から）

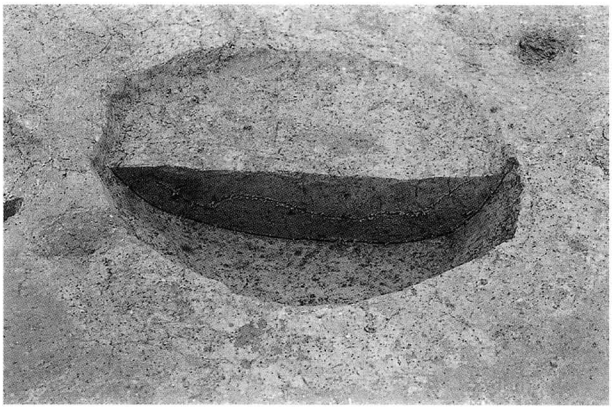


7　P４柱穴全景（西から）

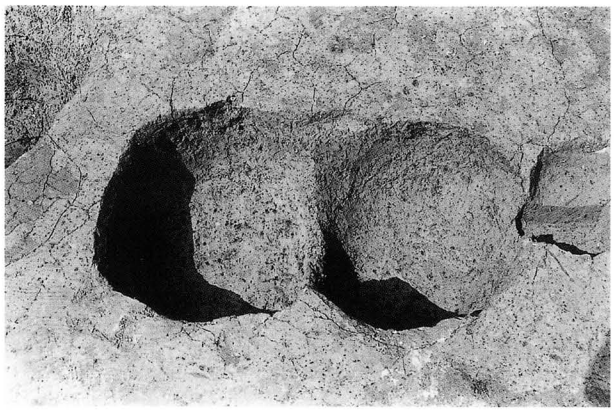
8　P４柱穴断面（南から）

写真７　ＳＩ１竪穴住居跡（２）

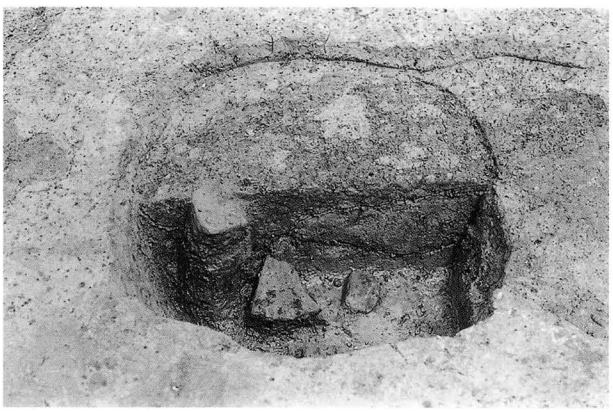
1　P６全景（南から）



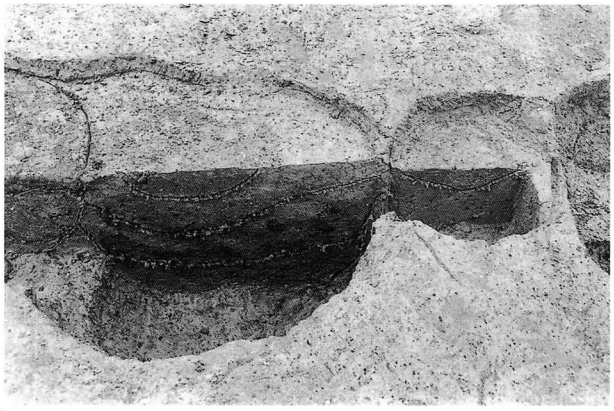
2　P６断面（南から）



3　P７・８全景（南から）



4　P７断面（南から）



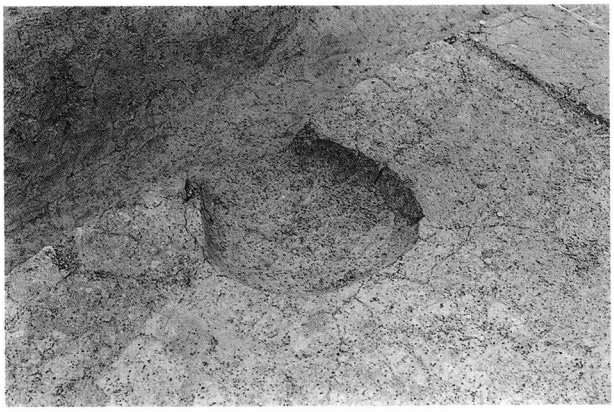
5　P８・９断面（南から）

6　P12全景（西から）

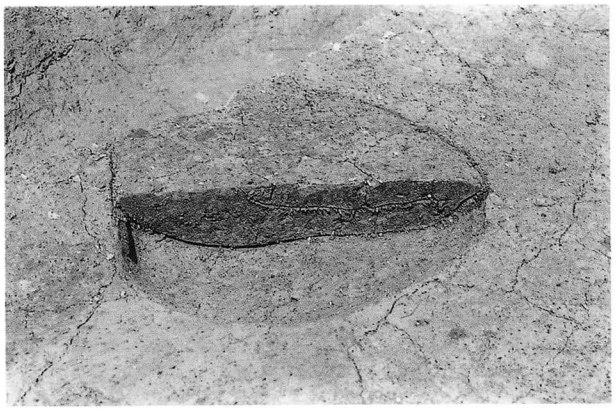
7　P12断面（西から）

8　調査風景（西から）

写真８　ＳＩ１竪穴住居跡（３）

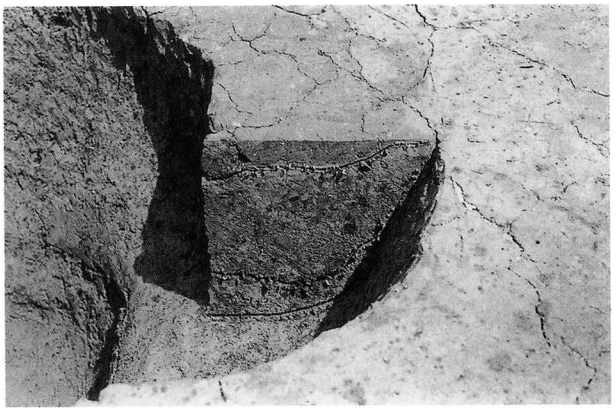


1　P 13全景（南から）

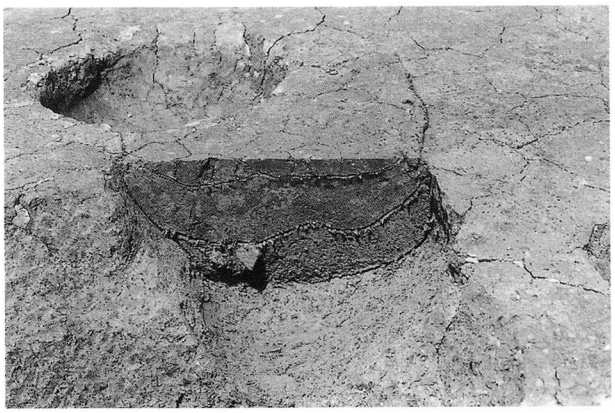


2　P 13断面（南から）

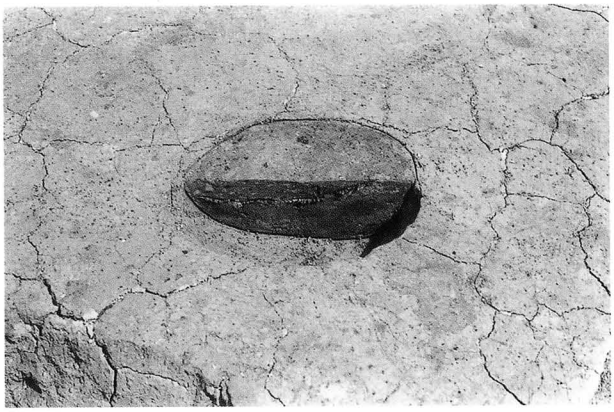
3　P 14・15・16全景（南西から）



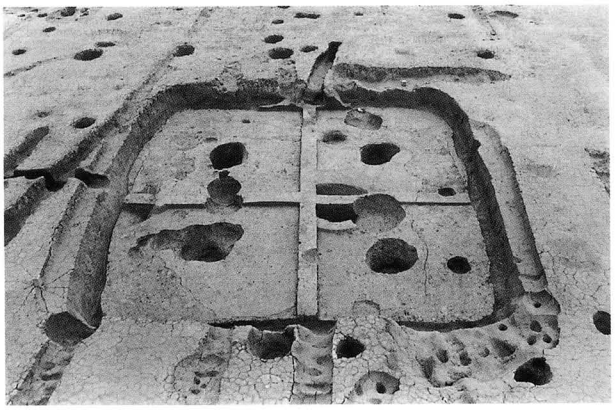
4　P 14断面（西から）



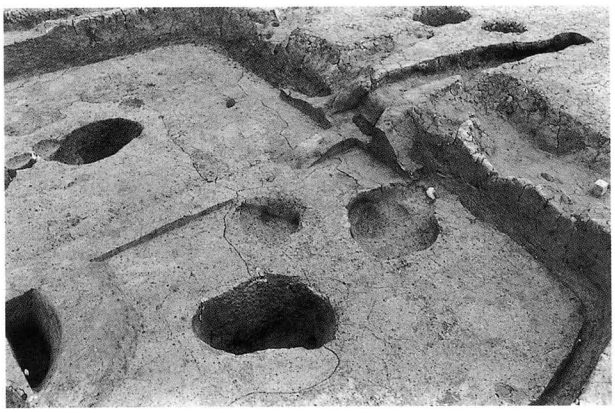
5　P 15断面（南から）



6　P 16断面（南から）



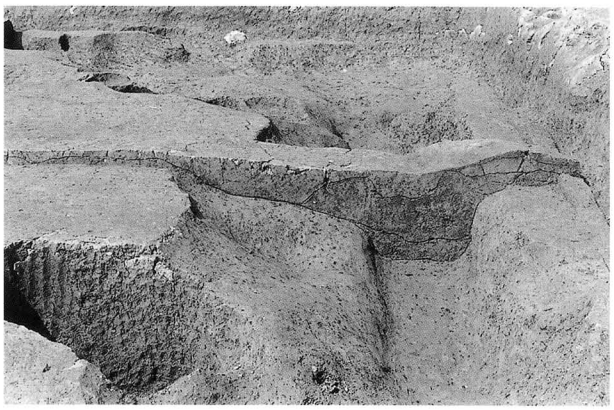
7　掘り方検出状況（西から）



8　カマド付近掘り方検出状況（南から）

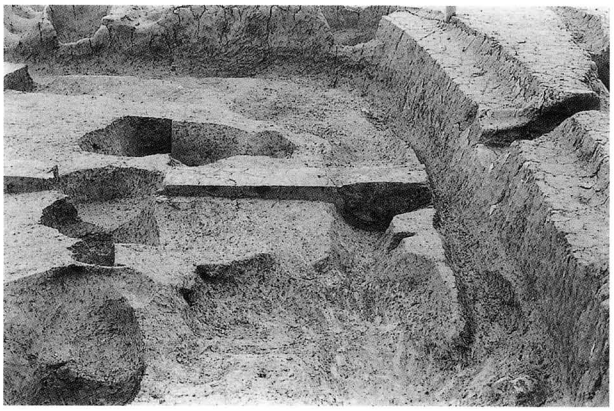
写真９　ＳＩ１竪穴住居跡（４）

1 掘り方完掘状況（西から）



2 掘り方東側断面（南から）

3 掘り方南側断面（東から）

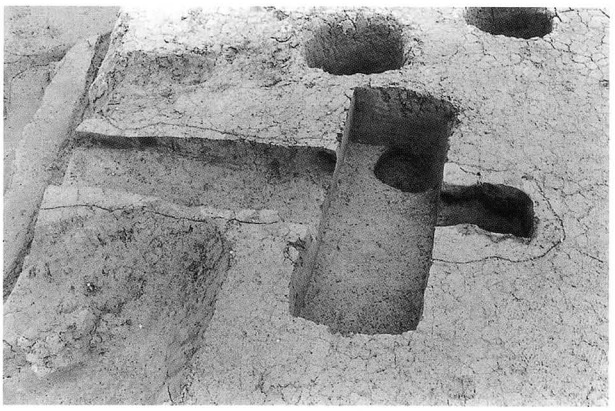


4 掘り方北側断面（東から）

5 カマド袖部断面（西から）

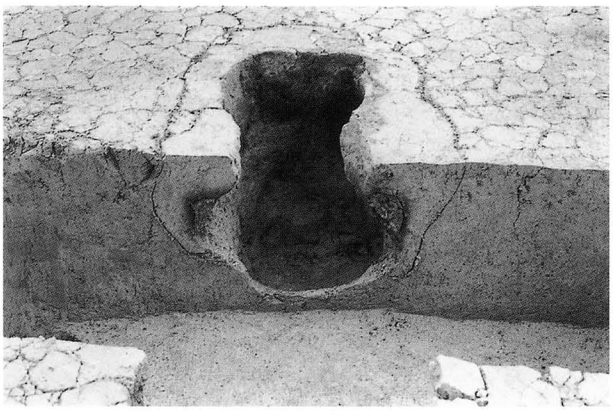
6 東側煙道部断面（南から）

7 カマド底面部掘り方断面（北から）



8 東側煙道部掘り方検出状況（南から）

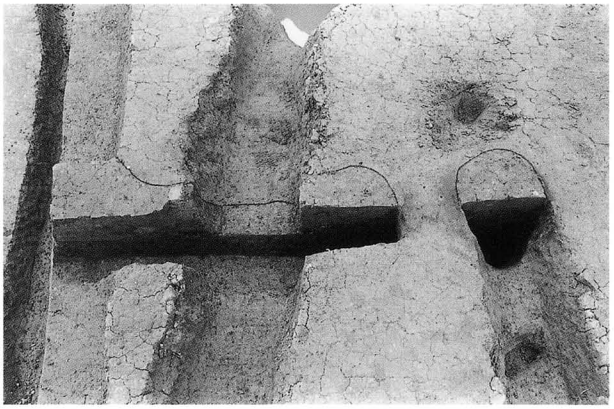
写真10　ＳＩ１竪穴住居跡（５）



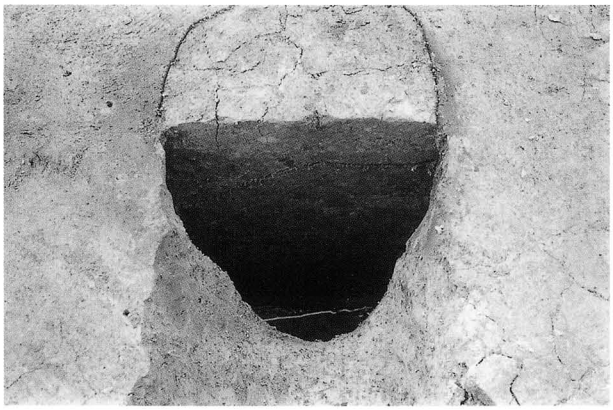
1 東側煙道部掘り方断面（西から）

2 東側煙道部掘り方完掘状況（南から）

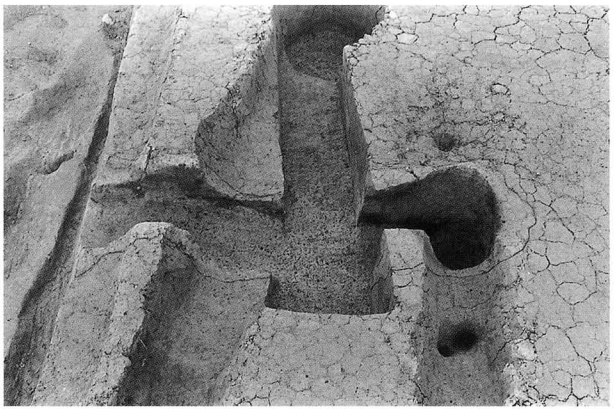
3 北側煙道部全景（南東から）



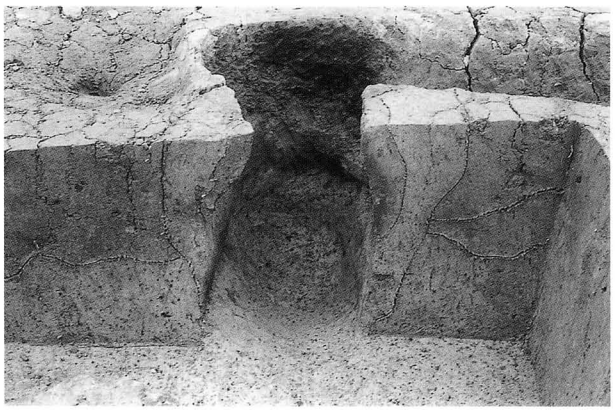
4 北側煙道部断面（東から）



5 北側煙道部煙出部断面（東から）



6 北側煙道部掘り方検出状況（東から）

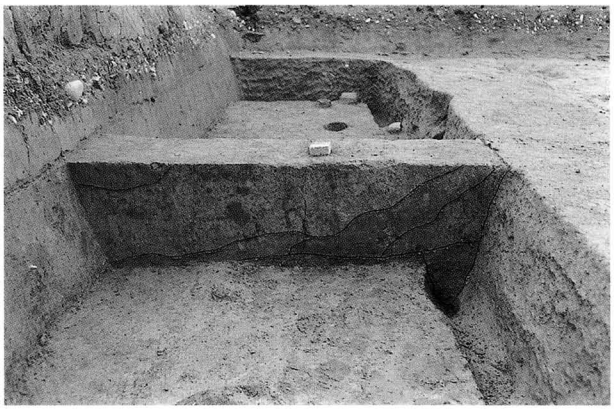


7 北側煙道部掘り方断面（南から）

8 北側煙道部掘り方完掘状況（東から）

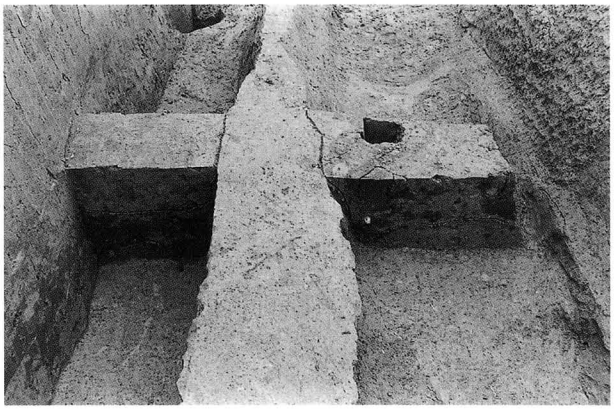
写真11　ＳＩ１竪穴住居跡（６）

1　ＳＩ２竪穴住居跡全景（南西から）



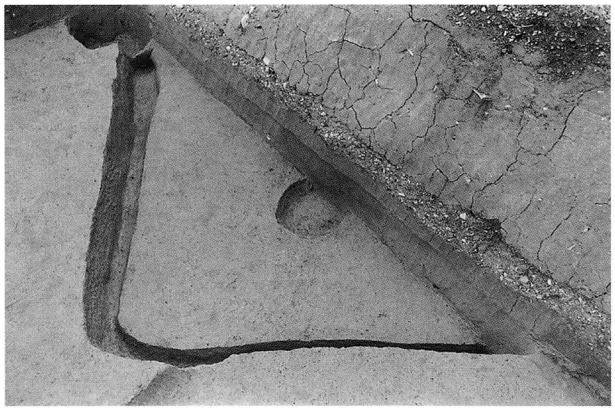
2　ＳＩ２竪穴住居跡ベルト断面（西から）

3　ＳＩ２竪穴住居跡掘り方完掘状況（南西から）

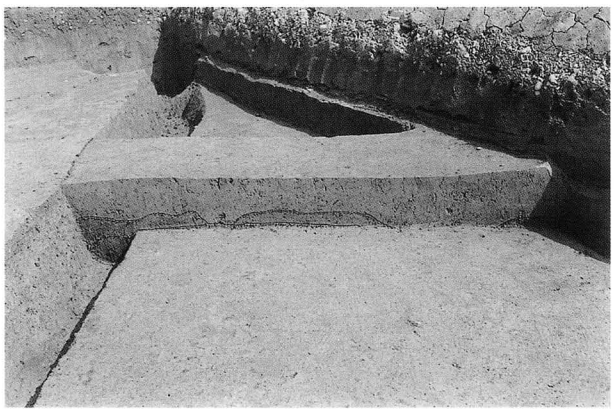


4　ＳＩ２竪穴住居跡掘り方断面（西から）

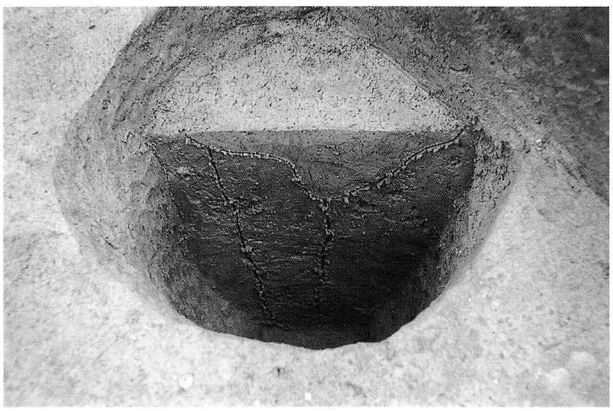
5　ＳＩ２竪穴住居跡断面（南から）



6　ＳＩ３竪穴住居跡全景（北西から）

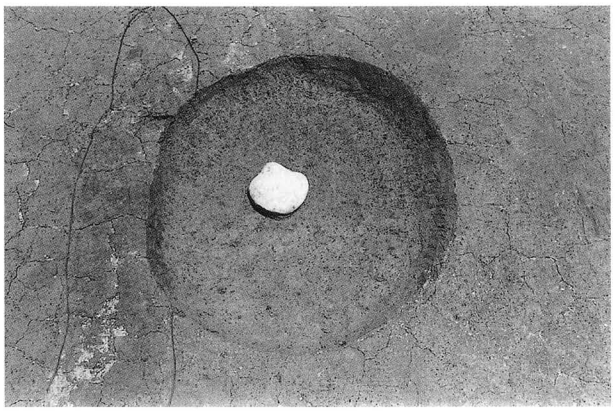


7　ＳＩ３竪穴住居跡ベルト断面（北西から）

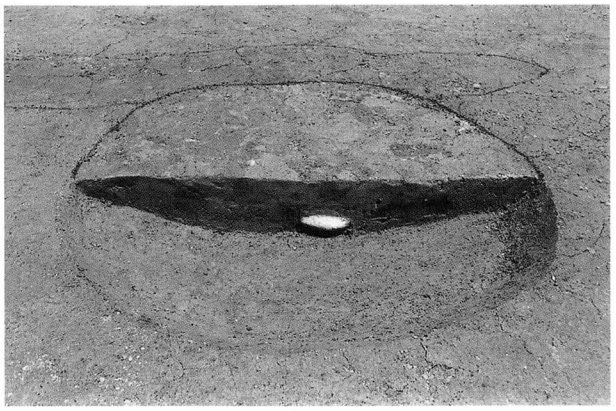


8　ＳＩ３竪穴住居跡ピット断面（北西から）

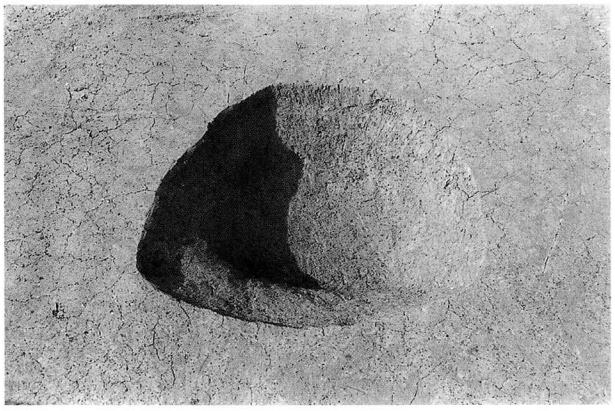
写真12　ＳＩ２・ＳＩ３竪穴住居跡



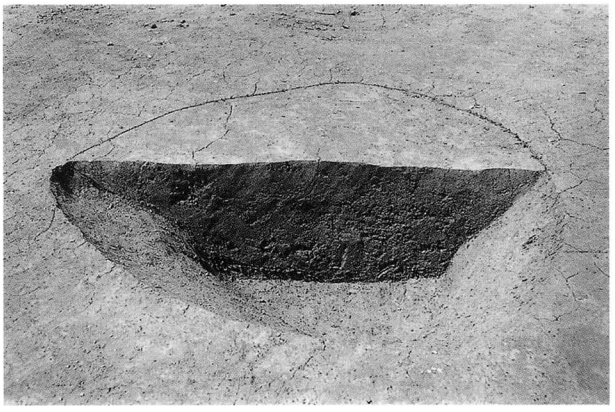
1　SK1土坑全景（西から）



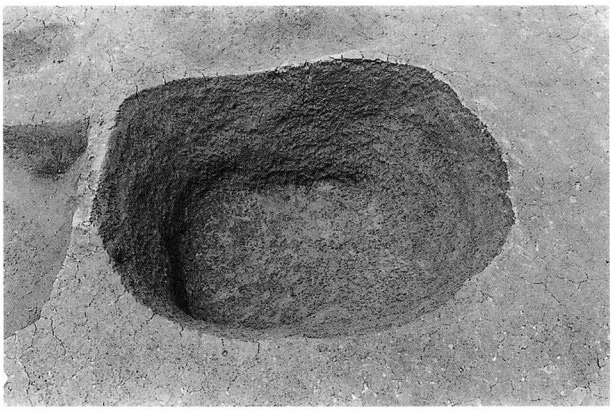
2　SK1土坑断面（南から）



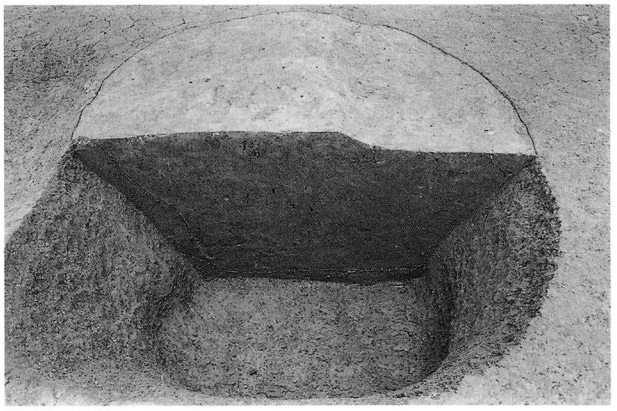
3　SK2土坑全景（南から）



4　SK2土坑断面（東から）

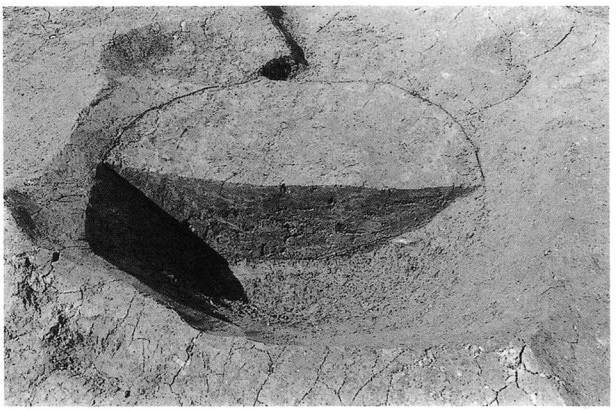


5　SK3土坑全景（東から）



6　SK3土坑断面（南から）

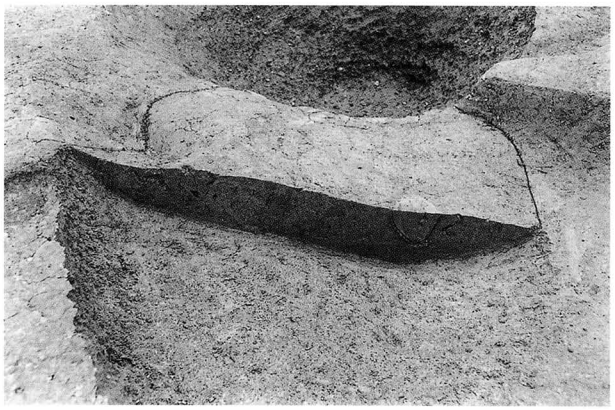
7　SK4土坑全景（東から）



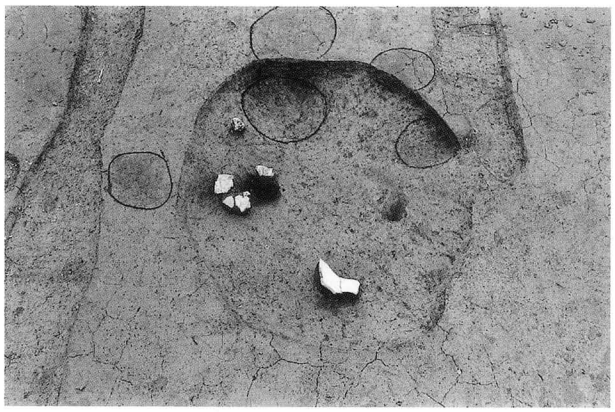
8　SK4土坑断面（南から）

写真13　SK1・2・3・4土坑

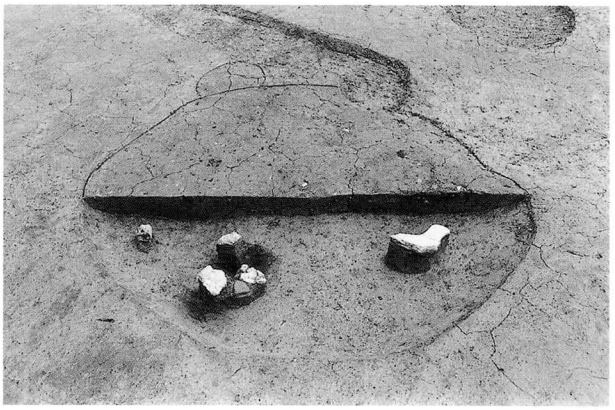
1　SK5土坑全景（東から）



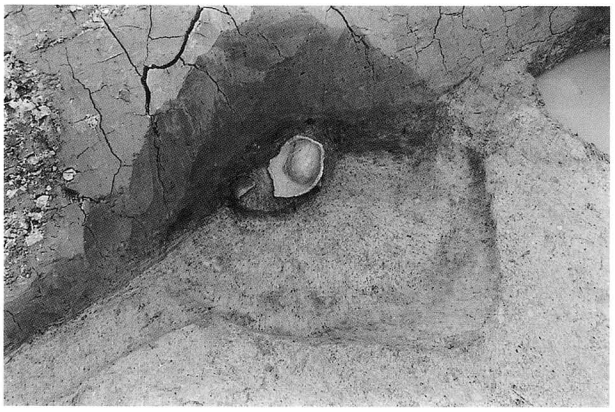
2　SK5土坑断面（北東から）



3　SK6土坑全景（西から）

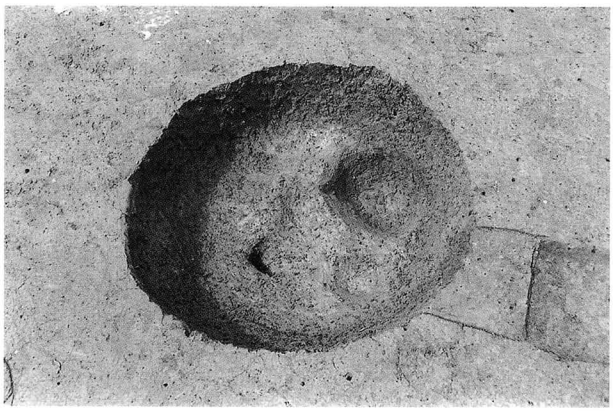


4　SK6土坑断面（北西から）

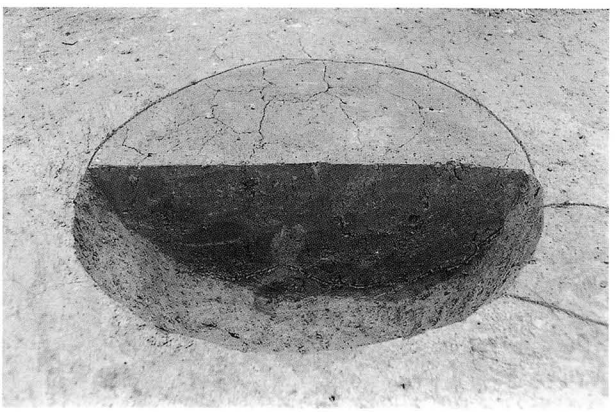


5　SK7土坑全景（南から）

6　SK7土坑断面（南西から）

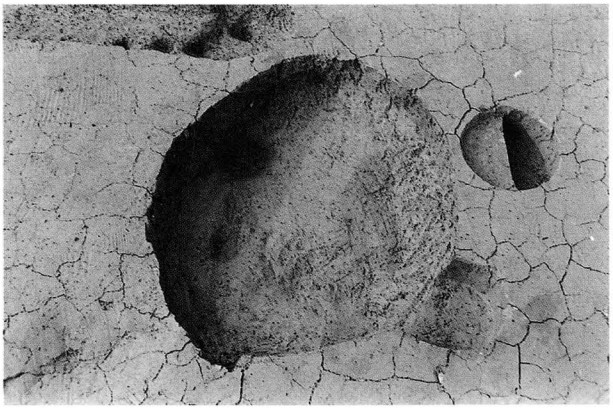


7　SK8土坑全景（南から）

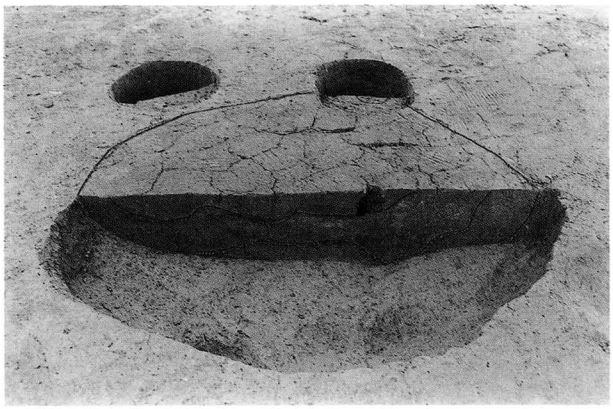


8　SK8土坑断面（南から）

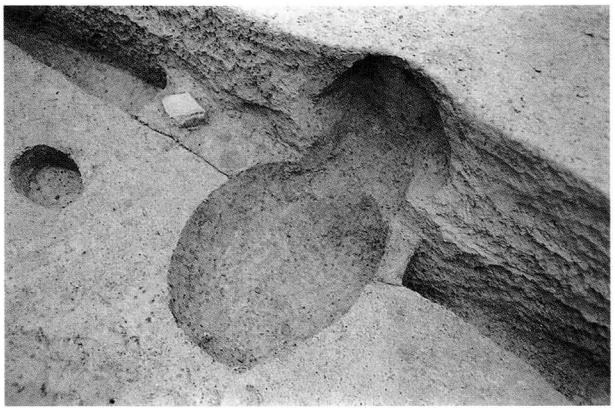
写真14　SK5・6・7・8土坑



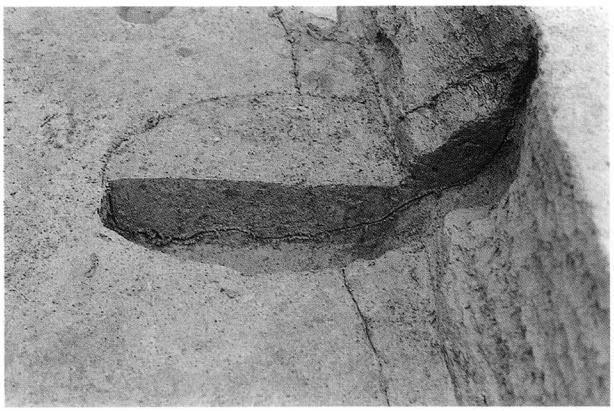
1　SK9土坑全景（南から）



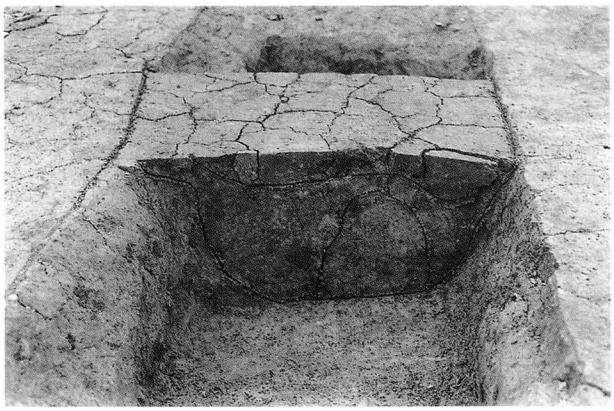
2　SK9土坑断面（西から）



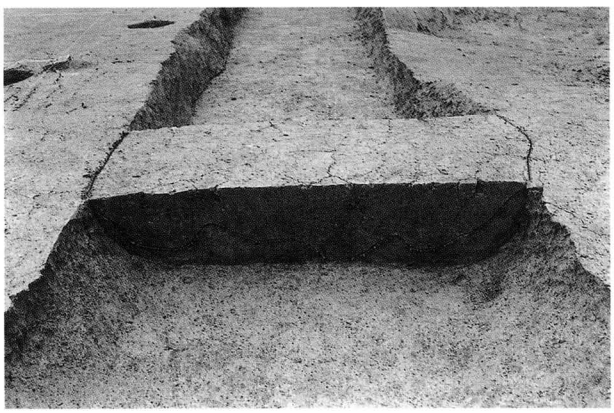
3　SK10土坑全景（北西から）



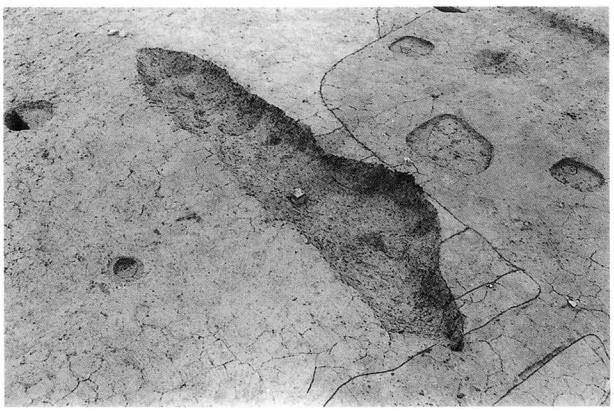
4　SK10土坑断面（西から）



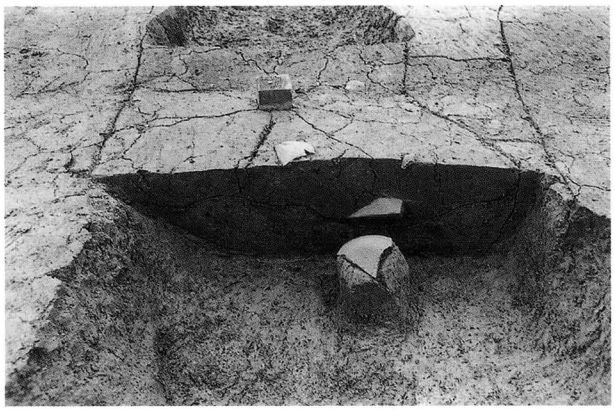
5　SD1溝跡断面A（東から）



6　SD1溝跡断面B（東から）

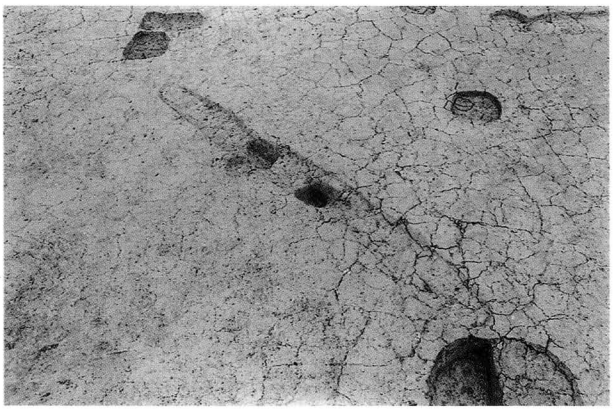


7　SD2溝跡全景（北東から）

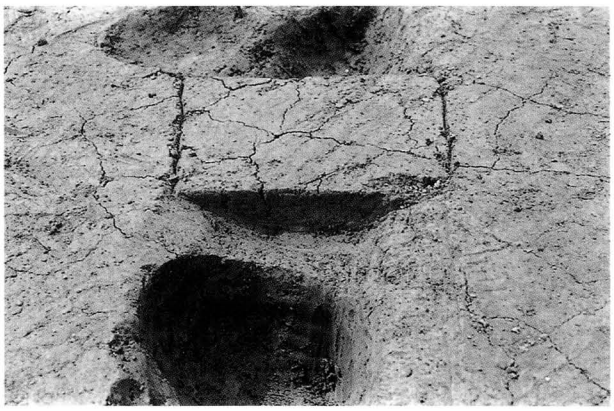


8　SD2溝跡断面（北から）

写真15　SK9・10土坑，SD1・2溝跡

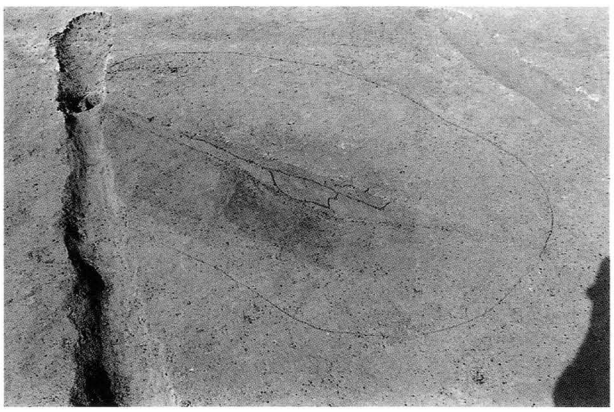


1　SD３溝跡全景（南から）



2　SD３溝跡断面（南東から）

3　SX１性格不明遺構全景（北から）

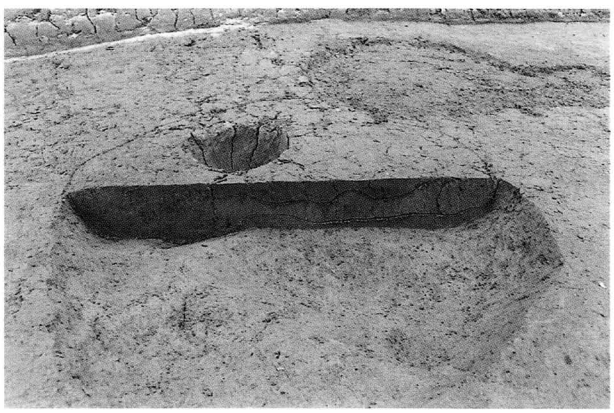


4　SX１性格不明遺構断面（南から）

5　SX２性格不明遺構全景（西から）

6　SX２性格不明遺構断面（西から）

7　SX３性格不明遺構全景（東から）



8　SX３性格不明遺構断面（南から）

写真16　SD３溝跡，SX１・２・３性格不明遺構

1
C－9

2
C－14

3
C－5

4
C－6

5
C－8

6
C－7

7
C－4

8
C－3

9
C－2

10
D－1

11
D－2

1 C－9（SI１１層　第12図１）　2 C－14（SI１１～３層　第12図２）　3 C－5（SI１３層　第12図４）
4 C－6（SI１２層　第12図５）　5 C－8（SI１ 床面　第12図７）　6 C－7（SI１ 床面　第12図６）
7 C－4（SI１１号土坑　第13図１）　8 C－3（SI１１号土坑　第13図２）　9 C－2（小溝37　第26図１）
10 D－1（SD２１層　第22図１）　11 D－2（SB１付溝３１層　第７図１）

写真17　非ロクロ土師器・ロクロ土師器－坏－（Scale；約1/3）

1
E－1

2
E－2

3
E－3

4
C－11

5
C－15

6
C－16

1 E－1（SD2 1層　第22図2）　2 E－2（SB1付溝3 層中　第7図2）　3 E－3（SI1 1層　第12図3）
4 C－11（SI1 1～3層　第12図8）　5 C－15（SI1 1～3層　第12図9）　6 C－16（SI1 5層　第12図10）

写真18　須恵器－坏－・非ロクロ土師器－甕－（Scale；約1/3）

1
C－12

2
C－10

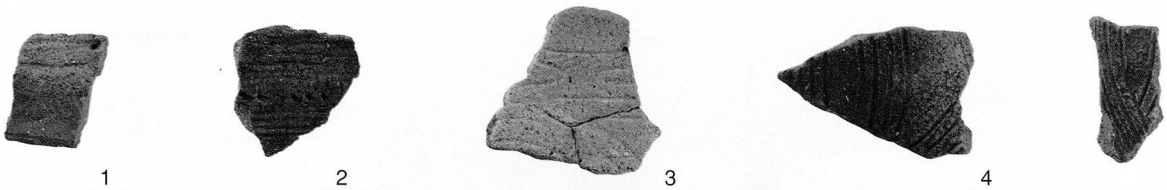
3
C－13

4
C－17

5
C－1

1 C－12（ＳＩ１１号土坑　第13図３）　2 C－10（ＳＩ１１号土坑　第13図５）　3 C－13（ＳＩ１１号土坑　第13図４）
4 C－17（ＳＩ２ 床面　第16図１）　5 C－１（ＳＫ７１層　第20図１）

写真19　非ロクロ土師器－甕－（Scale；約1/3）



1
A－1

2
A－3

3
A－2

4
A－4

5
A－5

6
P－1

7
P－2

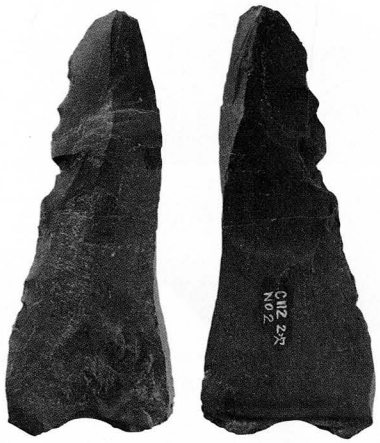
8
P－3

9
P－4

1 A－1（Ⅱb層　第27図1）　2 A－3（Ⅳ層　第27図2）　3 A－2（Ⅳ層　第27図3）　4 A－4（Ⅳ層　第27図4）
5 A－5（Ⅳ層　第27図5）　6 P－1（Ⅱ層　第27図6）　7 P－2（Ⅳ層　第27図7）　8 P－3（Ⅴ層　第27図8）
9 P－4（SI2　第16図2）

写真20　縄文土器・土製品（Scale；約1/3）

1
Kc－5

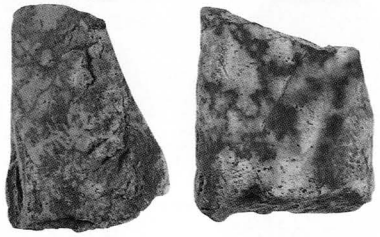


2
Ka－1

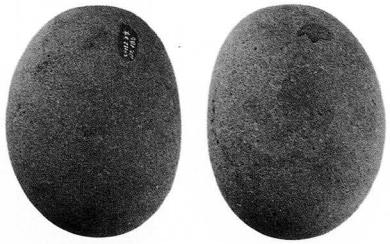
3
Kd－1

4
Kc－10

5
Kc－11



6
Kd－2

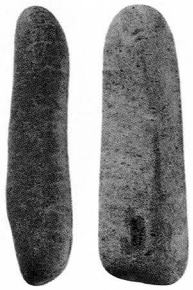


7
Kc－2

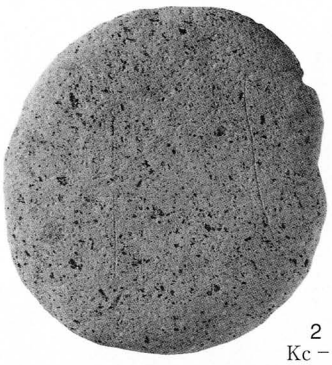
8
Kc－1

1 Kc－5（SD1 1層　第22図3）　2 Ka－1（SK4 1層　第20図2）　3 Kd－1（SK6　第20図3）
4 Kc－10（SI1 床面　第14図1）　5 Kc－11（SI1 周溝上面　第14図2）　6 Kd－2（SI1　第14図3）
7 Kc－2（SI2 周溝　第16図3）　8 Kc－1（SI2 第16図4）

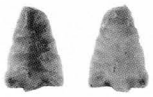
写真21　石器・石製品（Scale；1・3～8 約1/3，2 約2/3）



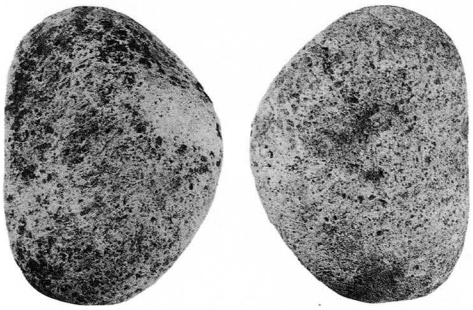
1
Kc－3



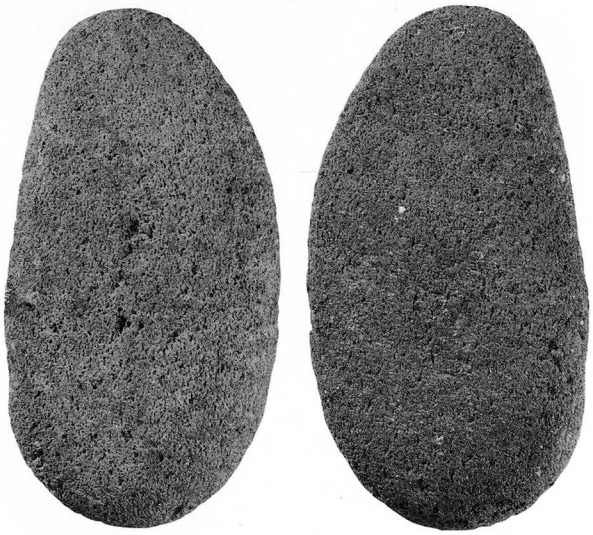
2
Kc－4



3
Ka－2

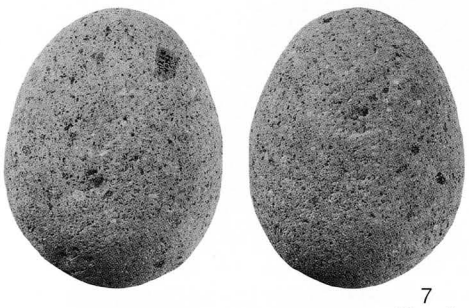


4
Kc－6



5
Kc－8

6
Kc－7



7
Kc－9

8
J－1

9
J－2

10
I－1

11
I－2

1 Kc－3（小溝39 1層　第26図2）　2 Kc－4（小溝39 1層　第26図3）　3 Ka－2（Ⅱ層　第28図1）
4 Kc－6（Ⅱa層　第28図2）　5 Kc－8（Ⅱ層上面　第28図3）　6 Kc－7（Ⅱ層　第28図4）
7 Kc－9（Ⅳ層　第28図5）　8 J－1（I層）　9 J－2（I層）
10 I－1（I層）　11 I－2（I層）

写真22　石器・陶器・磁器（Scale；1・2・4～12 約1/3，3 約2/3）

報告書抄録

ふりがな	おおのだいせき
書名	大野田遺跡
副書名	第2次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第252集
編著者名	荒井　格
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980－8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7－1　　電話 022－214－8894
発行年月日	2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおのだいせき 大野田遺跡 第2次	みやぎけんせんだいしたい 宮城県仙台市太 はくくおおのだあざ 白区大野田字 ふくろまえ 袋前14－3の 一部ほか	4100	1094	38° 12′ 54″	140° 52′ 52″	20000601 ～ 20000922	620.00㎡	消防署出張所建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大野田遺跡 第2次	集落跡	縄文時代	自然流路跡	縄文土器・土製品・石器・弥生土器	掘立柱建物跡の1棟には、柱穴の外側にピットがあり、その間に小規模な溝が付設されている。
		奈良・平安時代	掘立柱建物跡・竪穴住居跡・竪穴遺構・土坑・溝跡・小溝状遺構群・性格不明遺構・ピット	土師器・須恵器・礫石器・砥石	
		江戸時代		古銭・陶器・磁器	

仙台市文化財調査報告書第252集

大野田遺跡

第2次発掘調査報告書

2001年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課　022（214）8893

印刷　（有）　平電子印刷所
福島県いわき市平北白土字西ノ内13番地
TEL　0246－23－9051